

り迫つたりして居る布置の變化が、特色に富むで居た。

札幌平野から、其の小さい山岳の中を脱けて、旭川平野の方へ出て行くと云ふ事も、旅路の單調を破つて面白かつた。旭川は冬最も寒くて、夏最も暑いと云ふ、大陸的の氣候だと云ふが、その日は旭川測候所初まつて三十年、未曾有の暑氣だと云ふ事で、九十五度二分の暑熱であつた。驛前の宿屋宮越屋に入ると、先づ氷が欲しいほどであつたが、それでも東京に比べると、其の暑熱は凌ぎ宜いものであつた。でも人々は暑いと云つて、宿の女中などは汗だらけになつて居た。『北海道の人は暑がりだね』私はさう云ひながら、矢張り自分でも『暑い暑い』と云はねばならなかつた。

旭川の町には、何の奥行も深味もなくつて、たゞバサ／＼と乾き切つて居るやうな感じがした。軍隊が屯して居たり、本さんが成金振りを見せたり、月に十件も二十件も刃傷事件があつたり、さうした荒い『心』の多い、町としても未成品な旭川に、私は一刻も留まつて居たくなかつた。タイムスの若い人に送迎されて、たゞ一夜を過しただけで、一生に二度と行かうと思はないやうな所であつた。人氣も何となく粗雑で、淺薄な町並からして厭はしかつた。

然し天鹽から北見の方に出て行く宗谷線には、月日の恩寵に依つて、何時か一度は乗つて見

たいと思つて居る。何んなに口説かれても、深か間になれさうでない旭川であつても、その奥の方には私を驚かしてくれるこの國の産業が、渦を卷いて居ることであらう。私はその宗谷線に思ひを残して、あはたゞしく旭川の町を去つた。

下富良野へ出て行く汽車も、不愉快なものであつた。何の線に乗つて見ても、二等客は大抵長々と寝そべつて、無智や猛悪らしい面構へを見せて居た。北海道の人達は、汽車に乗つた時は寝ねばならぬほどに、働いて居るのであらうか。それとも汽車の二等室は、時を問はず、寝る所と極めて居るのか。私は何の線でも、二等客の寝そべつて居る姿のみを見せつけられて、不思議な氣持がした。

材木を積んだ汽車が、小火災を起して、不愉快な汽車はゴト／＼と、喘ぎ／＼下富良野に着いた。私は一刻も早く涼しい釧路へ行つて、安らかに眠りたいと思つた。

狩 勝 國 境

登別温泉の三日、室蘭の一夜を過ぎて後、私は湯の川温泉の湯の川ホテルで、五日餘りを唯ぼんやりと暮して來た。そして今日は、聯絡船に乗らうと思つて、函館まで出て來たが 東

南北が強くて船が揺れると脅かされ、勝田支店の客となつて、函館泊りと極めた。思へば東京を出てから、今日で二十一日目となつた。その二十一日の間に、私は何處と云つて見物しやうともせず、たゞ温泉に浸ることを唯一の楽しみにして、ふやけたやうな日夜を送つて来た。旅から旅へ漂泊の……と云つたやうな感が、私の心持を感傷的にして、妻や子供達の姿が、今更のやうに懐しまれるのであつた。そして日夜の営みや生活の苦勞からのがれて、今日まで包擁されて来たことは、北海道の風物と人物とに、心から感謝せねばならぬことであつた。私は何んな事があつても、北海道に對して、皮肉な事は云へない男になつた。

それにしても、暑い旭川を後にして、上富良野、下富良野と過ぎ、落合驛から狩勝國境の方へ走つて行つた時の氣持は、忘れることの出来ない旅程の一つであつた。札幌を發つ時は、北海タイムス社の山口編輯長に、『まア國境を越して見給へ、初めて北海道らしい氣持がしますから……』と云はれたが、私は汽車が喘ぎ／＼登つて行つた頃から、その眺望の雄大さを想望して居た。神居古潭の風景に、聊か失望氣味であつた私は、刻々頂上に近づく汽車の窓に凭れて、眼を兩側の山の姿に注いで居た。北海道もこゝ等まで来れば、その心髓に深入りしたとも云へるので、期待と想像とが、刻々に實現して來るかと思ふと、果はジツとして居られぬやう

な、或る燥焦を感じたりした。狩勝國境の眺望——、それは果してどんな色や形をして、私の前に展たて來たであらう。

汽車は山中の名も無い驛で、補助機關車を増し、やがて暗い／＼トンネルに入つて行つた。驚はしきりに囁り、涼しい風は車内にまで漂ようて來た。……と、パツと明るくなつて、汽車がトンネルを出た刹那、右の車窓に當つて展開したのは、十勝平野の廣漠として大觀であつた。折柄、午下りの陽は薄くどんよりとして、満目すべてを鼠色にぼかして居たが、大きなSカーブを描きつゝ、峠を平野の方へ、遠く／＼降つて行く光景は、氣持は、とても筆舌では盡くされぬ雄大な、壯大の眺望であつた。内地の何處に、斯うした大陸的な、山野の眺望があらうぞ。内地の何處に、斯うした大陸的な、男性的な曠野の風光があらうぞ。

私は起つて、窓に依つて、思はず『宜いな宜いな』と連呼せずには居られなかつた。ゆる／＼勾配を引いて、裾野から平野へと流れて行く地形の美しさは、到底内地では何處へ行つても、見ることの出来ない大きな廣い眺望であつた。見渡す限り、野と原と田と畑の連続で、遙／＼向ふの地平線は、大きな海のやうに見えたが、そこもまだ廣い平野の續いて流れて居る所であつた。

私は『ほんとに来て宜かった』と思はずには居られなかつた。此の廣い野原の中に、新得と云ふ小驛があつて、そこで買つて食べた辨當のお茶の美味かつた事をも、私は忘れることが出来なかつた。汽車はやがて帯廣を過ぎ、池田を過ぎたが、その時、十勝川は右に其の姿を現し、久しく水を見なかつた旅客の眼に、爽快な涼しさを囁いたりした。

釧路に着いたのは、夜八時を過ぎた頃であつた。タイムス支局の吉島力兄に迎へられて、私は角大旅館の客となつた時、先づ『成程、釧路は涼しい所ですね』と、嬉し氣に云はずには居られなかつた。

釧路の港

吉島君の他に、釧路新聞の中山青果君も参加して、私は浦見町の料理店鷹の羽に案内された。そこは釧路港を一目の下に見渡すやうな高臺にあつて、季節は土用の中だと云ふのに、清涼、秋のやうな風が吹き渡つて居た。

私は名物の濃霧を見たいと云つたが、その日は晴渡つて居て、淡い霧さへも見る事が出来なかつた。毎年、五六七の三ヶ月は、毒分を含んだ濃霧が、時を定めず襲うて来て、何とも形

容の出来ぬ壓迫を感じると、吉島君は語つて居た。晴れた日でも、何日、襲來するか判らぬので、此の通り雨外套を持つて歩いて居ると、青果君は語つたりした。然し八、九、十の三月は、その濃霧も無くなつて、秋のやうに晴れ渡つた天氣となり、それが何よりも樂みである

と、吉島君は元氣好い態度で語つた。

釧路藝者が三五人、やがて私達の前に現れた。何よりも先づ追分節をと云ふので、一人二人は唄つてくれたが、その節も絃も所謂藝妓化して居て、私が想像して居たやうな、悲壯な節調は、聴くことが出来なかつた。たゞ鷹の羽の娘分だと云ふ八千代子と云ふ十八九は、恐ろしく才走つて居て、新之助や鬼丸を取沙汰して居たが、北海の東の涯の港にも、さうした美しい才はじけた妓が居るかと思ふと、私は不思議な氣持がした。町ではちぬの浦孤舟とか云ふ男が、大和軍歌の看板を掲げて、奈良丸張の浪花節を辯じて居たが、さうした漂泊の藝人達に、秋波を送つて居るやうな妓達の生活を、私は様々に想像した。濃霧のために不快ではあるが、北海道中でも最も涼しいと云ふ釧路の港町は、丘陵があつたり、川があつたりして、町並に變化を見せて居た。

町の宿屋には、『何某君選舉事務所』と云ふ看板が、此所にも彼所にも立つて居た。道會議員

選挙のために、全道の人気は立ち初めて居たが、然し財界不況の影響を受けて、何處も沈靜して居ると云ふ話しであつた。釧路の港も晴れた日には、屋根の上に衣類を乾燥して居て、それが丘陵の上から、異様に眺められたのみで、町の軒並には、或る疲勞が漂うて居た。

『ガスさへ無ければ避暑地として、宜い所なんですがね。涼しい事に於ては、ほんとに想像以上ですが…』

私はさう云つて、勧められる儘に盃の数を重ねた。火鉢に炭火をカン／＼いこして、夜は厚い蒲團を掛けて寝るといふやうな海岸町が、日本の何處にあらうぞ。輕井澤が涼しい、中禪寺湖畔が涼しいと云つても、海岸の町の中で、土用中に炭火や厚い蒲團の要るやうな所が、日本の何處にあるか。根室や北見の産物を集中して、各方面へ輸送する中継港として、釧路の將來は益々多望であると、吉島君は様々に説明してくれた。

私は二夜を釧路に送つて、吉島君の歡待を受けた後、三日目には再び汽車中の人となつて居た。十勝川の流れや、十勝平野の廣漠や、狩勝國境の眺望や、私は、それ等の矚目の光景に對して、一種の別離を感じずには居られなかつた。何時の日か、再びこの大觀に接する日があらう……さう思ふと、私は涙ぐましい氣持になり、何時までも／＼車窓に凭れて、十勝原野に別

れを惜しんだりした。

帶廣にも下車したかつたし、池田から網走線に乗つて、北見の方へも出たかつたが、私は何れも割愛した。そして下富良野から瀧川までを車窓で、空知川の岸邊を眺ることに、私の心は燃えて居た。そこには昔、國木田獨歩の歩いた道が、野が、原が、其の儘に展べられて居るであらうか。

空 知 川 畔

廿八日朝、釧路發の汽車に乗つた私は、その夜更けて、苦小牧に泊らねばならなかつた。釧路で吉島力兄から受けた友情に、私の心は感激しながら、汽車の窓では、かなり寂しさを味はねばならぬことを、私は心細がつたりした。

苦小牧では廣島屋と云ふ、第二流の宿屋に泊つた。追分で泊つて夕張炭山を見たかつたし、苦小牧では、製紙工場を見たかつたが、私の感情は、登別温泉の方へのみ、力強く引付けられて居た。白老驛に下車して、アイヌ部落を訪ふことすらも、私は何だか大儀に感じて、一刻も早く山の温泉場に落着きたかつた。『何うせ、又來るから……』私はさう思つて、何も彼も一

度に見てしまふのは、惜しいやうな氣持さへして居たのであつた。

『空知川の岸邊だけは、注意して御覽なさい。未だ未開拓の森林が、必ず君の眼を喜ばせるから』と、札幌を發つ時に、山口編輯長や河合部長が云はれた。私も下富良野から瀧川までの車窓で、空知川の風光を眺めることに、興味づけられて居た。午後五時から六時半まで、その一時間半の間、空知川の流れば、常に車窓の右にあつて、釧路の酒にたゞれた私の心持を、引しめてくれた。時雨のやうな雨が、過ぎて行つたかと思ふと、大きな虹が架かつたりして、奔茂尻から野花南、下蘆別のあたりは、川幅も大きく開けて美しく見えた。五百年、千年その儘の原始林は、川の彼方に鬱蒼として、そこには山鶯が春のやうに囀つたりして居た。

その昔、國木田獨歩が歩いたのは、何の邊であつたらうか。彼は札幌から空知に出かけ、更に歌志内から空知川の岸邊に出て、開墾地一萬五千坪を撰定したが、唯それぎりで一家の事情は、彼を北海道へ旅する機會を與へずに、打ち過ぎてしまつたのであつた。その頃はまだ汽車も通つて居ず、歌志内から空知河畔へ出るには、案内人が入るほどに、道らしい路も開けて居なかつたと云ふ。『あゝ山林に自由存す』と謳つたのも、その大きな深い自然の姿に、驚異の眼をみはつたのも、思へば二十餘年の昔となつて居た。獨歩には此の『空知川の岸邊』の他に

も、北海道に題材を取つた作篇が、一二篇あるやうに思物が、若い時から眼を未開の天地に着けて、そこに立命の世界を見出さうとした獨歩の志業は、哀しいものに違ひなかつた。——私は車窓にもたれて、様々の思念に沈みながら、岩見澤で室蘭行に乗換へた。

苫小牧は磯臭い氣分が、室の中にまで漲つて居るやうな町であつた。でも追分から、廣い廣い斜面を、海の方へ下つて行く氣持が、私には爽快であつた。北海タイムス社の厚意に依つて、神居古潭、旭川、狩勝國境、十勝平野、帶廣、釧路と云ふ風に、北海道の中部を瞥見し得た私は、いよゝ明日、登別温泉に落着いて、そこで二三日を靜かに暮らせるかと思ふと、何とも云へぬ嬉しさに、口笛を吹いて見たいやうな氣持になつたりした。

小田原から熱海への汽車よりも、少し大きい位の玩具のやうな汽車で、私は廿九日の正午を登別温泉に向つた。二等客も、三等客も、多くは近在の人達のみで、中に二人か三人ほど、東京の客人が居たやうであつた。中には日返りで行つて来るやうな女連もあつて、車中は賑やかに混雜して居た。

登別温泉

汽車は緩やかな勾配を喘ぎ／＼上つて行つたが、次第に山嵐の中に入つて行くやうな氣持が、私を喜ばせた。紅葉谿近くなつた時には、懸崖の上を行くので危なかしいと共に、紅葉の頃にはざぞ景色が好からうと、想像されたりした。深緑の色は四邊を俺ふて、山鶯の啼く音が雨のやうに聞え、爽かな涼風が音づれて來た。

鹽原や箱根の谿などは、比較にもならない程に、その谿谷は浅かつたが、然し登別の温泉部落に入ると、小さい新開の町を構へてゐて、そこには十餘軒の温泉宿を中心として、郵便局や西洋料理店や、雜貨店や青物屋や、料理屋や菓子屋や、玉突場を兼業とする家などもあつた。第一瀧本の前を左に折れて、湯の川に架かつて居る木橋を渡つた時の感じは、それでも勝れて居る眺望の一つであつた。私は湯の瀧旅館の客となつて、その二階で三日を過ごしたが、流れの音も温水であれば、それが數條の瀧となつて、落下して居る姿も、勝れた變つた光景であつた。

明礬泉、鹽類泉、アルカリ泉と二三種を有つて居るのも、登別温泉の特色であつた。温泉宿の内湯の他に、瀧の湯、鹽の湯、地壽の湯と、共同浴槽が三ヶ所に在るのも、温泉場らしい氣分がした。炎天の盛りでも、八十二三度より暑くはなく、室内には炭火をカンカン長火鉢に入

入れて居ても、それが少しも不調和には見えない程に、常に涼味が流れて居た。朝晩は秋十月のやうな冷涼さで、厚い蒲團を掛ねば寒いほどの氣温であつた。内地の温泉場で、日光の湯本を他にしては、何處に斯うした涼しい所があらうぞ。仙臺の青根温泉も涼しかつたが、然し登別に比べると、まだ夏の景色であつた。それにミルク色した温泉は、瀧となり瀬となり川となつて、溢れ流れて居るほどに、その豊富なことが、内地の諸温泉では見ることの出來ない強味であつた。

食べ物には、取立て、云ふほどの美味はないにしても、室蘭に近いだけに、海魚も乏しくは無いらしかつた。一日三食三四圓位で、涼しい一夏が送れるかと思ふと、登別温泉は北海道に在る諸温泉の中でも、最も傑出して居ると云つて宜かつた。夜になると、燈火に小蟲が飛んで來るのみで、蚊が少しも出ないのも、心安く寝られて嬉しかつた。上州の草津や四萬も涼しいといふが、北海道の山の温泉としては、何としても登別が、日本のものであつた。藝妓二三十人に、ゴケ屋の酌婦五六十人が、遊樂氣分を湛えて居るのも、さう浮華淫蕩には見えなかつた。湯治場としても、遊樂本位の温泉としても、登別は兩様に、お客様次第といふ心持が見えて居た。

然し藝妓や酌婦が、大ビラに宿屋へ出入して、お客の枕席にまで侍して居るのを見て、私は『何處も同じだな』といふ氣持がした。宿屋の女中は一切御酒の御相手をせず、たゞ御飯のお給仕のみをするので、自然に藝妓や酌婦の必要が生じて、それが登別繁昌の一つになつて居るのであつた。南部や津輕や、札幌や函館や、さうした所に生れた髪の濃い女達の顔には、淪落の影よりも、安んじて生きて居ると云つたやうな、幸福らしい様子が見えた。

私は瀧の湯にうたれた後、更に地獄谷の噴湯口の方へ行つて見やうとした。『旦那さん、氣を付けて入らつしやい。足の下から熱い湯がブク／＼と湧いて居ますから』と宿の人に云はれて、私は恐る恐る噴湯口の方へ歩いて行つた。

湯湧く山

噴湯口までは、三丁に近い道程であつた。第一瀧本館の後の方に出ると、もう硫黄の香が鼻を衝いて、濛々と立のぼる湯烟が、青い樹々の間を這つて居た。

噴湯口の一廓は、岩も土も赤色をして、物凄いままでに、湯烟が此所にも彼所にも立のぼつて居た。沸り立つ音は轟々として、中には湯柱を立て居る所もあつた。蜂巢状をした幾多の小噴

湯口は、月日と共に異変するの、硫黄岩で埋まつた所もあれば、新しい湧出口をつくつて、凄じくたぎり立つて居る所もあつた。宿の駒下駄の底にも、その熱度を感じるほどに、四邊一面が熱湯の丘になつて居た。

『何て凄い所でせう。九州の別府温泉だつて、こんな凄い所はありませんよ。登別の特色は湯の豊富なことですね』

斯う云つて、話かけた若い學生があつた。リウマチや脳病に功能があると云ふ此の温泉は、その昔アイヌが発見して、小屋掛けして浴して居たと云ふ話であつた。それを今日のやうに、世に知られる温泉場としたのは、瀧本老人のおかげである云つて、温泉神社の境内には、頌徳の石碑が建てあつたりした。定山溪温泉よりも古くて、然も設備が行届いて居る上に、温泉量の豊富なことが、何と云つても登別の強味なのであつた。札幌からは遠いけれど、室蘭の海に近い上に、函館からするには、森から噴火灣を室蘭に渡りさへすれば、さう遠い道程でもない、毎季相當の入浴者で、益々賑はつて居ると云ふ話であつた。

然し何と云つても、登別温泉が繁昌するのは、雪の十二月から四五月までであつた。北海道の人達は、その季間を越年すると云つて、續々登別温泉に出かけるさうであつた。一年の殆ど

半を吹雪と積雪とで磨げられて居る人達は、その雪の季節を休養時として、温泉に悠遊自適するのであつた。従つて盛夏の七八月は、最も閑散な時で、僅に一二泊の旅行者や、東京からの避暑客に依つて、温泉場氣分を醗酵して居るらしかつた。

『もう正月近くなりますと、疊一枚にお一人と云ふ程に、お客さんが澤山になりました……』と、宿屋の主婦は大きな腹を抱へて語つて居た。そして藝妓や酌婦を宿に出入させるのは、お客様の便利の爲で、何うも致し方がないと云ふやうな話もあつた。宿の女中に淫らな所業をさせないためにも、さうした開放的な制度の方が、登別には適いらしかつた。

私は二度も三度も噴湯口の方へ散歩して、大湯元近くまで見物した。上の方の廣い湯沼では、湯の花を採取して居たが、何んなに濫用しても、この温泉が老衰期に入るのは、百年二百年の後であらうと思はれるまでに、その量は豊富なものであつた。別荘の四軒や五軒が出来て、湯を引いて用ゐた所で、熱海のやうに其の量の窮乏を訴へるやうな事は、斷じて無いらしく思はれたりした。

そこから山路を二里弱で、カルルス温泉に行かれたが、生憎の雨で、私は行くことが出来なくて、惜しいことをした。内地から態々行つて見ても宜い温泉場として、私は登別を擧げて置

きたい。札幌に行つた人が、必ず一度は定山溪温泉を見ねばならぬやうに、北海道へ旅した人は、函館近くの海の湯の川と、室蘭近くの山の登別とに、必ず一度は行つて御覽なさいと、私は心からお勧めしたい。

その登別を立つて、室蘭の丸一旅館に寝た時、私は何と云ふことなしに『も少し居れば宜かつた』と云ふやうな氣持がした。

千人風呂

釧路の港は廣々として、浦見臺から見渡した眺望は、私に明かるい氣持を起させたものであつた。暗いガスに惱まされたり、ドス黒い浪の色に、鬱陶しさを覺える折柄でありながら、私が浦見臺から見た折の釧路港は、繪巻物を展げたやうに、平面的に美しかつた。

然し初めて見た室蘭の港は、何だか凸凹して居て、その位置が小さく混雑して居た。神戸を想はせるやうな函館、長崎を想はせるやうな小樽に對して、釧路を横濱とすれば、室蘭は横須賀のやうな氣持がした。これはたゞ私がさう感じたのみで、港としての歴史や位置や特色などを、仔細に考察すれば、この氣持には根柢から相違があるかも知れなかつた。私はたゞさう感

じた儘を、無謀に言ふ迄に過ぎない。

私は其の室蘭から森へ渡つて、駒ヶ嶽の雄姿に見参しながら、その日の黄昏頃には、湯の川ホテルの客となつて居た。函館日々新聞の主筆林濁川兄は、三國久畫伯と同郷の友であつたと共に、私のためにも親切な同情のある親友であつた。彼は『宜う來た、宜う來た。まア二三日、遊んで行けよ』といつて、私の大きい方の鞆を抱へてくれ、湯の川温泉の湯の川ホテルへ引張つて行つてくれた。そして『登別も宜かつたらうが、湯の川温泉には又湯の川の氣分があるよ』と云つて、大きな千人風呂に、ザブンと飛び込むで見せたりした。

この前、芳明館に泊つて、根崎の大瀧温泉を見たゞけの私に、湯の川ホテルの結構は、大きくて珍らしく且つ愉快なものであつた。それに宿の主人の續秀太郎君が、死んだ長田秋濤の友人であつたり、馬を愛し好むだり、一種の教養ある人格の人であつた事は、私の最も愉快に思つたことであつた。續君は『偽物の森田草平さんに一杯食はされましたが、あなたは林さんの紹介で、ほん物の天民さんと判りました』など云つて、商賣氣を離れ、十年舊知のやうな溫情を見せて、いろ／＼と優遇してくれた。その湯の川ホテルを獨力で創業した事や、アイヌ風呂や遊泳の千人風呂や、家族風呂など、みな自分の設計で、中には自分が手を下して、造り上

げた所もあると、話したりした。

温泉場の浴槽として、湯の川ホテルの千人風呂は、内地の何處にも無いだけの大きさと廣さと、清らかさを持つて居た。無色透明の鹽類泉が、何の屋根も掩はぬ野天の五十間四方もあるやうな、三個の大きな浴槽に溢れて居る状態は、眞に千人風呂の名に背かぬものであつた。圓形のアイヌ風呂にも家族風呂にも、絶えず温泉が流れて居て、ザブンと飛び込んで遊泳するに宜いやうな温泉は、私の歩いた何處の温泉場にも、見ることの出来ない大規模のものであつた。伊豆の相模屋の千人風呂などは、足許にも寄られなかつた。

この千人風呂の霧島と云ふ部屋で、今年二月上旬、金満家の息子と半玉二人とが、モルヒネを仰いで三人心中した話は、私の心を動かすに十分であつた。階下の日進と春日の二室に寝て居た私は、階上の霧島に移つて、三人の毒を仰いで死んだ疊の上に、一人淋しく冷たい夢を見たりした。

『湯の川温泉三人心中……と言ふ物語が書けさうだね』

私が斯う云ふと、濁川兄は笑ひながら『新聞にもいろ／＼出たけれど、君は一つ君の立場で、ほんとの事を書くんだね』と云つたりした。山の登別は涼しかったが、海の湯の川は蟲が多く

て、夜になると蚊張に入らねばならなかつた。

石川啄木

三日は林濁川兄に伴はれて、立待岬に石川啄木の墓を展した。その前に、『八幡神社に参詣して見やうか』と云つて、濁川は雪車の終點から右に、山の中腹にある八幡社へ私を引張つて行つて、いろいろと説明してくれた。

その日はかなり暑くて、歩くと汗がダク／＼と、額や背に流れて出た。新築して間もない八幡の社殿には、木の香りが新しく匂ふて居て、大森濱までが綺麗に見渡された。そこから五六丁を歩いて、立待岬近くの墓地に入ったが、啄木の木標は容易に判らなかつた。濁川も私も汗になつて、急な勾配を登つて行くと、左手に粗末な木で圍つた、一坪ほどの墓地が見えた。そこには『石川一の墓』とした墓標と、『石川啄木墓碑建設地』とした木標が、淋しく建られて居た。私は帽を脱いで、碑前に軽く黙禮して立つた。

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたばむる——その歌を書いた木標は、もう取除かれて居た。今は啄木會の人達が、石碑を建立するために、盡力して居るさうであるが、私は

斯うした木標だけでも、啄木の短かつた生涯を想ふに、適はしいと思つた。函館を振出しにして、小樽、札幌、釧路といふ風に、代用教員や新聞記者を勤めて居た啄木の半生は、數奇を極めたものらしかつた。明治四十年の函館大火に、すべての人みな狂つて居た中に、彼一人は家人を心配させぬために、盆踊を踊つて見せたと云ふことを、私は想ひ起したりした。その火事に焼出されて、小樽の方へ逃げて行つた二十三歳の彼は、もうクロボトキンを讀んで居たのであつた。貧乏と戀と不平と生活苦と、その中に生きて居た啄木の面目が、私の眼前に浮んで出たりした。

私達は立待岬の芝生の上で、冷たいサイダーを飲んだ後、料理店勝田の客となつてくつろいだ。そこには水電の運給部長有田法學士が居て、私のために質素な饗宴を開いてくれたのである。有田君は二十何貫もある程に肥満して居たが、その父君は群馬縣知事時代に、瘦驅鶴の如しと云つた風采をして居られた。『有田さん、私は尊父と二度面會しました』と云ふと、『今は津で市長をして居ますよ』と云つて、更に話がはずんだ。追分節では函館第一だと云ふ老妓おせんが居て、ほんとの追分節を唄つて聴かせてくれた。勝田の料理には、取立て云ふほどの特色が無かつたけれど、庭の樹立には多少の幽邃味があつた。

根崎氣分

私達はそこから更に、菊水と云ふ料理店へ行つて、函館灣を眺めながら濁川兄と二人で語つた。隣席には支那人三四人が居て、巧みな日本語で藝妓と戯れて居たのも、函館らしい氣分がした。中には春は嬉しやを唄つたり、新磯節を唄つたりして、色男らしく濟まして居る男もあつた。藝妓達は旦那旦那と云つて、少しも氣取るやうなことはなく、その職能を發揮して居るらしかつた。その旦那旦那と呼ぶ語調に、私は可憐な北海道の氣分を感じたりした。札幌の幾代を見なかつた事に、淡い心残りを感じて居た私も、釧路と函館では軟柔郷の情趣に浸ることが出来た。何處へ行つても『これは美味しい』と云ふ程の物に、舌鼓を打ち得なかつたにしても、また『なるほど美人だ』と感ずるほどの女に、見參し得なかつたにしても、人々は心から親切に、私を待遇してくれた。

夜更けて、湯の川ホテルに歸つてからも、私は別に、旅の淋しさを感じなくても宜いほどに、人々の厚遇に酔うて居た。

四日は函館商業會議所副會頭太刀川善吉氏に招かれて、根崎の若松で馳走になつた。有田法

學士や林濁川兄も參加して、夜更くるまで濤の音を聽いて興じた。

太刀川氏は函館の長者で、百萬分限であると云ふのに、壯氣潑瀾として、人情の曲折を解し、殊に座談の巧者であつた。函館西檢の奴といふ妓や、湯の川藝妓三四人が侍して、追分やら津輕の唄やら、果は主客の隠し藝などが出て、興の盡るを知らなかつた。『今は何と云つても、鳥賊のさし身を食べねば……』と云つて、濁川君は主婦に命じてくれたが、一尾一錢ほどの高價な鳥賊は、料理店でも珍重せぬのか、私は遂にその鳥賊を食ふことが出来ずに、北海道の夏を去らねばならなかつた。

私は前にも云つた通り、湯の川の芳明館を振出しとして、小樽の越中屋、札幌の旭館、中村屋、旭川の宮越、釧路の角大、苫小牧の廣島屋、定山溪の元湯ホテル、登別の湯の瀧、室蘭の丸一、湯の川の湯の川ホテル、函館の勝田支店と云ふ風に、随分諸所に泊つて見た。料理店では釧路の鷹の羽、小樽の何とか云つた家、函館の勝田、菊水などを見たが、何處へ行つてもこれは美味しいと思つた物や、北海道らしい地方的の色彩のある食ひ物には、不幸にして見參する事が出来なかつた。季節物の鳥賊や、鯨や鮭ばかりも困るけれど、どぜう鍋や鶏肉や、卵や爪の料理では、餘りに智慧が無いやうに思はれた。根崎の若松なれた、落ち着いた小じんまりし

を家ではあつたが、料理は他から取るとかで、別にさうした特色は見ることが出来なかつた。然し北海道は、宿屋の設備が整つて居た。中村屋、角大、丸一、勝田などは、内地に持つて來ても、二流とは下らぬ格式を具へて居るやうであつた。別に輕薄な追従口も叩かず、何事もお客まかせにして居る上に、若い女中達に御酒の相手をさせないのも、宿屋としては當然の要意であつた。然し酒を酌む客達のために、公然と藝妓を入れたり、中には酌婦を呼ばせるやうな所もあるらしかつたが、これは宿屋として決して宜い事ではなかつた。折角女中達に伴ふ危険を防止しても、藝妓などを出入させたのでは、宿屋の空氣全體の上から見て、面白い結果は見られないであらう。客人の改良も第一であるが、宿屋の方でも頭押へて尻隠さぬやうな滑稽な沙汰は、面白くないと思はれた。

登別や定山溪や湯の川なども、何うかと云へば遊びの温泉場であつて、殊に登別には酌婦なぞ居たが、私は別にそれを淫蕩だとも感じなかつたし、浮華だとも見なかつた。一つには旅にふやけて居た私の心持が、さうした若やいだ情調の中に浸ることを、好みもしなかつたに因るが、湯の川にしても登別にしても、私は藝妓や酌婦の他に超然として、靜かに眞面目に湯治氣分に浸ることが出来た。そして人知れず、『私も老いたな』と、思つたことであつた。

根崎の夜更けて後、私は人々に別れて、海岸を歩いて見た。昆布の獲れる濱には、烏賊釣船が澤山出て居て、湯の川ホテルの三層樓の燈火が、高く／＼眺められたりした。トラピスト修道院や、續君の經營して居る牧場も見たかつたが、私は旅費が乏しくなると共に、東京の空を懐しむで居た。思へばもう二十日近くも、北海道の地を漂泊つて居る私なのであつた。

晝は虫に、夜は蚤に攻められる湯の川温泉も、たそがれ頃は冷涼として、秋のやうな思ひが、私に旅の哀れを感じさせたりした。

郷土の色

五日は湯の川ホテルの主人、續秀太郎君に饗されて、朝から三階の風通し好い一室で、酌み交し語り興じた。佛蘭西に居た時代の話や、長田秋濤の噂や、馬の話などが出てゐる所へ、太刀川、有田、林の三氏も参加して、清風の前に酒興、更に大いに加はつたりした。

網屋の伴奏清一と、函館藝妓若子と信香の三人が、二階の霧島でモルヒネ心中した話は、私が今度の旅の中で得た唯一のローマンスであつた。心中の現場を發見した續君は、心中の原因を知る事に於ても、何人よりも精細に且確實であつた。殊に心中した男の母が、それから後は

しいけれど、北海道そのものゝ感じを、正面に受入れやうとするには、何としても其の厳しい冬を知らねばならないと思つた。有島武郎氏や長田幹彦氏の作品の一部に現はれた北海道は、涼しい夏の世界ではなくて、雪に封鎖された北海道なのであつた。私は何としても、『冬の北海道』を見なければ、まだ、何事も語り得る資格がないと思ふ。親切な札幌、函館の人々よ——今度は何うぞ、寒い／＼冬の天地に、私を包擁していただきたい。

悠遊三週間、私は各方面の人々から、思ひ設けぬ厚い待遇を受けたことを、改めて人々に感謝したい。淋しい漂泊者の心を抱いて、僅かばかりの旅費を持つて、何の的もなく旅をした私に、北海道の人達は親切であつた。そこはもう殖民地ではなくて、立派な一つの郷土になつて居た。最初は殖民地のつもりで、ホンの暫時のつもりで住んで居た人も、遂にはそこを第二の郷土として、墓を築くやうになつたのであらう。私は幼少の頃、何がな金儲けをしやうとして、小樽、札幌と歩いて居た亡父の姿が、私には今更のやうに懐しまれた。

さらば北海道よ、懐しの北海道よ——私は斯う云つて、津軽海峡を内地の方へ渡つた。

精神異常者のやうになつて、毎日のやうに藝妓を呼んで、唄つたり踊つたりして居ると云ふ話は、私の心を強く衝いたやうであつた。その心中者の母の妹が、島崎藤村氏の夫人であつたといふ話も、私には力強く響いた新事實の一つであつた。

函館には市川中車が來ると云つて、大きなビラが土地の好奇心を唆つて居た。松旭齋天勝やら、會我迺家五郎やら、市川新之助やら、ちぬの浦孤舟やら、蝶五郎やら、虎丸やら、涼しい夏の北海道へ出稼ぎした人達が、何時も私の前になつたり後になつたりして居た。そして天勝一人が人氣と實益をさらつて行つて、他の人達は餘りドツとしないといふことを、私は到る處で聞かされた。北海道の景氣がさう悪くなつて居るとは知らずに、避暑を兼ねて出て來た人々は、餘り儲けもせず歸つた様子であつた。でも大勝堂の貴金屬品出張特賣とやらは、函館、小樽、札幌、旭川、釧路、室蘭と、到る處の宿屋の表へ、大きな立看板を掲げて居た。道會議員選舉事務所の立看板と共に、私の眼に附いて廻つたのは、斯うした内地の色であつた。

私はトラピストの修道院も訪はず、製紙會社や製鋼所も見ず、白老のアイヌ部落も見舞はずに、あはたゞしい氣持で、北海道を去らねばならなかつた。然し今度は秋深い頃か、春淺い頃に旅して、吹雪の北海道、寒い北海道に、二三週間を送りたいと思つて居る。夏の北海道は涼

蓬家雪松の事

讀者諸君——こゝにお話しやうとする一場の物語は、去年の夏七月から八月にかけて、三週間ばかり北海道を歩き廻つた時、旭川の宿屋の一室で、初対面の若い新聞記者T君から聞いた事實なのであります。私は其の事件を、何んな形式で表現したものかと、今日まで様々に思ひ惑ひましたが、何も彼も短刀直入的に、さらけ出してお話しすることに極めました。

初対面のT記者は、早稲田の學校を出ると直ぐ、友達の世話に依つて、北海道も旭川と云ふやうな、夏は何處よりも暑くて、冬は何處よりも寒いと云ふ土地へ、流れて來て居る境涯を、別に悲しむと云ふ風は見えませんでした。反つて大陸的な氣候で、吹雪の頃などは、露西亞小説の舞臺を想像するに適いと云つて、すべてを痛快がつて居る様子でありました。私が旭川に着いた午後二時頃は、旭川の測候所始つて以來の暑氣で、九十五度二分からありましたが、それでも夜は十一時頃から冷りとして、さすがに北海道の夜らしい涼風が、蚊帳の裾をあほつたりしました。

そのT記者は、アイヌ部落へも御案内いたしませうか、神居古潭の風景は何うでしたとか云つて、かなり北海道と云ふ土地へ、愛着を感じて居るやうな口吻でありました。そして私の書いた物は、東京の學校に居た頃から、好んで読んで居たと云つて、いろいろ東京の噂をしたり、此の土地へ旅興行に來て居る藝人達の上を、噂し合つたりしました。T君も旭川へ來た最初の一二年は、旅人のやうな心持で、何かにつけて東京を懐しがつて居たが、今では東京から來る人達を、旅の人として眺め得るやうになつたと云つたりしました。電車の騒音で神經衰弱になる都會生活よりは、寒い北國の生活の方が、何んなに自分には愉快だか知れないと、T記者は眞に愉快らしい口調で語つたりしました。

そのT君が、俄に思ひ出したやうに「さうく、あなたにも多少、縁のある一人、藝妓の身の上話がありますよ。私は手紙で申上げようと思つて居たのですが、幸ひあなたと斯うしてお目にかゝりましたから、ついでに申上げて置ませう」と云ひました。北海道の旅の空で、『私にも無關係でない藝妓の身の上話とは、果して何んな事實があるのですか』と云つて、T君の色白い顔を凝視めたのであります。

讀者諸君——そのT君の物語は、聽いて見ると實に珍しい事實でありました。私に縁がある
と云ふのは、曾て一度、私の「女八人」と云ふ本の中へ、「板新道の一隅」と題して、取扱つた
ことのある新橋藝妓、よもぎ家の雪松と云ふ、不見轉専門の妖艶な老妓の後日譚だからであり
ました。

その蓬家の雪松は、新橋に數ある不見轉藝妓の中でも、寅の五黄に云ふのですから、明けて
四十四と云ふ婆さんになつた筈です。今は山東省の青島に渡つて、矢張り昔と同じやうに、厚化
粧に赤い物づくめで、ダイヤや金の腕輪を光らせて居るさうですが、豊満な肉體と、支那女ら
しい眼や口の表情には、相變らず浮かれ男達を惱殺して居ることせう。四十になつて居ても
三十前後にしか見えないと云ふのが、雪松の強味でもあれば、また彼の女が何時までも不見轉
藝妓として、生きて行かれる所以なのであります。

その雪松も、青島へ流れて行く前には、北海道へ立つ瀬を求めて、彷徨つて行つたのであり
ました。そして函館や小樽や札幌を素通りして、町でも二三流の旭川へ、眼をつけたと云ふの
は、どう云ふ譯でありませうか。東京で馴染を重ねた若い軍人が、旭川師團に轉任して居たら
しいと云いますが、雪深い旭川を眼ざして、そこに安住の世界を送らうとしたのは、雪松の平

凡で無い一面を語つて居ました。T君は其の雪松が、最初に泊つた宿屋へ下宿して居たので、
直ぐ雪松とも知合になつて、いろ／＼と彼の女の身の上話を、彼の女自身の口から聽いたので
あります。

「Tさん、あなたも新聞屋さんなら、この方、知つてるでせう……」

と云つて、雪松が出て見せたのは、私の「女八人」と云ふ本でありました。T君は「未だ
逢つたことはないが、松崎天民なら書いた物は能く知つて居る」と云ふと、彼の女は泣き出し、
さうな顔をして、その「板新道の一隅」と云ふのが、私の上にあつた物語ですと云つて、落涙
したさうであります。

「あゝ君のことですか、若い法學士が剃刀で自殺せねばならぬやうな羽目になつたと云ふ藝妓
は……。君は今までに随分いろんな罪をつくつて來たのですね」

斯うT君が云ふと、雪松は「えゝ、およそ女の中で、藝妓の中で、私ぐらい罪の深い者はな
いことよ。だから其の報で、こんな旭川くんだけまで、流れて來たぢやないの！」と云つたさ
うであります。



讀者諸君——T君の話に據りますと、其の雪松が、板新道の家を退轉して、北海道くんだりまで流れて行つたのは、いろいろ原因があつたのであります。身分のある若い法學士を、自殺するやうな羽目に陥らせたのも、遠い原因の一つでしたが、第一には彼の女の多淫と慾張とが、彼の女を何時までも、體の好い新橋藝妓にして置くことが出来ぬのであります。

雪松は不見轉藝妓と云つても、自前の姐さん株でして、藝は何一つ出来ないでも、酒席や待合の小座敷では、珍重がられて居たのであります。同じ不見轉藝妓にしても、さう安つぽくは賣りませんので、中には欺かれて、彼の女の旦那になるやうな客が、一人や二人は有りました。雪松は斯うして、二三人の旦那から月々の手當を貰つて、一家の生計を立てると共に、少し男前が好かつたり、金の有りさうな男ですと、直ぐ客に取つて、慾望を充たして居たのであります。金にさへなれば、貞操を賣ることを、何とも思つて居ない女の多い世の中ですが、雪松は殊にそれが徹底的でして、萬事を大ビラに振れ舞つて居ました。

小説家、雑誌記者、新聞記者、會社員、銀行員、凡そ勤人階級の人で、新橋で遊んだほどの人で、雪松の事を見聞しない人はありませんでした。少し馴染を重ねますと「待合さんに入らしやるのは、あなた無駄ぢやないの。それよか宅の方にへ入らつしやいよ。そりや呑氣で宜いわ」

など、云つて、客を自宅へ引込むのであります。時には二三人の男が、雪松の家で落合ふやうな事があつたさうですが、そこは女中なども馴れたもので、巧に二三人の客を操縦して、満足させて歸したと云ひます。萬事がこんな風ですから、男の弱點に乗じて、金の有る男からは金を貪り、衣類や持物を強請したりして、一種の榮華を極めたものであります。極端に肉體を浪費して居ながら、少しも疲れず痛まず、何時も晴れやかに笑つて居たところに、雪松の妖婦らしい淫婦らしい相恰が讀まれて居ました。

その雪松が、新橋にジツとして居られなくなつて、俄に所在を晦ましたのは、二三年前のことでありました。私達は、「彼奴も積惡の報で、梅毒にでも罹つたか、それとも悪い男に鬪り合つて、裸體にされたのだらう」と取沙汰して居ましたが、藝妓も四十を過ぎては、若い仲間の評判にも上らず、次第に凋落して行くばかりでありました。然し其の雪松が、北海道の旭川くんだりまで流れて行つたとは、實に意外な思ひも寄らぬT君の話なのであります。



讀者諸君——無智な藝者の色香に迷つて、身を亡ぼし家を傾けるのは、男が馬鹿だからとのみ、一概には云へぬのであります。雪松のやうな女に溺れて、自殺せねばならぬやうに陥つ

た若い男は、勿論、餘り賢いとは云へませんが、然し雪松にはそれだけの強い魅力が、天稟と云つても宜い程に、備はつて居たのでありました。

さうした雪松が、たうとう新橋を落ちねばならぬやうになつたのは、如何に色を賣るが商賣の藝妓とは云へ、人間として實に許し難い罪惡が、雪松の上に潜んで居たからでありました。

T君は「私も此の話を本人から聴きました時には、實にひどい女もあつたものだ」と、全く吃驚してしまひました。役者や情夫の胤を、旦那の胤にして、引取らせたり、養育料を貰つたりするやうな例は、藝妓仲間にもザラださうですが、雪松のは最少し罪の深い、念入りの陰謀なんですからね。私も驚嘆してしまひました」と云つて語りつゞけました。

雪松に一人の新しい旦那が出来て、その旦那が板新道の家に入りびたつたり、毎夜のやうに雪松を呼んで、友達の前に見せびらかしたのは、三年前の春のことでありました。その旦那と云ふのは若い實業家のSと云つて、大學出の四十近い大柄な男でしたが、花柳界のことにかけては、まるで田舎者であつたと見えて、手もなく雪松に抱き込まれてしまひました。そして新橋藝妓の一流どころを、自分の所有にしたと云ふ自慢と得意から、その雪松を友達に紹介したり、月々二三百圓の金を、手當として與へて居たのでありました。紹介された友達の中には、

前から雪松の不見轉振りを知つて居て、反つて赤面したと云ふやうな滑稽もあつたのですが、實業家S氏は唯もう得意らしく、「僕もやつと藝妓一人の世話ぐらゐは出来る身の上になつた」と、紳士らしく微笑をもらして居ました。

その間に雪松は、毎月見るものを見なくなつて、次第に腹が大きくなつて行くことになりました。「ねえ旦那、私たうとう此れよ」と云つて、雪松が如何にも困つたらしい顔をして、大きい腹を撫で、見せますと、旦那のSは一も二もなく大喜びで、一層、雪松を大切にしたと云ひます。でもSは最初の間は「戯談だらう、俺の子か誰の子か判つたものか」と笑つて居たさうですが、そこは雪松の手練手管ですから「ほんとにさうか、そいつは目出度い。宅には子供が一人も無いから、男の子でも女の子でも、喜んで引取るよ」とまで、言はせるまでに運んださうでありました。



讀者諸君——斯うして雪松の腹から生れたと稱する子供は、弱々しい男の子でありました。板新道の家には、産婆が出入りしたり、六月目からは表面お座敷を休んで居たりしたので、S氏は毎月多額の金を雪松の許へ仕送り、生れた子供は其の翌日から、S家に引取つて、乳母や

看護人が附添つて、幸福に哺くみ育てる事になりました。斯うしてS氏と雪松とは、生涯、絶つことの出来ない縁を深うしたのですが、雪松は産後の保養だと云つて、一月餘も伊豆の温泉へ行つて居ました。萬事はS氏が仕切つて、前よりも多額の手當が、雪松の懐中に入るやうになりましたが、然し雪松はそれから旦那に隠れて、方々の待合さんに入入しては、初めて逢つた男にも、手輕にその笑を賣つて居たのでありませんた。

「雪松が子供を生んだ、Sさんの子供を生んだ」と云ふことは、一種の奇蹟でもあるかのやうに、取沙汰されたのでありました。その、雪松の情夫のやうになつて居た或る雑誌記者は「おい、随分、罪の深いことをするね」と云つたさうですが、雪松は平氣なもので、「あんな奴、いやに旦那面をしゃがるんだもの、少し藥が利き過ぎると思つたけれど、一狂言書いて嬉しがらせて遣つたのさ」と、平氣な顔をして、笑つて居たのであります。

「知つて居る者は、お前と産婆と女中と、お前の家に出入する二三人の客情夫ぐらゐなものだらうが、年月が経つて行く間には、Sさんも感ずくかも知れないからね。少しはお前も考へなくてはいけないよ」斯う其の雑誌記者にも言はれたのであります。けれども雪松は傍で思ふほ

どに臆病ではなく、「そんなに悪いことではないと思ふわ。生れた子供も幸福になるこつたし、Sさんだつて嬉しがつて居るこつたもの、何もさうクヨクヨ思はねばならぬほどの、悪いことだとは思はれないわ。私だつてあのためには、千圓とまとまつた金を取つたことだし、誰も彼もが幸福なんだもの、世の中の事は、それで宜いぢやないの」と、頗る平氣なものであります。

けれども、流石の雪松にも、人間らしい心持は、また何處かに残つて居たのであります。S氏が引受つた子供が、やつと這ふやうになつた頃から、雪松は其の事のために、人知れず悶えねばならぬやうになりました。「何だか東京に居るのが、私は空恐しいやうな心持がして來たわ」と、人知れず思ふやうになりました。

雪松はそれから間もなく、北海道の旭川へ旅したのであります。



讀者諸君——雪松の腹に生れた子供として、S氏が引取つた嬰兒は、S氏にも雪松にも似て居ませんでした。けれども雪松の旦那であることを、紳士の誇のやうに心得て居るS氏は、何處までも自分の子と信じて疑はず、今日も慈しみ育て、居ると云ふ話であります。「私は其のS

氏が、寛仁大度な人であるのか、それとも低能者であるのか、何とも見當が付きません」と、
 T君は眞面目になつて、語りつゞけました。

その子が、たとひ雪松の情夫の子であらうとも、S氏が自分の子と信じて、引取つて育て、
 居るのは、見やうに依つては美しいことにもなりません。世間にはさうした例が、旦那と藝妓
 の間には、常に度々繰返されて居るのであります。けれども雪松の場合は、決してさうでは
 なくて、實に他人の胤を宿して、他人の腹に生れた嬰兒を、S氏の胤であり、自分が生んだ子で
 あると云つて、引取らせたのですから、ほんとに罪が深いではありませんか。淫婦であり妖婦
 であるところの雪松は、この事のためにたうとう恐ろしい毒婦性をまで、さらけ出して見せたの
 でありました。

「随分、可笑しかつてよ。眞綿を段々部厚に巻いていつてさ、三月から五月、六月、八月と云
 ふ風に……。産婆さんと共謀なんだもの、臨月の時なんか、恰好の宜いお腹になつて居たわ。
 産婆さんの方から頼んで置いた里子が、オギャーと生れると直ぐ、私の家へ連れて来て、今生れ
 ましたと云ふことにして、私も初めて眞綿の攻め苦からのがれた譯なのさ。尤も、Sさんのお座
 敷に出る時だけ、大きなお腹に化けて見せたのだけれど、その間がなかく、並大抵の辛抱では

なかつたわ。貰ふ物は貰ひ、取る物は取れるだけ取つて、斯うして北海道くんだりまで、旅鳥
 になつた譯なんだけれど、餘り寢覺めの好い事でもないわ。ねえ」雪松は斯う云つて、S君の
 前に、少しは涙を流して見せたと言ふ話でありました。

「何と云ふ恐い女だらう、何と云ふ恐い話だらう」T君は斯う思ふと、直ぐ此の話を新聞
 の續き物にして、評判を取らうと思つたさうですが、雪松は「私が此の土地に居る間だけは、
 新聞に出すこと、勘忍して下さい」と、くれぐれも頼んだので、今日まで私一人の胸に秘めて
 居た——と、此の長い話の終を結びました。

「成る程、これは珍談ですね。慾張の雪松にしては、別に不思議でもない事ですが、少し仕事
 が悪ど過ぎるではありませんか。で、雪松はそれから何うしました？」と、私はT君の若々し
 い顔を眺めました。



讀者諸君——可笑しい悲劇と云はうか、恐い喜劇と云はうか。何れにしても、雪松は、並
 外れた女ではありませんか。

T君の話に據れば、旭川で看板でも借りて、植民地的の怪腕を揮ふつもりで、様々に目論見

を立てたらしいのですが、新橋では深夜の待合に無くてならぬ種類の藝妓として、重寶がられて居た雪松も、旭川では手も足も出なかつたと見えて、一月ほど滞在した後、立去つてしまひました。

「あれで本人は、まだ男を迷はして見せると云ふ自信に、生きて居るらしい様子でしたが、もう四十過ぎて、額の皺を白粉で隠さねばならぬやうになつては、女も末路なんですからね。それに藝妓が齡を取るのには、素人女よりも激しいさうですが、雪松は何時までも、自分の容色は美しいと、思ひ上つて居る様子がありました。私なんかも何うかすると、引懸りさうでしたけれど、偽せ子の一件を聴かされてからは、恐しくなりましたね」

T君は初めて笑顔を見せました。

「さうでせう。私は友達が關係して居たので、時々座敷で見たばかりですが、ダイヤを光らせたり、金鎖を垂れたり、金の腕輪をしたりして、何の事はない洋妾そっくりですからね。あんな藝妓が神樂坂あたりに居なくて、新橋と云ふ土地に容れられて居たのが、不思議に思はれたぐらゐでしたよ。然し、そこが新橋氣分の面白いところでした。一流を以つて任じて居る新橋それ自身が、自分で其の誇に裏切つて居るのを、私は何時も痛快に思つて居たので

す。……で雪松は、今、青島で發展して居るんですね」

私は斯う云つて、T君に答へました。

「青島から一度、繪はがきを寄來しましたが、もう二年にもなりますから、今は何うして居ますやら……。北海道の花柳界は、主として土地者ですけれど、折々は内地から、振つたのが参ります」

T君は斯う云つて、「私もこれで安心しました。松崎さんに此の話をしたものだ、その時から思つて居た望みが、今夜、たうとう達せられましたから……」と、愉快さうに笑顔を見せました。

讀者諸君——眞につまらぬ話ではありませんでしたが、私は此の話の中から、可笑しい悲劇を感じ、恐しい喜劇を感じました。そしてS氏と、其の拾はれた子供の前途のために、心から天の祝福を祈りたいやうな氣持になつたのであります。

大阪時代追懐

一、金の都

大阪の事に就いて、何か面白いものを書けとある。面白いか、面白くないかは知らぬ。大阪に關する一二節を書いて、遂に大阪の世相に思ひを遣らうと思ふ。

大阪と云ふ所は、金がすべてを支配して居ると云ふ。人間の賢愚美醜よりも、金の有無に依つて、差別を付ける所だと云ふ。大阪へ行つて見ると、如何にも金が唸つて居るやうな、何も言へぬ一種の壓迫を感じる。金などは人生の第一義的のものでは無い、と思つて居ながら、大阪の空氣に觸れると、金を第一義的に考へる。事ほど左様に大阪は、「金の都」としての氣分の強い所である。

近松や西鶴の作品などにも、金を題材としたものが多い。人生の悲劇の主因若くは第二因に、金を云々した作品がある。この金を第一義に考へ、金を人生の諸相と結びつけることは、忌はしい事であつても、事實は何うする事も出来ぬ。東京は金が無くても、他に生存上の慰安

を感じ得られるが、大阪では何と云つても、先立つものは金である。久し振に逢つた人でも、東京ならば、「何うだ、近頃は面白いことがあるか!」と云ふ。これが大阪ならば、「何うだす。何ぞ、ボロいことおまへんか」と云ふ。大阪は何と云つても、金を第一義とする都會である。

煙の都と云ふ觸目の感じは、やがて大阪の世相に流れる金の支配力を思はせる。「學者かて、貴族かて、金が無うてはアカンやないか」と云ふ。そして不可思議なことには、電車内の見聞だけにしても、東京では何となく、金に不如意の人が多いやうに見える。それが大阪になると、すべての人が金持で内福で、生活に屈託の無い人のやうに見える。その風土や人情や、世間的の醗酵氣分が、さう感じさせるのみでなく、事實、大阪人の中には、金持が多いらしい。彼の戦後の成金旺盛時代には、料理屋の仲居はんで、五六萬圓を持つて居る女は、珍らしくなかつたと云ふ。「金や、金や、何も彼も金があつての事や」と云ふ。それが人生の事すべてに、絶體的の支配權を持つて居るは、忌むべく悲しむべきであつても、何とも抗辯することが出来ない有様である。

私は此の「金の都」で、幼年時代を過ごし、少年時代を暮し、青年時代を生活した。そして様々の美しい人情にも觸れ、男女間の情話をも経験したが、矢張りその底に力強く流れて居た

ものは「金」の力であつた。金の喜び、金の怨みの諸相を眺めやうとする人は、大阪の世相の中に、深く食ひ入らねばならぬと思ふ。そこに大阪の特色があると共に、美しさも醜さも、その中に流れて居る。

私の「大阪時代追懐」は、以上の雜感を序説として、次々に様々の思ひ出を手繰らうと思ふ。呪ふべき大阪であるか、祝福すべき大阪であるか。何れにせよ私にとつては、懐しい思ひ出の都なのである。

二、佳 酒 佳 肴

大阪は金の都であると共に、酒食歡樂の都である。大阪の酒は美味く、大阪の海魚は美味で、調理法も優れて居る。春に秋に、大阪の世間を懐しむは、食意地の張つた私のみでは無いと思ふ。

今年春の浅い頃、大阪に客となつて、數日を南や北で暮した。何處で飲んでも、何處で食べても、大阪の酒は美味かつた、大阪の魚は美味かつた。それに牛肉にしたところで、東京などよりも質が良く、食るやうに満腹することが出来た。酒を飲み大阪へ行く、全く唯それだけ

けの事で、わざわざ行つても宜い程に、大阪の酒食は、私達の味慾を慰めてくれた。

何んなに大阪の世相に對して、反感を抱いて居る人達でも、その優れた酒味に對しては、心から降參する他なかつた。『大阪は何だか物質本位で、着物の美醜に依つて待遇に差別をつける所だ』と、何人も憤慨する。大阪の一部の世間では、今日でも貴賤貧富の度を、その服装に依つて見る者がある。東京のやうに、何も彼も奔放自由でなく、季節／＼に依つて服装を極めて居る大阪では、上布時分に單衣を着て居るやうな者は、貧乏人並に遇らはれても、仕方が無いと云つた風なのである。

そんな大阪であるけれど、海魚の美味なことは、東京に比ぶべくも無い。鮪の美味は求め難いにしても、鯛の美味は、大阪人の誇るところである。天麩羅や壽司に至つては、東京に及ばぬけれど、大阪は海魚の新鮮と風味とで、すべての缺を補つて居るのである。その上、灘に近うして、芳烈な生一本を口にし得るは、大阪の大きな自慢であると共に、私達の心持を強く／＼大阪に引つける原因となつて居る。東京の酒も、近頃は少しく良くなつたけれど、未だ「關東向」の名残りに累されて、大阪で得るやうな正眞の灘物の風味には、何としても觸れることが出来ない。さうした日常生活の酒食は、何でも無い一少些事のやうであつて、實は輕視することの

出来ぬ問題であり事實である。

私は毎年、秋の松茸時分になると、殊に大阪の天地を懐しく思ふのである。春の魚じま頃と、秋の松茸季節と、大阪や京都が關東人の心を強くつかむのは、全く不思議なほどである。あの言葉にも、あの人情にも、あの女にも、反感を抱いて居ながら、人々は唯酒食の一點に於て、強く心を引かれるのである。そこに大阪の歡樂の都會としての醗酵があり、氣分があり、情調がある。大阪は何としても、一面に於ては、飲む所であり、食べる所なのである。

これを歡樂的に考量する時、そこに「大阪の女」を逸してはならない。大阪の女は濃情だとも云ひ、薄情だとも云ひ、利巧だとも云ひ、低脳だとも云ふ。大阪の女——私の思ひ出は、勢ひ其の女人國の扉を開かねばならぬ。

大阪の女とは何ぞや。

三、大阪の女

大阪の女とは何か——私は何と云ふこと無しに、富田屋の八千代を想ひ起し、大和屋の秀勇を想ひ起した。北にも、新町にも、堀江にも、數々の女達が居て、そこに特殊の情調を醸して

居たことは、改めて言ふ迄もない。

いろ／＼の土地へ旅して、何よりも先に、女達を見たいと思ふのは、旅人の慾情の一つである。私は此の淡い旅客として、大阪に住む市民の一人として、いろんな場面に、大阪の女達を置いて見たのだつた。茫として夢の如くに、淡い果敢ない思ひ出の一つに過ぎなくて、そこには今日でも尙ほ、私の感情を軽く衝くやうな女が、一人ならず存在することを思ふのである。それらの女は或は懐かしく、或は痛ましく、苦々しく、惱ましく、私の心を動かさずには居ない。

私の大阪時代は、前後を通じてかなり長かつた。私はそこで最初の妻を娶り、私はそこで一人の女と戀に落ちて、二十歳代を物狂はしく過ごした。若い新聞屋ほんとしての私が、如何に放埒な多情な、淫逸の月日を過ごしたかを思ふ時、何時も色濃く浮かんで出るのは、その一人の女性であつた。彼の女は北の新地に住んで、世の光の蔭を辿りながら、浮かれ男達の前に現れる類の女であつた。大柄な色白の派手な顔立で、字も能く書いたし、相當の教養もあつたが、生れると共に、不幸づけられて居るやうに見えた。何處が何うと云ふのも無いのに、若い私の心は不思議な力で、その女の方ばかり引ずられて行つた。

「何時まで、こんな事して、無理な逢ふ瀬を楽しんで居たかて、どうせ別れんならん仲や思ふと、つまりまへんなア……」

女はこんなことを云つて、割合に平氣な風をしながら、笑ひ顔を見せるのだつた。しまひには私の病氣を受けて、女も苦しむやうになつたけれど、そんなことで氣拙くなるやうな、そんな軽い浅い心持はなかつた。その女にとつても、忘れ難い半生の思ひ出として、何時までもく苦しみを残したであらうと思ふと共に、私の上にも其の女との出入は、浅からぬ胸の疼きとなつたのであつた。

最後の牛肉鍋——その女と別れてしまふ時、私は牛鍋をつつきながら、胸ふさがる思をしたものだつた。

「東京へお行きやすの、そら、結構なこつたすなア。あんたは年もまだお若いよつてに、ウンと勉強して、エライ人になりなはれや。この子もなア、身體の工合が悪うおますけど、そないに心配せんでもえいやろと思つてまんね……」

私を喜ばなかつた女の母は、かう云つて酒をついでくれたりしたが、それも二十年の昔になつたかと思ふと、忘れて居た古痕ほどの疼さが、チヨイ／＼と私の胸をつくのである。——

大阪の女を思ふ時、私は第一にこの女との果敢なかつた交渉を、生々しい現在のことにして、眺めて居るのだつた。

四、故人の情

私が此の世の中に於いて、遊びと云ふものを知り初めたのは、大阪に居る頃からであつた。そこには甘い酒と美しい女が居て、私の若い心を慰めてくれた。

明治三十一年——三十九年、私は其の九年間に、大阪の世相の表にも裏にも出入して、人生の姿と云ふものを見た。労働者として、新聞記者として、私は大阪の九年間に、甘い辛い人の世の味はひを知ることが出来た。大阪と云ふ西の都を、第二の故郷として懐しむほどに、私の若い生命は、そこで哺くまれたのであつた。

私は北にも堀江にも、新町にも南にも、よく友達と一緒に往つては、遊びの氣分にほうけて居た。その頃は富田屋の八千代を中心として、大阪に最も名妓の多い時代であつた。北には大西の清子や小金と云ふ、舞踊の名手が居たし、美しい若い才はじけた女も、二人や三人では無かつた。南の濃厚な情調に對して、北には何となく清楚な、萬事が東京らしい氣分が流れて居た。何

となく古臭い新町よりも、私は北の新地の氣分に、何んなに心から陶醉し、傾倒したことであらう。「南も賑かで宜しうおますけれど、北の方が落着いて居て、何となう上品やおまへんか」こんな事を云つて、私は蜷川のほとりの東西に細長い北に入つては、春も秋も、夏にも冬にも、女達と飲んで居た。大阪の政客と云つた風の人々と共に、桂内閣を非とする運動に従つたのも其の頃のことであつた。中の島の割烹店銀水樓の女に、人知れず戀心をそゝられて、人知れぬ痴態を演じたのも、その時分のことであつた。日露戦役を中心として、大阪に於ける私の生活は、内にも、外にも、多事多忙であると共に、酒色の方面にも、限らない狂痴を演じたものであつた。

勞働者時代に知つた松島遊廊よりも、私の心を動かしたのは、南の千日前や北の天満天神界隈に巣くつて居た「私娼の群」であつた。私は従事して居た新聞紙上に、初めて「賣笑婦」を題材として、長い續き物を書いたりした。木賃宿を泊り歩いて、その通信を書いたのも、若い記者としての私の新しい試みであつた。人としても記者としても、その頃の若かつた私の前に、大阪の世相は廻り燈籠のやうに、次々に展開した。人生の學問と云ふものを、私に授けてくれた第一歩は、何と云つても大阪に於ける生活なのであつた。

煙は多いし、夏は暑いし、人情も何となく底冷たくて、決して都會としても、強い引力が無いやうな大阪であつても、思ひ出の風味は格別である。今日の大阪に、昔の姿を探ねやうとしても、杳として故人の面影を訪ねるやうな、淡さを感じるに過ぎないが、懐かしさは過ぎ去つた月日にある。

私は更に方面をかへて、大阪の人々を懐かしまうと思ふ。

五、友の手紙

私の此の記事に對して、大阪に居る舊友の一人から、次のやうな手紙が來た。大阪を中心とした此の讀物の中に入れて、舊友の情懷を偲びたいと思ふ。

——×新報に書いて居る兄の「大阪記」を、僕は面白く拜見して居る一人である。兄が大阪朝日を退いて、東京へ走つたは三十九年の暮で、あれから二十年の月日は、あはたゞしく過ぎてしまつた。兄が居た頃の大阪は、電車も未だ開通して居ず、僅に巡航船があつたのみで、大阪の世界はすべてが、未だ創造に忙しい時代であつた。二十年……と一口に云つても、僕は今更のやうに、時の力の大きいなるに驚いて居る。

あの頃は千日前も、今日のやうに文化的になつて居ず、狭いゴタゴタした通りに、いろ／＼の見世物が軒を並べて居た。團十郎や寶樂、田にしの大阪二輪加や、横井座といふ劇場には、村田正雄や井上正夫などが、血腥い芝居を見せて居た。活動寫真といふものが、此の世の中に存在することを、初めて知つた僕達は、少年の驚異に喜んで、幼稚極まるナポレオン物などを見ても、大喝采をしたものである。その頃は高田や喜多村、秋月、小織などの成美團が、道頓堀に覇を稱へて居て、延若などは河内屋のボン／＼と云はれて居た。大阪美人の世界は、富田屋の八千代時代で、それから今日まで、八千代ほどの才女が現れないのも、僕に取つては心淋しい遣る瀬ないことの一つである。

君の大阪記を讀んで居ると、僕は何と云ふことなしに、あの頃の大阪が、懐かしくなつて來る。今でも冬になると、例のかき船は川筋にも來て、僕の味覺を慰めてくれるが、あの情調と云ふものは、月日と共に次第に壞たれて來た。カッケーや西洋料理の世の中となつたことは、時代の流れであるにしても、古い情味が破壊されることは、何としても淋しい心地がする。すべてがデパートメントストア化し、西洋料理化して、昔の大阪情調と云ふものが、次第にその特色を失つて居るは、僕達中年の大阪人にとつて、不平で無いと斷ずることは出來ぬ。

今年も松茸の食へる時候となつたが、僕の此の心は淋しく、徒らに老ひ込んでしまつたやうな、アツ氣なさをさへしみ／＼と感じて居る。

兄も「大阪の思ひ出」に、自ら僅に慰めるよりも、一つ奮發して松茸でも食べに、遣つて來られては如何か。今の大阪は其の心持も舊い大阪ではなくて、新しいものゝ建設に向つて、努力もして居れば、又若い惱みに惱んで居るのである。この大阪を「歡樂」の方面からのみ見ないで、兄の如きが核心に突入つて、ほんとの面白い新大阪觀察記を完成してくれると、面白いと思つて居る。――

私は此の手紙を讀んで居るうちに、近いうちに大阪へ行つて松茸が食べたいと、切な慾求が起つて來た。

六、松茸狩りに

毎年、秋になる毎に、大阪や京都の松茸を懐しく思ふ。

東京で走りの松茸と云へば、信州物が第一で、次は京都から入つて來る。秋十月も中旬を過ぎると、京都物の芳ばしい香が、私達の味覺をそよる。夏の鮎にしても、秋の松茸にしても、こ

れを關西物に仰いで居るほどに、東京は斯うした特殊産物に、祝福されて居ない。殊に松茸となると、信州物は顔色なしで、誰が何と云つても、京都、大阪、神戸の物が佳い。

東京の人々は、松茸狩の清興を知らぬが、同時に松茸を食べることに、無智な人が多い。料理屋などで、松やき、土瓶蒸しなどを能く出すが、何れも調理法その宜しきを得ず、折角の松茸の風味を壊してゐる。松焼をくれと云ふと薄く切つたり割いたりして、それを砂糖醬油のつけ焼にする所もある。甚だしきは山椒をかけて、松茸本來の香味を冒すやうな、無茶な料理をして、平氣でゐる大料理店があるには驚く。松茸の本場は關西であるやうに、その調理も關西が正しく標準的である。

私は今、松茸狩の興趣について様々の思ひ出に耽つてゐる。昔の高野鐵道に乗つて、吉野口の方へ出かけたり、兵庫の山々で狩暮したり、或は京都の稻荷山近くで、半日を興じたことなどが、次々に思ひ起される。紀州近い松山に案内されて、秋の一夜を山麓の素封家の座敷で過ごしたのも、思へば二十年の昔である。そこには若い美しい娘さんが居て、いろ／＼と手厚く饗してくれたが、今は其の生死さへも、杳として知るよすがも無い。一緒に行つた渡邊霞亭、久保田小塊、小山松壽の諸家と、興に乗じて語り合つた其の夜の清興は、何時までも／＼私の

思ひ出にコビリ附いて居る。二十年……と一口に云つてしまふには、餘りに迂餘曲折の多い半生のことが、次から次へと思ひ起される。

大阪毎日に居た山本廓外君が、松茸狩の遊記を書いて、汽車中でサンドウキツチを飲み陶然として酔つたなど、ウキスキーと間違へたことなども、面白い思ひ出の一つである。大阪の商家に生れて、若い頃から遊里の遊びに耽つて居た山本君は、舊い大阪の産んだ文士の一人であつたが、今は何處に何うして居ることか。近松の作品を、實生活に體驗しやうとした山本君は、今から思ふと、月並の遊蕩兒では無いらしかつた。

死んだ俳人の梅澤墨水と共に、淺漬大根を喰べながら、大に松茸を論じたこともあつた。東京に生れて大阪で暮らして居た墨水は、死ぬまで東京生活を懐しむで、「大阪は駄目だよ／＼」と云つて居た。山中北渚、青木月斗その他の諸家と共に、北の青樓へ登つては、能く秋の夜を興じて居た。

松茸の秋になる毎に、私は故人を思ふの情に堪えない。路傍の人の如くに別れてしまつた女からの消息も、松茸の頃に多かつた。

七、労働生活

生れて初めて、労働者としての月日を送つたのも、大阪にゐた二十二歳の頃だつた。北區樽屋町に在つた村井兄弟商會分工場で、私は初め大八車を曳きつゝ、日夜を汗に苦しまねばならぬ若者であつた。

浦江のブラシ工場に入つて、一年間を労働に従事したのも、その時分のことであつた。工場の朝な夕な、不如意な生活の中にも、私は如何に、新聞記者に爲りたいと思ひ、新聞記者になることを一生の希望としたであらう。友達は女郎買に行つたり、花合せに興じたりして居る中に、私だけは文學の本を買つて來ては、それを讀む事を唯一の楽しみとしてゐた。

それと同時に酒を飲むことを教へられたのも、淫賣婦を買ふことを教へられたのも、工場生活の二年間であつた。村井の工場に居た頃は、工場長が大酒家であつたため、土曜日の夜になると、何時でも十人近くの事務員を集めては、工場で酒盛するのが例であつた。そして酒が終ると、天神裏の方へ出かけて行つては、一圓二圓の金に依つて、私娼の群と戯れる事に、何時しか習慣づけられたりした。「こんな事ではいけない、こんな弱いことではいけない」と思つても、

環境の力には何うすることも出來ず、私は何時しか世の闇路に涙をそそぐやうな、一種の興味を強く感ずる青年になつてゐた。

その工場生活から、直ぐに新聞社の門に迎へられて、初めて新聞記者の名刺を持つた時、私は何んなに喜びもし、又不安を感じたことであらう。北の出入橋にあつた大阪新報社は、未だ平版刷の微々たるものであつたが、それでも當時の大阪では、朝日毎日に次ぐ第三紙であつた。警察方面の探訪に従事しつゝ、中挟みの趣味版を編輯したり、すべてが手探りであつたにせよ、私の新聞記者生活は、そのスタートから祝福されて居た。工場の生活にも、心までは荒み切れなくて、その月日を思ひ出の記事にするだけの餘裕が、私の心持にはあつた。賣春婦を題材としたり、木賃宿を泊り歩いたり、労働者の町を歩いたりして、新聞の特殊讀み物を書くだけの藝當が、私には出來たのであつた。新聞記者に爲り得たと云ふ喜びは、二十七年を過ぎた今日でも、未だ生々しく私の思ひ出に浮ぶのである。

その頃は、十圓の月給でも、下宿住居が出來るほどに、世の中が安易であつた。着物を着やうとするには、一枚の銘仙を買つても、それを月賦拂ひにせねばならぬ程に、難澁したけれど、食ふだけには事が足りて居た。此の上は自分の勉強次第で、何うにでも出世の途は開けや

うと、私は別に失望も嘆息もせず、月給の安いことなどは、頭から問題ではなかつた。その大阪新報に居た時、私は初めて角藤定憲に逢ひ、川上晋次郎を知り、高田實を知つたのであつた。私の記者生活も、次々に進展して行くことが出来た。――

雲右衛門の死

浪花節では、誰が何と云つても、古今唯一の名人であり、巨匠であつた桃中軒雲右衛門が死でから、昭和二年は、十二年目になる。

その雲右衛門の生涯を題材として、眞山青果氏は新しい一篇の戯曲を創作した。新國劇の總帥澤田正二郎氏の依頼に依り、定めて傑作が出来たことであらうと信ずる。澤田氏の新國劇は、その『桃中軒雲右衛門』を中心として、四月一日から花々しく市村座で開演し、相當の人氣を博した。故人の藝風に對して、滿腔の愛慕と敬意を寄せてゐた私達『雲右衛門黨』にとつては、なんと云ふ大きな欣びであつたらうか。況んや眞山氏の創作に就て、二三の乏しい材料を提供した前の桃中軒支配人峰田一步氏や、松崎天民の喜びは並々で無かつた。

この機會に於て、「桃中軒雲右衛門」に思ひ出を述べるのも、私には愉快な任務であり、仕事

であるやうに思ふ。

×

雲右衛門の生涯を傳する人は、舊門下生であり、客員であつた猪股秋霧樓、田中薫骨、石松夢人の三氏であり、此の他に適當な人は無いと、私は今でも信じて居る。

田中薫骨は後に、不知火と號して浪花節藝人となり、寄席の高座にも出て居たが、雲の死後相次いで他界した。石松夢人は雲の臺本を整理した人で、節調は語れぬけれど、音譜的に雲節を研究した一人者である。前にも雲の養子分であつたが、餘り遊び過ぎて破門され、暫く地方で新聞記者をして居た。今も文筆に依て生活して居るが、暫く消息を絶つて居る。猪股秋霧樓は、九州の新聞記者時代から、雲と相識り相許す仲になり、一人格的に最も珍重された一人であつた。

これ等の人々に比べると、私は東京時代の雲を知るのみで、淡い關係であるに過ぎぬが、それでも雲右衛門の節を唸ることに於て、人後に落ちなかつた。『大阪では朝日の一花健造君、東京では松崎天民君、日本の新聞記者では、この二人だけが、俺の節をよく唸る』と、雲右衛門も、笑ひながらお愛嬌を云つて居た。

その桃中軒雲右衛門は、大正五年十一月七日、午後三時五分——十分の間に、東京市外目白の家賃二十七八圓の佃住居の二階で、四十四歳を一期として永眠した。

七八年前からの肺結核が嵩じて、遂に淋しく陋巷に窮死したのである。その臨終の席に居合せて、末期の水を取つたのは、唯一人の實子西岡稻太郎、その養母お久、宮崎滔天氏の息で、浪花節では若雲と號して居た宮崎震作氏、前々の總支配人峰田一步氏、前の支配人吉田博氏、舊文藝部員猪股秋霧樓氏、東京で常宿にして居た新橋山下町待合竹の家の女將、實弟風右衛門の妻おりん、門人村雲青雲の兩君、松崎天民の十一名であつた。門下生田中薰骨は、ズツと看病に付き添つて居たが、その朝、買物に出かけて居て、斷末魔の間に合はなかつた。

今、呼吸を引取つたと云ふ所へ、演藝通信の小出緑水氏が、丸々とした姿を見せ、他にも四五人の人々が馳せ付けた。新俳優佐藤歳三氏の娘で、女醫になつて居た婦人も來て、『あんな破れた肺で、よく今日まで生きられたのが不思議です』と云つて居た。看護婦は二人で、その一人はお浪さんと云つて居た。

x

宮崎滔天氏夫婦は、黄興の計に接して上海へ行つた不在であつた。宮崎氏は雲の浪花節を愛好して遂に其の弟子となり、牛右衛門と號して、九州へ乗込んだ時には、牛に乗つて町廻りをしたさうである。後には白浪庵滔天と稱し、一家獨得の浪花節を語つて、嘲世罵俗の快辯を揮つて居た。

この宮崎氏は、雲の晩年まで何かと世話した篤志家で、名古屋で病氣が重くなつてから、雲が東京へ行きたいと云つた時、快く自宅へ迎へ入れて看病した。黄興の隠れ家として居た最期の家へ、病體の雲を連れて行つた時には、震作氏と峰田氏とで背負つて行つたと云ふ話である。稻太郎やお久さんが來て、門下生の田中など、共に、看護するやうになつてからも、宮崎氏夫婦親子は、親身も及ばぬ世話をした。支那問題に傾倒して、浪花節語りをやめて居た滔天氏も、雲を『師匠く』と呼んで、師弟の禮を亂さなかつた。雲も亦好い氣なもので、滔天翁を弟子扱ひにし、死ぬるまで心安く厄介になつたらしい。

呼吸を引取つた頃には、滔天夫妻在らず、震作氏が甲斐くしく父母の代りを盡した。

x

二階は八疊一室、階下は三疊、六疊、四疊半の家で、南向のまだ新しかつた。雲の病室は二階

の八疊で、中央に鐵製のベットを置き、西の床の間を頭に上り口の東を足にして居た。床の間に隣して小窓があり、北にも高窓があり、南は椽側で、十一月の陽がボカボカ當つて居た。

二時半頃、風右衛門の妻女が病室に通つてから、暫く経つたかと思ふと、看護婦があはたゞしく階段の中途まで降りて来て、『皆さん、皆さん、皆さん』と、小さいが強い聲で叫んだ。風右衛門の妻おりんも、『来て下さい、来て下さい』と叫んだらしかつた。居合せた皆の者が、二階へ馳せ上つて見ると、雲右衛門は斷末魔の苦しみで手や足を動かし、眼は大きく開いたまゝ、天井の方を睨んで居た。色の黒い手足は痩せ細つて、頭髮は一寸ほど延び、とても見るかげも無い有様だつた。啖が咽喉に絡んで、ゼーゼーと苦しさうなので、看護婦の一人は杉箸で啖を取らうとした。動かして居た手足も、次第に動かなくなつて、雲はニコと微笑んだと思ふと、もうそれなりけりであつた。

手を握つて居た稻太郎、足を持つて居た猪股や宮崎や峰田は、泣くに泣かれぬ表情に見えた。胸の上に壓しかぶさるやうにして居たお久は、ヨ、とばかり、咽び泣いた。

x

一時間ばかりして、故人の枕の下から出た物を、皆で一應改めて置くことにした。吉田、峰

田、猪股、田中に、竹の家の女將や私も立合つて、その品物を改めた。

茶色の二つに折つた紙入の中からは、五圓紙幣が十三枚、六十五圓出た。朝の内に買物に出た田中が百圓持て行つたので、残つた財産と云つては唯それだけであつた。小さい白い桐の箱の中からは、銀側時計に銀鎖がついて居た。金色したものと云つては、文久錢に金メツキしたメタルだけであつた。『この時計は銀座の玉屋で、買つて來たので御座いましたが、氣に入らなくて二度も三度も取替へたのですよ』と、竹の家の女將はホロリとして居た。『俺も昔は金時計を、二つも三つも持て居たが……』と云つて、子供のやうに、此の時計を弄んで居たと云ふ。残つた物は借金ばかりで、淺草公園の根岸興行部の小泉丑治氏への一萬圓や、松竹にも日割が残つて居たし、他にも多くの借金があつたらしい。入るに従つてパツパツと、派手に使つた一代の遊蕩生活を忍ぶと、何と云ふ悲惨な最期であり、乏しくも貧しい果敢ない斷末魔であつたことか。

x

それでも墓所だけは、生前から品川の妙國寺に相して居て、前に同じ肺病で死だ女房お濱の墓所も、立派に出來て居た。本正院妙道日順大姉の石塔に隣して、桃中軒義道日正居士の墓

碑も、堂々と建立してあつた。

『死んでしまつたら何うなるか判らない、出来るならば墓だけは建て置かう』と、雲右衛門も死後の事を思つて居たらしい。横濱の親分で『お父さん』と云つて居た澤野己之助氏や、九州博多柳町の『おやじ』と云つて居た吉田藤吉氏や、大阪の原田博文堂や、峰田一步氏などの膽入りで、六千圓からかけて墓所を建造してあつた。百圓足らずの金を残して、淋しく死んだ雲右衛門であつたが、墓所だけは不思議に立派なものが出来て居た。

問題は葬式と云ふことだつた。借金ばかりで金が無いので、遺骨を品川の妙國寺へ送つた初七日の日も、會葬者は十人内外と云ふ淋しさであつた。廣い本堂の勤經に列した人達の中で、たゞ頭山滿翁の姿のみが、今日でもハツキリと印象づけられて居る。浪花節の藝人で生前恩顧に浴したらしい男は、一人も姿を見せなかつた。舊門下生とか、前の使用人とか云つた人達の中でも、どう云ふものか列席したものは極めて少かつた。

×

遺言狀を開くと云ふことだつたが、それも其の儘になつたらしかつた。『桃中軒雲右衛門は自分一人だから、跡目相續の要なし』そんな事が遺言狀の主旨らしかつた。

それでも桃中軒一家と云ふ事だけは生前から定めてあつた。『桃中軒雲右衛門事岡本峰吉を以て總本家とし、風右衛門事實弟米山竹次郎、牛右衛門事宮崎虎藏、峰右衛門事峰田定五郎の三人を本家とす』と記録に残つて居た。二代目雲右衛門とか桃中軒とか名乗る者があつても、それは自分勝手に名乗つて居るだけのこと、雲右衛門とは何の交渉も無いのである。巴右衛門とか武力とか、いろ／＼の桃中軒が出たり、いろ／＼の何右衛門が現れたりしても、藝道に至つては、昔も今も末熟なものばかりである。

その中で、雲右衛門節の正調を傳へて居るものは、若いが今の桃中軒峰右衛門一人だけで、他には傑出した者を知らない。ただ東家樂燕は、一時、雲の弟子となつて雲太夫と云つて居たが、今日では、東家節に雲節を加味して一家の風調を傳へて居る。雲逝いて十二年、雲の前に雲が無かつたやうに、雲の後にも、雲を見ること無くして今日に及んだ。

×

死の五六日前、宮崎震作氏と猪股秋霧樓が枕頭に居た時、雲は『今日は氣分が好いから…』と云つて、いろ／＼の思ひ出話をした。

『今までは家の外へばかり氣を配つて居て、内の者を疎略にして居たが、これから病氣でも

快くなつたら、お前達のためにも辯じてやる……』と云つたり『あゝ遣りたいなア、一聲千兩だに……』と云つたりした。そして今度全快して、高座へ現れるやうになつたら、一つ昔の文句その儘で昔の節を遣つて見たい……と云つて、辨慶衣川の枕詞を、細い聲で唄つて聴かせたと云ふことである。

『未にとりましたら、奥州衣川と云ふところで……これを辨慶衣川の立往生と云ふ……。その前段で、加賀の國は能美群、しかも小松の片ほとり、安宅の關で、藩鎮富樫正廣向ふへまはし、行者問答いたすと云ふ……辨慶は安宅が法螺の吹きじまい……』

猪股秋慶樓は、此の文句を筆記しながら、暗い心持になつたと云ふ。細い涸れた聲ではあつたが、優艶な古調で、如何にも昔の浪花節そのまゝらしい節を名残りとして、我が大雲右衛門は、終に起つ能はなかつたのである。

×

雲右衛門の死んだ大正五年には、新派の頭目高田實や、喜劇の澁谷天外も死で居る。天外は暫く云はず、同じ年に高田を失ひ、雲右衛門を失つた私達は、何と云ふ大きな損失を感じたことであらう。

芝居道の革命は、川上晋一郎が口火を切つて、高田實が大成したと云つても宜かつたが、浪花節は一人の雲右衛門に依つて、革命を成就したのである。奈良丸、小圓、若丸を初め、いろんな才人が輩出して、浪花節王国を築くの壯觀を呈したのは、明治四十年から十年間の大正五年までであつた。それまでは寄席藝として、主として労働者階級の慰安機關であつた浪花節が、一般世間人の嗜好趣味に投じて、大劇場へ現れるやうになつた世俗的効果も、雲に負ふ所が多かつた。單りその内容ばかりで無く、浪花節と云ふ聲曲のレベルを、世間的に引上げたことに於て、雲右衛門の事功を不問に附することは出来まい。

況んや彼の藝は、古い關東節を基調として、名古屋節を取捨し、美當一調の絃人軍談を參酌し、琵琶を加減して、雄渾莊重な雲右衛門節を大成したに於てをや。その三段流しや、憂ひや、落しやは、四年前に死別した妻女お濱の絃に、得るところ多く教えられること多く、啓發されたと云ふ話であつた。

×

このお濱さんは、雲の朋輩三河家一の女房であつたが、何時しか挑まれて通じ、遂に東京を落延びねばならぬハメに陥つたのである。

雲の人としての生涯に、拭ふことの出来ぬ濃い暗影を投げた忌むべき事件であつたにせよ、雲はお濱を得たために、藝の上では異常の暗示と刺戟とを受けることが出来た。彼が浪花節の節調の上に、前人未踏の新境地を開拓して、内容と節との調和に、旋律に、詩的價值を加へて來たのは、主として三味線を弾いたお濱の手腕と呼吸とに啓發されたのである。言葉を換へて云へば、友僚の妻お濱さんを得たことは、人間的に許し難い不道德であつたにせよ、彼はお濱の絃に依つて、一代の雲右衛門たり得たのであつた。

後年、新橋の美妓千鳥と同棲し、病妻のお濱と別居して居たが、大正元年に病妻の死歿した時、巨財を投じて盛な葬儀を營み、その冥福を祈つたのは、彼としては『藝道の恩人』に報ゆる心持もあつたことであらう。大雲右衛門の雲右衛門節が、大成して一世をチャームした裏面に、晩年を淋しく病床に送つたお濱さんの内助を忘れてはならない。

×

雲右衛門は茨城縣結城在の生れで、父の岡本繁吉も、兄の岡本仙吉も、浪花節語りであつたといふ。彼は生れながらにして、浪花節の血を享け、浪花節の産湯を浴びせられた。

第一の師匠は父の岡本繁吉で、最初は小繁と名乗つて、父に連れられて漂泊の旅に出た。天

性の器川人で、好い聲を持って居た父に似て、小繁もたゞの浪花節では無く、何處かに違つた才分のひらめきを見せて居た。父に死別れてからは、その名跡を繼いで、二代目繁吉となり、改めて濱勝と云ふ藝人に弟子入した。この濱勝は節よりタンカの切れた上手で、當時の仲間じうでも、五人の指に數えられる名人であつた。その濱勝に就いて、タンカの呼吸を會得した雲は、更に三河家の門に馳せて、名古屋節の妙味を究めた。當時の浪花節は、東の關東節と、西の浮かれ節と、中央の名古屋節とが三大流派に別れて、各その特色の下に鼎立して居た。

小柄ではあつたが、精悍な其の風貌と、藝道に於ける特殊の才分とは、三河家一門から尠からず驚異された。朋輩の妻女お濱に挑まれて、遂に其の生涯の記録に、一抹の暗い陰影を印したのも、其の頃のことであつた。

×

お濱と一緒に東京を落ちて、旅から旅の名も無い寄席をめぐつて居た間に、雲は最後の師匠として、春日井文之助を得た。文之助は三大流派の外に立つて、別に一家の節調を成して居た浪界の一彗星であつた。

文之助の浪花節は、品と、重味と、露ひとで、當時の浪界に異彩を放つて居た。その文之助

に師事した明敏な繁吉は、師匠の節に基調を置いて、後年、桃中軒雲右衛門一家の節を大成する素地を作った。この文之助は、後に松月と云つてお濱さんが病歿するまで、雲の絃を勤めて居たが、雲は時々、昔を懐かしがつては、『爺さん、昔の節を遣つて見ようか』と云つて、その文之助の節を低聲で唄つて、私達に聞かせて居た。

初めて横濱の寄席に現れた繁吉は、青年浪花節の天才として、忽ち好浪家の間に認められた。舊來の浪花節が辿つて居た卑近な題目や、淺薄な御入來調を捨て、氣品と情味のある題材と節調とを工風して辯じた。

『齡は若い、えらい浪花節が出たものだ』と云つて、濱の人氣は大したものであつた。けれども、お濱との問題で、折角の人氣にも故障が入つて、長く横濱に居ることが出来なかつた。

X

雲右衛門は功名心の強い、己れを信ずることの深い男であつた。これと云ふ教養もなく、文字にも乏しい男ではあつたが、然し藝道に對する熱意と自信と、破格の創作的伎倆とは、何人よりも餘計に持つて居た。

旅から旅を流れ〜て、沼津の町に辿り着いた時、繁吉とお濱とは、窮迫の極に落ちて居た。

『今に見ろ、浪界の王者になつて見せる』その意氣は旺であつても、その日の糧を得ることさへ、思ふに任せなかつた。その時、繁吉夫妻の窮迫を憫んで、涙ある世話をしたのは、汽車辨當屋桃中軒の主人であつた。繁吉のためには、恩人と云つても宜い此の辨當屋の名を記するために、こゝで初めて桃中軒の藝名をつけたと云ふが、これは眞偽が明瞭で無い。折柄、夕暮れの富士山には、一抹の黒雲が層をなして、雄大莊嚴な景致を見せた。桃中軒の恩義に感泣して居た繁吉は、夕富士の雲を仰き見て、落魄の旅の身にも心の溫さを覺えた。雲、雲、雲右衛門と呼はう——と、こゝで桃中軒雲右衛門になつたと云ふが、果してさうであるか否か。

けれども、桃中軒の辨當のやうな美味い藝を以つて、雲のやうに天下にはびこりたい——。これが雲右衛門の稚氣であり、野氣であり、街氣であつたことは疑ふ餘地があるまい。

X

斯うして九州に入つて、二年間の巡業中は、艱苦の雌伏時代から、得意の雄飛時代に入るべき血腥い革命興行であり、花々しい出世講演であつた。雲は九州の二ヶ年に於て、初めて天下の雲たるべき修練と自信を得た。

時は日露戦役の初期で、海に陸に勝報頻りに到り、世を擧つて戦争に胸轟く状は、眞に一代

の偉観であつた。機微を見るに敏い雲は、こゝに初めて『武士道鼓吹』の大看板を標榜して、緑の長髪に意氣を見せた。三河家節の短を捨て、春日井派の長を採つて、それに雲一家の創意ある節調を鹽梅したのが、當時の雲右衛門節であつた。筑前や薩摩の單調な琵琶に、物足り無さを感じて居た九州人は、競つて雲の節を渴仰した。その時、九州の一角に在つて、絃入軍談浮かれ節で、人氣を博して居たのが、彼の美當一調であつた。主として戦争の局面を題材として、忠君愛國の思想を謳ひ、敵愾心の助長に努めて居た。

けれども聲曲に對して、特殊の趣味と鑑賞を有して居る九州の青年階級は、美當一調の殺伐な實感味に飽いて、雲の情味ある傳記的史實を歓迎した。彼の輕快を捨て、此の莊重な節調に、隨喜し喝采した。

X

九州の二年間に、その存在を根強く知られた雲にも、未だ一つの大きな仕事が残つて居た。それは在來の語り物の内容に、大添削を加へて、一家の節に響應した『新臺本』を作らねばならぬ一事であつた。

由來、浪花節の文句は講談から脱化したもので、淨瑠璃のやうに確定した文字で制限された

り、音律上の規約で拘束されて居なかつた。従つて其の讀物の内容は千差萬別で、根柢のある臺本は一つもなかつた。悲しかるべき所に、華麗な形容詞を並べたり、輕快なるべき事柄に、沈痛な文句があつたり、何んな名人の浪花節にも、噴飯に堪えぬ文句が多かつた。雲右衛門は九州の出世興行で、先づ此の臺本の革新と云ふことを考へた。けれども文學的教養の無い雲に、臺本の添削は出來やう筈がなかつた。節調の新工風では、驚くべき才能を發揮し得る雲も、文章上の取捨に就ては、他の力に待つが至當であつた。

雲の初代の支配人小林陶雨や、雲を九州へ拉致した宮崎滔天や、長崎の鈴木天眼や福岡の芝尾入眞や、馬關の南部露香や、その他の二三氏が、主として添削に力を注いだと云ふが、これもまた?のことである。

X

放浪の旅藝人吉川繁吉が、天下の桃中軒雲右衛門となつて、久し振りに上京したのは、明治三十九年の暮であつた。本郷座に木戸錢一圓を取つて、連日の大入に浪界の記録を破つたのも、雲が三十四歳の暮であつた。

それから、雲の雄飛と得意の時代であり、遊蕩と驕慢との生涯であつた。緑の長髪に波打

たせたり、武士道鼓吹の看板に自負したり、二つ巴を家の定紋にしたり、稚氣と野氣と街氣とは、依然として雲の生命であつた。然し雲の浪花節は月日と共に圓熟して、古今獨歩の節調に、満都の好浪家を心酔せしめた。興業毎に大入ならざるは無く、大入毎に巨額の金を持っては、酒池肉林の豪興に、大石良雄が祇園一力の遊を偲んだりした。同時に天下の雲となつたにつけても、雲が第一に遺憾残念に思つたのは、浪花節藝人に對する興行師や世間の態度であつた。雲は先づ自分の藝の力に依つて、この因襲的待遇法を、根柢から打破することに成切した。そして有餘る金の力に依つて、浪花節藝人たる自分の地位を向上することに、雲は如何に苦心し努力したであらう。「浪花節藝人でも俺だけは別物だ」。これが雲の半生を彩つた唯一つの強い誇であつた。

×

明治三十九年の三十四歳までは、雲の放浪時代であり、修業時代であつた。四十年の春、上京した三十五歳から、大正二年の四十一歳まで、僅に其の七年間が、雲の得意時代であり、全盛時代であつた。

殊に大正元年の十二月、初めて歌舞伎座の大舞臺に現れた頃が、一生涯を通じての全盛期と

云へやう。關西の松竹兄弟と結んで、一年間を十萬圓で賣つたと取汰沙されたのも、三光堂の蓄音機に吹込で、三萬圓の吹込料を得たと吹聴されたのも、その前後のことであつた。奈良丸や小圓が、相次いで東京の大舞臺に現れ、浪界の三派鼎立を見せたのも、その時代のことであつた。雲右衛門の全盛期は、即ち浪花節の全盛期であつたと云ふも、決してヒイキの引倒しではあるまい。

雲右衛門の讀物は、忠臣藏義士傳にのみ限られて居た。昔は眞屋喜八とか、四谷怪談とか、安中草三などを辨じて居たが、雲右衛門となつてからは、全力を義士傳の完成に注いで居た。義士傳の中でも、南部坂雪の別れ、村上喜劍、赤垣源藏徳利の別れは、文句と節調の表現上、巧な調和をして、この三巻は雲一家の代表的名節調と云つて宜かつた。

×

羽織の裏に、十圓札や百圓札を縫ひ込ませて、それを祇園の幫間に與へたり、愛藏の金時計を九洲の恩人に送つたり、京都で興行中に削髮して、坊主頭になつたり、善い意味にも、悪い意味にも、數々の逸話があつた。

坊主頭になつてからは、雲右衛門入道と稱へて居たが、これは單に人氣の轉換をねらつた計

略ばかりで無く、或る女に關しての面白く無い話が潜んで居るといふことだつた。何れにしても雲は女好きで、然も女に縁の薄い人であつた。實子稻太郎の生母とは、不如意な間に生別し、第二の妻お玉のためにも名古屋で死水を取らねばならなかつた。然も此のお玉を失つた時には、特別に寢棺の大きく廣いのを造らせ、お玉の屍體の入つて居る傍に入つて、相抱いて慟哭久しかつたと云ふ、物凄いまでに思ひ迫つた逸話まで残つて居る。

めぐる因果は恐しいもので、お濱の肺が雲に移つて、それがお玉に傳染し、お濱、お玉も死んで行つて、最後に雲が死んだ。——と云つて、戦慄した人さへあつたが、肺が悪かつたればこそ、雲は人並以上に好色であり、その好色のために、命を縮めたのではあるまいか。

X

雲右衛門は晩年に、義士傳を大增補する計畫を立て、半井桃水氏の『大石藏之助』や、福本日南氏の『元祿快學錄』を参照し、新しい義士傳を讀みたい意思らしかつた。『日蓮記』にも着手する筈で、伊東の流罪一席だけ、非公式に發表したが、完成するに至らずして死んだのは、残り惜しいことであつた。

その生涯の放縦であつたのが原因で、遂に失意と不遇の間に、最後の呼吸を引取つたけれ

ど、雲右衛門は死ぬるまで、強い執着を浪花節に寄せて居た。辨慶衣川の一節を口誦んだり、再び高座に立つことを豫期したり、思へば痛ましい限りであつた。人としては缺點だらけの平凡人であつても、藝に於ける破天荒の天才者として、眞山青果氏と澤田正二郎氏の『雲右衛門』は、果して何を表現したであらうするか。

あゝ雲の前に雲なく、雲の後に雲なし。四十四にしては、餘りに早い死にやうであつた。もう十年、せめて五年も生きて居たら……と、骨に化つてしまつた今日でも、返らぬ繰り言が先に立つ。それからもう十二年になる。

瀧田樗蔭追憶

X

瀧田樗蔭と、坂本紅蓮洞と、何れが先に死ぬるか、どちらの葬式に、先に列席せねばならぬかと、私は心配して居た。とうに死ぬべかりし六十餘の紅蓮さんは、まだ築地の聖路加病院で、氣焔を吐いて居るのに、たうとう瀧田氏の方が、一足先に逝かれた。まだ四十四やそこらで、死ぬるにしては餘りに若い樗蔭が亡くなつたことは、十五年の親交あつた一人として、心

淋しいことである。

私は、泣くに泣かれぬ思ひがした。

×

明治四十四年の晩秋、十月末か十一月上旬であつた。日吉町の國民新聞社前に出来たカフェー・プランタンに、私は毎日のやうに出入しては、いろんな人達に逢ふことを、日課の一つにして居た。勤めて居た東京朝日社の前には、朝日倶楽部と云ふのがあつて、そこでは、社員達が、撞球に興じ合つて居た。社の池邊三山や、杉村楚人冠や、松山忠次郎など云ふ人々を訪ねる爲に、瀧田氏は彼の金時のやうな顔を、よく倶楽部に現して居た。

×

初めて言葉を交したのは、その朝日倶楽部では無くて、プランタンの一隅であつた。恰も來合せて居た正宗白鳥氏が、『まだ知らぬのか、さうか』と言つて、二人を引合せてくれたのだつた。『やあ、あなたが松崎さんですか、私、瀧田です。中央公論の説苑欄に、何か面白い物を書いてくれないか』と、瀧田氏は忙しさうな口調で、ツケ／＼と云つた。私は何んな挨拶をしたか、兎に角、喜んで書きませうと、引受けたのであつた。

×

その日を機縁として、瀧田氏と私とは親しく往來する仲になつた。西片町の宅へ行つて、國から來られた尊父などと一緒に、晚餐の御馳走になつたこともあつた。青山南町五丁目の私の宅に來られて、ビールを飲むこともあつたと云ふ風で、二人はよく一緒に方々を飲み歩いた。赤坂や、神樂坂や、下谷や、銀座や、日本橋や、瀧田氏は日本酒とビールを飲んで、よく文壇の噂や文士の取沙汰などをした。

瀧田氏も若かつたが、私も若かつた。

×

『新年號から書く積りですが、黒縮緬の女と言ふ題では如何でせう。東京市内や地方の小料理屋などへ巣くつてゐる女中、酌婦、淫賣婦などを主題として、いろんな人々へ宛た手紙風の通信文にしたいのです。人生探訪の一報告書として、實感を主とした記録は何うでせう』と、私は瀧田氏に相談した。

『宣いでせう、それで宣いですよ。關はずに思つた通り、ドシ／＼書いてみて下さい』と、

瀧田氏は飲みながら、激勵してくれた。

四十五年の新年號に出る原稿は、水天宮裏の私娼窟から歸る途中、何處かへ遺失してしまつた。それが爲め『淪落の女』の第一篇『黒縮緬の羽織』が、中央公論に出たのは、二月號からであつた。原稿を送つてしまふと、先づ瀧田氏へ電話をかけて、『何うでした、あんな風で宜いでせうか』と訊くのが、私の癖であつたが、瀧田氏も讀んでしまふと、『結構です、あの文句が振つてますね』などと、嬉しがらせを言つて呉れたものであつた。

『淪落の女』の原稿料は、一枚僅に六十錢であつたが、翌年の『女八人』は黙つて居たのに一圓にして呉れた。『女八人』は八ヶ月連載して、『十五年振りの歸省記』を書く豫定で居たが、國から歸ると間もなく、妹や妻子が腸チブスで、入院するやうな騒ぎとなつた。妹と妻が死で、社を休んで屈托して居るところへ、瀧田氏はわざわざ訪ねてくれて、『松崎さん、何うです、亡き妻の骨を抱いてといふ記録を書きませんか』と云つてくれた。

私の書く悪文が、中央公論へ掲載されるやうになつたのは、實に瀧田樗蔭を中心として、斯

うした経緯を経てからであつた。その前から杉村楚人冠は、『おい、何か書けよ、中央公論へ載せるやうにしてやる』と云つて居たが、杉村氏を煩はさずに、瀧田氏と相知ることになつた。それからは一圓五十錢、二圓、二圓五十錢、三圓、三圓五十錢、四圓と云ふ風に、次々に原稿料も高くなつたが、米代や暮し向は、それ以上に高い世の中となつた。

婦人公論主幹の島中雄作氏と 初めて盃を交したのは、四十五年の初夏、神樂坂の旗亭で、瀧田氏と朝から飲で居る時であつた。その頃、酒席の文士として、よく瀧田氏から噂を聞いたのは、小栗風葉、眞山青果の二家で、次では長田幹彦、谷崎潤一郎の二家が、よく取沙汰に上つた。酔へば義太夫を喰る位のもので、晩年甚だ得意であつた成駒屋の聲色などは、まだ手に入らなかつたらしく、その義太夫も減多には出なかつた。

先の妻が死でからは、青山南町四丁目の宅に、たつた一度來られたのみで、何でも暑い夏の日盛りであつた。ビールと氷を出すと、『松崎さん、簡易冷蔵法を教へませう』と云つて、氷塊を銅の藥罐の中に入れ、水を切つた中にビールを注ぎ、急速に動かしてコップに注ぎ、美味さ

うに飲で見せてくれた。その頃は冷蔵庫も無いやうな、貧乏暮しであつたが、瀧田氏も冷蔵庫よりは、斯うして飲む方が美味いと、得意さうに言つて居た。

×

朝日社の方へ辭表を出して、愈々退社と決した大正三年の秋、その日は恰も瀧田氏が社に來られて、とり屋の喜仙で私を待つて居た。退社手當金若干を貰つて、喜仙へ行つて見ると、瀧田氏は『何うでしたか、ウンと貰ひましたか』と、目を睨つて居た。『自分から退社したり、他社へ行くやうに誤解された者には、手當が極度に少いのです』と言ふと、瀧田氏はビックリしたやうに、『さうですか、たつたそれ位では詰りませんね』と笑つて居た。

×

私の方から、あれが書きたい、これが書きたいと云つたことはなく、何時も瀧田氏の方から、注文を受けて居た。『新聞記者懺悔録』だけは、此方から申し出て、一回分だけ載せて貰ふ筈であつたが、『面白いから次々に書いては何うです』と云はれ、四五回分を執筆した。面白いとか駄目だとか云ふことは、多くの場合に於て、瀧田氏の批判を聴きさへすれば、間違ひは無いやうであつた。

其の瀧田樗蔭氏が死んだのである。

×

中央公論に依つて世に出た作家は、五人や六人では無いが、説苑欄の方にも瀧田氏に依つて、初めて其の才分を認められ、中央公論に發表したことに依つて、有名になつた人々が少くない。村松梢風にしても、田中貢太郎にしても、大泉黒石にしても、山中峰太郎にしても、瀧田氏に負ふ所が深いやうであつた。今日は『改造』も生れて居るが、一時は中央公論が唯一の晴の舞臺であると共に、唯一の出世藝を演つて見せる登龍門なのであつた。

×

妻に死別し、東京朝日を退社し、修善寺の温泉へ行つて、新しい戀に熱中して居た頃、瀧田氏から手痛い手紙を貰つたことがある。『大兄は近頃、生活が非常に荒むと共に、述作の方面に於ても、何だか行詰まられたる觀あり、此際緊禪一番して、捲土重來さるゝこそ望ましき限りに候』と、文情大に激して、私に腹立たしい氣持を起させたりした。眞情流露の野人的風格の人で、何處かに親切な人間味のある懐しい樗蔭氏であつた。

×

『松崎さん、今日はあなた十圓お出しなさい。あとは私が全部引受けます』などと言つて、よく飲みに行つたものである。藝妓や女中が傍に居ても、そんな事にはお構ひなく、『姐さんこれだけ持つて居るのだが、まだ飲でも大丈夫だらうか』などと、明ら様に云つたりした。『松崎さん、あの藝妓は駄目ですよ。一寸、膝に手が障つても、プリプリ怒つたりして、赤坂や新橋の奴は、氣位ばかりが高くて、我々には駄目ですなア』と笑つたりした。

晩年は僅に二度、下谷で御馳走になつたが、『淪落の女』時代と違つて、瀧田氏は有福な紳士として、遊びの氣分も十餘年前とは、非常に違つて居た。けれども野武士は何處までも野武士で、藝妓達との應對振りや、一寸、唄ふにしても、四邊を構はぬと言ふ勇邁さが溢れて見えた。『田舎の旦那』と言つた風があつても、何も彼も心得て居る田舎の旦那には、藝妓達も推服して居るやうに見えた。

その瀧田さんのターさんが死んだのである。

中央公論に依つて、樗蔭瀧田哲太郎氏が、日本の文化に寄與貢獻した業績は、別に論ずる人

があらう。割合に愛憎心が強くて、或る場合には極端な迄に、黨派心と敵愾心を發揮して見せた位に、瀧田氏は直情徑行の人であつた。『そんなに酒を呑むと、危険ぢや無いですか』と云つても、『酒をやめて長命するよりは、若死にしても飲む方が宜い』と云つた瀧田氏である。四十やそこらで死んでも、瀧田氏にとつては、本懐であつたかも知れない。

早く死ぬべかりし紅蓮さんは、まだ病床に寝そべつて、重態ながら氣焔を吐いて居るのに、長命すべかりし樗蔭氏の方が、先に逝てしまつたのである。清水谷の階樂園で、泊鷗會の例會を開いた夜、村松梢風君から、『たうとういけなかつた』と聞いた時、私は『たうとう其の時が来たのか』と、別に驚きはしなかつた。告別式の時、徳富蘇峯先生に肩を叩かれて、『おい、大きくなるなよ』と云はれて、初めて、人事で無いやうな氣持がした。

あゝ澤田撫松

『澤田撫松君が死んだ。今夜はお通夜する積り……』と、村松梢風から速達の葉書が來て居

た。外出先から歸宅した私は事の意外にびっくりして、『おい、澤田さんが死ださうだよ』と妻に向つて云つた。『へえ、さうですか、村松さんからの速達は、その知らせでしたか』と、妻も驚いたやうに云つた。病氣とも何とも先觸せず、杳然として逝つた友達の訃を聞くは、寂しいものである。殊に自分と同年配の知人が、ボクリと死んだ知らせを聞くと、何だか他人の事では無いやうな心地がして、怪しいものである。

×

日が暮れてから間もなく、豊川稻荷前から電車に乗つて、青山一丁目で乗換へて、信濃町から省線電車に乗つたが、私はいろんな事を考へた。『澤田君は何歳だつたかな』と、『何んな病氣だつたのか』と、その事ばかりであつた。折角、大衆文學の方へ乗出して、少しは報いられさうになつて來たのに、今、死んではさぞ残念だらうと、そんな事も考へられた。それにしても、五十何歳位であつたらうか、二三かな、四五かな、七八かなと、二十餘年來の知友の一人でも、齡のことになると、何時もニヤ／＼笑つて居た澤田撫松君であつた。

×

西大久保二〇三——と云つても、一二度、通りが／＼りに寄つたゞけで、大久保か新大久保

か、下車驛さへも忘れて居た。上野線の大久保驛だと思つて、往復切符を買つたが、乗て見ると、中央線の大久保驛で、歩くのが少し遠かつた。それに暗夜だつたので、道を歩き迷つて、二三分も二〇三を探るのに汗を流した。この二十年の舊友とも、それほど遠々しなくつて居たのかなと、私は何とも云へぬ淋しい氣持がした。病氣の知らせが無かつたのも、それでは無理も無いと思つた。十時頃に主人の亡い澤田家の門を入つた。

×

玄關を見ると、木村毅、井東憲、梅原北明、座間止水の諸家を初め、書店朝香屋の主人が居て、いろ／＼と世話して居た。そして田中貢太郎や村松梢風が來て、お通夜することになつた。悦子夫人に逢つて、その後の御無沙汰よりも、哀傷の言葉を先に述べねばならぬのが、私には極り悪い思ひさへした。感冒が因で化膿性腹膜炎とやらになり、慶應病院に入つて、正木不如丘博士の診察を受けたと、正木不如丘の名が二度も三度も出た。夫人から『五十七で御座いました』と云はれて、初めて故人の齡を知つたのも、私には淋しい氣がした。

×

十五日の告別式、埋葬式には、江見水蔭、白井喬二、藤澤衛彦、長谷川仲、吉岡將軍などの

顔も見えた。ドシャ降りの雨の中を、寺の本堂で休んで居た時、江見水蔭氏は故人の二六記者時代を語つて『十何人誦首した中に、澤田君も居つてね』と撫然とした。その報復だらう、こんな雨の中を立たせられた』と云つて、ニコ／＼笑つたりした。その後、讀賣新聞に、白井喬二や佐藤紅緑の追悼文が出て、一流の文豪とも云つて然るべき風格の人だつたと推服し、一流文士になぞなるべき筈ではなかつた人物だと、惜しんだりして居た。

×

私が初めて澤田撫松を知つたのは、二十年前の國民新聞記者時代で、私も三十になつたばかりの若さであつたが、澤田君も三七八と云ふ壯年であつた。何となく長者の風があつて、フロックや色變りのモーニングを着て、大跨に歩く姿は、儕輩での異彩であつた。一つの雑報を書くにも、丹念に苦心して、一段書くのに二時間も三時間も要したほど、君は文章を苟くもせず、且つ慘憺たる苦心をした。會心の一文が出来る時、調子をつけて朗讀し『何うです、こゝが良いでせう』などと、一人で悦に入つたことも珍しくなかつた。

×

私などよりも、一步も二歩も先を行つた新聞記者で、殊に司法記者としては、独自の境地を

有つて居た。法廷に現はれる諸種の犯罪事件の中から、人生の種々相をつかみ出して、それを特殊の新聞記事化する上に於て、澤田君は何人よりも、早くから着目し、早くから努力して居た一人であつた。その著『男の心、女の心』や『男三郎の告白』や、中央公論、改造などに發表した諸作の中には、司法記者生活に於ける副産物としての報告書、雑筆、感想文の類が多かつた。それだけでも、君の苦勞と業蹟とを、閑却することは出来ない。

×

『春宵島原巻譚』に依つて、君は新聞記者の殻を脱ぎ捨て、大衆文藝の領域内へ、進一步した傾向を著しく見せて來た。近く文藝俱樂部へ連載して居た『大正女水滸傳』や、『騷人』に發表した諸作は、漸く一家の體を完成して居たに、實に惜しいことをした。嚴密に云つて、澤田撫松を大衆文藝家と見るべく、私にも異存はあるが、假にその仲間の一人としても、君は多くの異色を有つた別種の一人ではなかつたらうか。その藝は單調であり、その文章は地味であつても、君には独自の壇場があつて、何人の追従をも許さなかつた。

×

國民新聞に居た時、夜遅く吉原遊廓に情死事件があつて、君の出勤を煩はしたことがあつた。

フロツクに黒の中山帽で、二人曳の腕車で駆け付け、情死の現場を見て歸社したは良いが、其筋の人と間違へられて、應揚に振れ舞つたため、肝腎の姓名など調査する餘裕がなかつた。例の凝り性の文章で、事件を書き初めると『やゝしまった』と云ふ。『澤田君、何うした』と云ふと『實はね、現場の光景ばかり見て居たので、情死者の姓名や原因などを、調べて來るのを忘れた』と、苦笑したのも、思へば二十年の昔である。

×

輓近はよく旅へ出て居たらしく、方々の温泉場へ行くと、よく『澤田撫松先生』の話聞かされたものである。信州の浅間へ行つた時にも、羽越線の温海へ行つた時にも、君のことが話題にのぼつた。一寸した旅へ出て、君はその遭逢の中から、ロマンスを捉へて來ることに、決して無關心ではなかつた。法廷と、旅と、古書と、君の人生物語は、それ等の中から哺くまれて居たことに、成程と合點された。その表現は地味で、その描寫は派手で無くとも、梅原北明の謂ふ『南京豆のやうな風味』が、私達を推服させたのである。

×

佐藤紅綠翁が云ふやうな、澤田撫松君は世相の研究家であつたかも知れぬが、白井喬二氏が

云ふやうに、文豪と云ふべき風格の人では無いかも知れぬ。然し何處かに西京人らしいユツクリした風格があつて、應揚な態度は新聞記者に不向な人物に見えた。二六、國民、讀賣、帝國、獨歩社と云ふ風に、記者生活を轉々して居ながら、何處かに記者ばなれのした別な風格が放射して居た。人生探訪の報告者として、漸く一家を成して來た今日、想ひがけぬ病のために、果敢なく永眠したことは、本人にとつて、如何に無念であつたことか。

×

サンデー毎日に、盤城炭坑の見聞記を書いたのが、絶筆になつたさうだが、私にはまとまつた文藝的情話の類よりは、事實あつた問題や事件を取扱つた短篇の中に、反つて君の特色を見るが多かつた。法廷の事件を題材として、一篇の讀物を提供する人に、今井藻水、高橋鬼城(?)猪股電火の諸君があつたが、澤田撫松は何人よりも、一足先を拓いた人であつた。明治三十九年九月、國木田獨歩の獨歩社から出した野口男三郎の『獄中の告白』一卷の如きは、君の努力に依つて遺された貴い文獻の一つと云ふことが出來やう。

×

所謂大衆文藝の第一期總決算とも云ふべき平凡社の一圓本豫約募集廣告に、澤田撫松の名を

発見した時、私は君のために氣の毒なやうな氣持がしたと共に、また嬉しいやうな心持もした。たとへ其の内容は十人十色であり、同じ大衆文學と云ふ名の下に、無造作に十把一からげすることの無茶は、本屋の商行爲として容認するにしても、『君も遂に大衆文學の仲間入りをしたのかなア』と云ふ感じが、何と云ふことなしに私の胸を打つた。そして『君もたうとう行く處へ行つたのかな』と思つて、此の老友のために、強いて安心しやうと努めたりした。

×

新聞記者生活の果敢ないこと、不安なこと、厭なこと、心淋しいことを、人一倍、身にしめて居ながら、いまだに其の外縁を彷徨して居る私などに比べると、澤田君はよくもコツ／＼として、長い間の忍苦に堪へたものである。そして其の行き着いた所が、一千ペーヂ一圓の豫約本であるにもせよ、それだけでも考へやうに依つては、感謝して宜い報償ではあるまいか。十萬二十萬と賣れて、一萬二萬の印税が入ることは、乏しく無い君の厨にしても、決して悪くはない筈だ——と、私はそんな胸算用までして、此の老友の老後を、祝福したい氣持になつて居た。

×

品川の東海寺に住で居た頃、一日を出かけて往つて、若い夫人の手料理で、満腹した折のこ

とを思ふと、君とも二十年の知合であつた。大久保の家には澤山な藏書があつて、宇野浩二氏も驚いたさうであるが、そこにも君の正しい心掛けの一端を見ることが出来た。無遠慮な私は『君は良い材料を持つて居るのだが、料理加減が生眞面目過ぎるので、折角の珍魚でも、不味く食べさせることがあるね』と、云つたものだつた。人の事は何でも云へるが、さて自分自身の上になると、澤田君がニヤ／＼して應酬したゞけ、何んなに冷汗を流したことか。

×

近頃開始した日本新聞學院で、私は記事學の中の記事作法を受持て居るが、前週も木曜の夜の講義に出て、澤田撫松君の話をした。大衆文藝家としての君を評論すべく、時の早きを思ふ私も、新聞記者として歩いた君の足跡には、後から来る人々に就いて學ぶべき點が、一つや二つでは無い所以を語つた。大衆文藝全集の中に名を列ねて居る人々の中でも、記者出身の人々は、江見水蔭、岡本綺堂、矢田挿雲、長谷川伸、平山蘆江、本山荻舟等、等、等、一人や二人では無いことを話して、中にも澤田撫松君には、異色があつた所以を力説した。

×

思ふに、大衆文藝の一人として、澤田撫松の遺した業績は、年經て次第に影の薄くなることが

あつても、新聞記者として法廷記者として働いた澤田君の足跡は、何時までも消磨することなく、私達の上に輝くであらう。澤田君の眞の企圖も、大衆文藝など云ふ體の好い通俗方面でなくて、新聞記事の革命と云ふ大仕事ではなかつたらうか。——私はそんなことをも考へつゝ、一場の漫談的講義を終つて、大學出の新聞學生達を見廻した。死でしまつた今日となつては、も少し長命させて、一緒に旅へでも出たい澤田撫松兄であつたものを……。

カフェー十夜

一、オートケストラ

地震後期の世相が、いろんな場面を見せて居る中にも、最も色濃く産物は、依然としてカフェーの世界である。

神樂坂でも、銀座でも、浅草でも、カフェーならではの夜も日も明けぬと云ふ有様で、カフェーの女ならではの、話にならぬと云ふ始末である。吉原遊廓の遊びの気分は、次第に現代化して居ながら、これを經濟的の關係に見て、眞の民衆化と云はれぬのが、今日に見る實狀である。

市内に散在する藝妓の群にしても、これを民衆意識の上から、一種の機關として見るには、そこに様々の相容れぬ條件が關所を構へて居る。そこで若い男の仲間が、最も明るく最も堂々として、最も大手を振つて接觸し得る機關は、カフェーの他には無いのである。若い男性の仲間には、カフェーの醸す強い色調のみが、最も現代的の魅力を醗酵して居ると云つても、それは決して誇張でない。昭和時代の今日となつても、明治四十一年頃からの存在として、かなりな月日を闊して居ながら、カフェーやカフェーの女は、何時までも新しく若々しく、近代生活者の核心を衝いて居る。全く私達は、勤め先からの歸途、満員電車の通過を怨めし相に眺める黄昏頃、そこで友達などに逢ふと、何ちらからともなく『何うだ、久し振りぢやないか、一杯やらう』などと肩を叩きあふ。懐中の都合に依つて、とり料理へ入る時もあるが、大抵の場合には四邊を見廻して『先づカフェーへ』が、月並のやうになつて居る。そこには極めて容易に素早く、求めるところの酒なり食べ物なりが、割合に安價で提供されるばかりではない。そこには若い美しいウエートレスが居て、私達が異性に求めて居る嬌態や秋波の艶めかしい雰圍氣に、ほんとに手軽く接觸する事が出来るのである。試みに銀座界隈を歩いて見ても、神樂坂の夜を散歩して見ても、そこには必ず若い多くの給仕女を賣物にしてゐるカフェーが、殆ど

軒並と云つても宜い程にある。少し人々の出盛る町々と云へば、無くてならぬ景物のやうに、或は重要な中心物の如くに、大きく小さく、廣く狭く、美しくぢ、むさく構へてゐるのが、此のカフェーであり、洋食店であり、バーであり、喫茶店なのである。

カフェー十夜、私は新春の小閑をカフェー巡りに興じつゝ、そこに醸される『時代相』を観たいと思ひ立つた。そこには煙草の煙と酒の香とが、混然雜然として、一大オーケストラを奏して居るのみでなく、そこには青春の潑刺さと美しさとに誇る男女の群が、性の交響樂を奏して居るのである。その波動の起伏の中に見る流轉の姿を見て、センチメンタルな感慨に耽るも、一興ではないか。

二、さすらひの女

赤坂溜池の演伎座で、新國劇の澤田と其の一黨が『安中草三』か何かを演じて居た頃であつた。私は幕間の北廊下で、煙草を喫して居た時、死んだと思つて居た一人の女性に逢つて、世にも不思議な思ひをした。

髪を流行の七三髷無しに結つて、大柄な縞のお召か何かを着て居る姿よりも、彼の女には他

の特徴があつた。それは筋肉が何となく痩せ細つて居て、子供の一人か二人位は生むだらしい女としての衰へが、ヒドク眼に立つ身體つきであつた。そのくせ何處やらに、残んの色香が漾うて居て、眼に何とも云へぬ魅力を有して居るのが、異性の注意を惹く類の女に見えた。素人の婦人らしくも見えず、何人かの圍者のやうでもあるし、一寸見たゞけでは、素性の知れぬ女に見えるのであつた。私は『何處かで見えたことのある女』のやうな氣持がして、彼の女がイゝむで居る傍らを、わざと注意を惹くやうな足どりて歩いて見た。赤坂の老妓お千代や、若林の三榮、小としなどが華やかな装ひをして、捲草を吹かして居るに對照して、彼の女の存在は餘りに影が薄いやうに、私には眺められるのだつた。『まアお久し振りね、矢張り、松崎さんでしたわ……』と、彼の女は私の傍近く、赤箱か何かの匂ひを漲らせながら、笑顔を見せるのであつた。『何處かで見えたことのある女だと、私も先から思つて居たが、ほんとに久し振りでしたね』と、私は突差にさう云つて、女の顔を凝視めた。けれどもさうは云つたものゝ、その女が何處で逢つた何と云ふ女か、其の時はまだ私に思ひ出せぬのであつた。電車の中などで『やゝ暫らく……』などゝ言葉をかけられても、其の人が何處の誰であつたか、一寸思ひ出せぬやうな事は、多くの人々に逢ふことをも、職業の一つにして居る新聞記者には、有り勝ちのこと

なのである。『何處かで見たとのある女』に、ゆくりなく邂逅して、親しく言葉をかけられても、何と云ふ女性であつたか、私は一寸、思ひ出せなかつた。そして、『私、赤坂から出て居ますのよ。分千代村から千代香と云ひまして……。分つたでせう』と云はれても、私はたゞ『へ、君が藝妓に……。』と、合槌を打つ他はなかつた。『この頃、おいでになります』銀座の方へも』と訊かれても、私の衰へた記憶力は、彼の女の前身を、思ひ出すことが出来ぬのであつた。『さう、君は銀座のライオンに居たつけね』と云ふと、彼の女は『まああなた、何うかして居るわね、忘れてしまつたの。随分、いろんな私のロマンスを、お書きなさつたくせに。』と、彼の女はズバリと上段から、私をガンと云はせたのであつた。——眞に申譯の無いことであるが、私は初めてこの女が銀座の臺灣喫茶店に居て、初期ウエイトレス時代に、クエンの如くに振れ舞つて居たお菊さんの後身であつたことを、漸くにして思ひ出しもし、合點もしたのであつた。

思へば、それから十年の月日が過ぎ行く間に、彼の女は嫁して人妻となつたり、二人の子の母となつたりして居ながらも、依然として流轉の旅を續けて居たのであつた。

三、流落の旅路に

分千代村の千代香になつたお菊ばかりでなく、カフェーの女から藝妓になつたり、お妾になつたり、人妻になつたりした女は、數へ切れぬ程あつた。

活動女優中のスターとして、映畫の上に一世の人氣を集め、喝采を博して居る五月信子も、その前身は赤坂カフェーの女給なのであつた。嫁して人妻となつて居るやうな女性は、たとへ一時の世渡りの方便から、カフェーのウエイトレスに、その身を落して居ても、その心構へだけは眞面目で、何處までも女としての正しい、明るい一筋道を辿つて、何の悔むところも無かつた女と云ふことが出来る。不幸にして藝妓となつた千代香のやうに、淋しい残んの色香を、待合の一室に現すやうな、氣の毒な境涯に墮してゐる女にしても、それは『カフェーの女』なりしがためとは云ふことが出来ないと思ふ。お菊の如きは、カフェーの女として、多くの若い男性の中に、その全身をさらけ出さなくても、性格やら境遇やらの上から、何うしても人妻としては、落着くことが出来ない類の女性なのであつた。それに比べると、活動女優の五月信子などは、カフェーからスタジオへ、巧に其の境涯を轉換して、精神的にも物質的にも、女とし

てこれ以上充たされざるは無いやうな、幸福に微笑むで居るのである。その幸福らしく見える反面に、何れほどの悲しい痛ましい生活の搦め手が寄せて居るにしても、千代香の現状に比べ見れば、何と云ふ不幸のコントラストなのであらう。人々は其の職業的位置やら、環境の空気がらに見て、カフェーの女を、一口に不真面目な若い女の群の如くに、見てしまはうとして居るが、それは餘りに思ひ遣り無いことである。凡そ當代の若い美しい職業女が、性的に墮落して行く経路は、一律一體に觀られないが、これを大束に二大別すれば、經濟的原因と性的の關係と見ることが出来る。玉の井新地に日蔭の花と咲いて、色慾を漁る浮かれ男の群に、果敢ない一顰一笑を賣つて居る女達の中にも、私は銀座のカフェーから、流落して行つた一人の女性を見た。その女の如きは、多淫な父が下婢と通じて生れたと云ふ程に、宿命的に呪はれた日の下に、幸か不幸か人並以上に、美しくも亦憐れに育つていつた女の子なのであつた。玉川在の農家に里子として育つて行く間に、彼女の女は世の中の鹽と云ふもの、苦勞と云ふもの、涙と云ふものを、一人では背負ひ切れぬ程に、シミジミと味はねばならなかつた。そして十六歳の春頃から、次々に男から男へと移つて行つて、銀座のカフェーに現れる頃には、もう一人前の多淫型な女に、訓練づけられて居た。そして彼の女は心から男性を呪つて、『男と云ふ凡ての

男を、私は痛めて遣るんです』など、平氣で大ビラに言ふ程の、自己錯覺に陥つて居るのだつた。自分の血肉に漲る強い好淫性の缺陷を、自分では少しも心つかずに、何も彼も『男が悪いため』と、片付けるやうな、女になつたのである。――

私はこんな事と思ひながら、ライオンのバーに入つて見た。

四、近代女性の色

何んなカフェーに入つても、よくもこんなに、若い美しい娘達を集めたものだと、心から感心させられる程に、何處のカフェーに行つて見ても、そこには必ず若いウェイトレスの群が、美しい濃化粧に着飾つて居た。

そして神樂坂ではプランタン、淺草ではアメリカの改名オリエント、銀座ではライオンの三軒が、中でも美しい女給で知られて居た。尾張町の四ツ角に位置して、あはたゞしい電車の騒音に、何となく急ぎ立てられるやうな落着きの無い氣分を咬られるが、それでもライオンは、東京唯一のカフェーとして、地の利を得て居る大老舗なのである。日本カフェー第一期時代のお客様として、そこら邊りを泳ぎ廻つて居た頃から思へば、時世の轉變と云ふものが、今更の

やうに感ぜられたりした。新聞記者の細君になつたり、法學士の夫人となつたり、伯爵嗣子の愛人になつたりしたやうな女が、その頃のライオンには居たのだつた。今日では道玄阪へ行つても、龜戸の方を歩いて見ても、大久保、目白、高田の馬場と云ふ風に、何んな場末の淋しい町にも、カフェーは無くてならぬ生活機關の一つとして、必ず三軒五軒と云ふ風に、存在して居るのである。そして何んな小さい、狭い乏しいカフェーにも、形容だけは『近代女性』然とした女が、二人や三人は構へて居て、『いらつしやいまし、お誂へは……』など、艶めかしい笑顔を見せるのである。それが地震後には、俄に異常な勢ひで増加して来て、東京生活者は一時、カフェー攻めに逢つたと云つても宜い程に、これ等の簡易飲食機關に、食傷しさうな状態に見えた。それから後、一年餘と云ふ月日の流れは、亡ぼすべきものを亡してしまつたと共に、榮え行くべきものには、加護の情を加へたのが、大正十四年新春一月の現状では、それを銀座界限のみに見ても、驚くべき増加であり、驚くべき繁昌なのである。松月、キタニホン、銀ブラ、タイガー、ブラントンなどを初め、構へに大小の差別があり、設備に美醜の異ひはあつても、銀座を中心とした東西の横町には、未だ多くのカフェーが、散在して居るのである。そしてそこには、白い上着の瀟洒な男ボーイは居なくて、七三やら耳隠しやら、銀査返しやら

高髷やらの若いウエートレスが、美しい姿を見せて居るのだつた。ライオンにしたところで、十餘年と云ふ短からぬ月日の間に、其の客の顔觸れが、走馬燈のやうに變つたと同じく、給仕女の上にも多くの出入があつて、そこに様々のラブシオンを展開して來たのである。今日では一種のライオン氣質と云ふが出来て、何となく他のカフェー女とは違つたやうな、思ひ上つた風を見せて居ることに、氣つがぬ人は少いであらう。『カフェーの女だなど、餘り馬鹿にして頂きたく無いわ。他の家は何うか知りませんが、私達はライオンに居ますウエーターよ……』と云つた風な、そんな調子を感じかぬ人があるか何うか。

私はホットウキスキーを傾けながら、姿見の前に老を知らぬ氣な女達の上を考へた。

五、色香の渦まき

姿見の前に老の行くを忘れて、自らを美しいもの、若々しいものと思ひ上つて居るのは、單りカフェーのウエートレスのみでは無い。

たゞ一軒のカフェーで、身の上の始末を着けてしまふ女は、中でもまだ仕合せの方であるが、多くはカフェーからカフェーへと、轉々としてさすらふ間に、何時しかカフェーお君など云は

れて、境遇に悪化された第二の性に陥る者が多い。宮益坂下のカフェー藤屋に、その昔、お文と云ふ美しい娘が居たが、彼女の女は派手な大柄なスタイルで、色の白い令嬢くした美貌の爲に、遂に墮落したやうであつた。數寄屋橋内に在つたスケート場に、三田の學生など、一緒に、美しく着飾つた姿を現して居たのも、五六年前の事であつた。今日では淺草雷門界限へ行くと、下町姿に盛装させた女給を置いて、飲食物以外に客を集めて居るカフェーもあるが、四年前までは、カフェーの女と云ふと、極つたやうに現代風のハイカラが多かつた。それでも雷門のよか樓などには、高髻や銀杏返しに群が居て、お竹、お園、お文、お芳など云へば、若い男達の群に美しい女神の如くに、注目されたものである。中にも淺草萬龍と云はれたお竹さんは、若い法學士と熱烈な戀に落ちて、幸福な家庭の夫人となり、お園さんはまた人もあらうに、老優澤村源之助に戀されて、その妻となつたりした。別に取立て、云ふ程に、洋食が美味いと云ふでもないが、例の吉永良延翁が、よく人情の機微を察して、早くから洋食と美人に着眼したのと、その細君の愛想好い怪腕に依つて、一時は人氣を集注したものであつた。今日では既によか樓時代が過ぎて、雷門界限はオリエンツ時代となり、更に聚樂時代を出現しやうとして居る。銀座界限にしても、舊い清新軒などは影が無くなつて、ライオンに次ではタイガー

などが、覇を稱へて居るやうに、カフェーも時の流れと共に、様々の變遷を見せて來た。全く今日の東京生活者は、『美人の居るカフェー』を、漁り歩かなくても、どんな場末の狭い小さいカフェーへ入つても、思ひがけなく美しい女を發見して、吃驚するやうなことが多いのである。よくもこんなに、若い美しい女達を集めたものだ、感心させられる程に、何處のカフェーへ行つて見ても、色香の盛りに微笑むで居る女給達が、渦を卷いて居るのである。殊に過ぐる年の大震災は、女の生活を一層不幸なものにしたのか、今までのカフェー女とは、その型を異にした若い女達が、カフェーへ現れるやうになつたらしい。現に銀座のライオンには、葎町や赤坂に居たことのある藝妓が、ウエイトレスとして現れて、座敷馴れた取なしで、人々の好きな視線を引き付けたものである。カフェーの女から、藝妓になつた女もあるかと思ふと、藝妓の群からカフェーの女へ巢換へした女もある程に、女の世の中はアブノーマルな現象を見せて來た。

そこには女の職業として、何の恥づる所もない正しい明るさがあると共に、性的感情の醗酵と、誘惑、墮落などの陷穽を無視することは出來ない。

六、日比谷交叉點

日比谷の交叉點附近へ行つて見ると、日比谷カフェーを初め、カフェーユニオンやオデッサなどが、各自の特色を發揮して居た。

山勘横町のオデッサは、純洋式らしい料理の風味よりも、女給達の近代味豊かな表情に、勤め人階級の若い人々を喜ばせて居たとか、ユニオンの女主人は、静岡縣の生れで、久しく露西亞のモスクワに居て、印度洋上に客死した長谷川二葉亭とも、面識があつたと言ふ。四十の坂を越した大年増ではあるが、十餘年を異國の風土人情の中に送つて、近代露西亞の空氣に觸れた女だけに、何處か潑刺とした新味がある。戀盛りの妹さんと二人の他に、若いウエーター二三人を置いて、小さい狭い店構へながら、特殊の氣分を醸酵して居た。死んだ安成貞雄君を初め、蒲田スタジオの畑文學士、劇作家の邦枝完二君、その他の善友惡友達で、今日も依然として榮えて居るやうである。若し夫れ日比谷カフェーに至つては、震災前から粗末な構へで、料理にもこれぞと云つて特色は無いけれども、不思議に繁昌するカフェーである。女主人が稀に見るの怪腕家で、美しい女給を集めることに、格別の便宜を有つて居るらしいのも、繁昌の一原因で

あらう。全く此の家の女給と云へば、十八九から二十七八まで、十人近い女が何れも美しく、丸鬚に銀杏返しに、七三に高鬚に、何んな階級の男にも、相應するやうに出來て居る。それがテーブル一つ一つに着きぎりで、お酌もすれば話の相手にもなると云ふ風で、濃厚な情調が自然に醸されるのである。學生達がドグロを巻いて、ナイフやフォークの飛ぶやうな、殺伐な光景を現出することもあれば、血を流すやうな醉漢の立廻りなども、珍らしくないと云ふ話である。女給達の一顰一笑に原因するやうで、それだけ空氣が緊張して、一種の面白さが流れて居る。今度の休みには東京驛で落合つて、『ね、芝居も月並だわ、森ヶ崎も面白くないし、箱根へ行きませうよ』などの會話も、奔放にして自由であらう。若い作家の廣津和郎君が、『神經衰弱時代』に戀を得たのも、日比谷カフェーのウエーターであつた程に、様々な色香のシーンも、今日まで繰返されて來たのである。一帯が地下室めいた暗い感じで、何となく陰慘な氣分であるだけ、それだけ女給達の白い顔が、浮き繪のやうに美しく見えるのも、日比谷カフェーのカラーであらう。この界限には牛鍋の幸樂あり、花月の民衆的食堂あり、更に主義者の岩崎善右衛門君は魚善さんに化けて、おでんの食堂を開いて居るが、女の世界は何と云つても、日比谷カフェーに止めを刺す。私はそこに居た女達が、嫁して人妻になつた幸福を眺めたり、流

れ流れて淪落の群に入つた不幸をも、今日までに見せつけられて來た。名は忘れてしまつても、折に觸れて其の眼を想ひ起し、其の額を思ひ起す時、『あの女は何うしたらう』と、淡い思ひ出の酒に酔ふことも度々ある。

それほど日比谷カフェーの女には、出入りも繁かつたし、愛慾の場面も多かつたのである。

七、神樂坂の夜色

神樂坂と云へば、直ぐ小澤を思ひ起し、田原屋を云々する程に、この二軒は古いレストランで、カフェーで、又バーである。

以前は若い男のボーイのみで、美しく着飾つた女給が居ないため、近代カフェーの情趣は無いが、何と云つても神樂坂の双壁であらう。他にスターがあり、神養軒があつても、美しい女給で知られて居るのは、坂上のプランタンであらう。電車線路を越した左側の路次内で、昔の明進軒跡に、小さい狭い構へであるが、萬事が風雅に出來て居た。主人の松山省三君が、洋畫家であるだけに、地の凹凸を巧に利用して、二階建の文化住宅的構へも、決して淺薄な氣持を起させぬ。此のプランタンが、日吉町に在つた時代には、マカロニ料理で賣出したものであるが、

東京最初のカフェーとして、東京最初の女給を置いて、若い私達の心を唆つたものである。そこにお柳と云ふヒステリカルな女が居たり、お鶴と云ふ某候爵の御落胤も居たが、此の二人の女の上にも、最初のカフェー情話が編まれた。お柳は或る通信記者と戀に落ちて苦勞をしつゞけて死んだが、お鶴も萬安や天下茶屋の女中となつてから、二十六七歳で死んでしまつた。そこには長田秋濤、正岡藝陽、押川春浪などを初め、赤坂の萬龍と思ひ惱んだ恒川陽一郎君なども、人目を忍ぶやうに出入りして居た。尾張町角にライオンが出來たのは、此のプランタンが出來た頃で、京橋の橋詰にビヤホールと、新橋際にビヤホールが有つたに過ぎない。十二年の震災災は、これ等の舊いものを壊したと共に、私達の懐しい思ひ出をも亂して、プランタンは銀座通りに和洋料理として存在すると共に、神樂坂にも出現して居たのだ。そこには二二三から四五と云ふ、何れも人柄らしいウェーターが三四人、しとやかに侍して居たが、特色は何と云つても、日吉町時代からの倶楽部的氣分であつた。文壇の新人達と云つても、久米正雄、田中純、廣津和郎、加能作次郎、宇野浩二、佐々木茂索、片岡鐵兵の面々を中心に、美術家やら文學青年やら、毎夜の如くに賑はつて居た。一つには松山畫伯との友人關係から、時に不良氣分も發揮して居たが、一帯の感じが近代的で、如何にも若い人々の要求に同應したカフェー

エーであり、レストランである。帳場には斷髮洋装の女性が居て、何となく支那婦人らしい面貌ながら、『澤田正二郎君の妹か』と云はれる程に、瀟洒端麗な美人である。『君は何と云ふ名？』と訊いても、『名前なんか何うでも宜しいわ。私はプランタンの女。』などと、軽く逃げてしまうのも、微酔の胸には心憎い。洋畫を本職とする他に、ダンスも一人前以上なら、寫眞術も玄人の壘を摩す松山省三君が、主人として經營するプランタンに、類を以て集る善友悪友のメンバー中に、斷髮洋装の君よ、戀を感じた人ありや無しや。酒の香と煙草の煙の中に、ダラけた男の他愛なさを見て、三年五年と過ごして行く女の心に、果して眞實の戀が宿るか何うかは疑はしい。

多くのカフェー女が、男を男と思はぬやうになるのも、是れ宿命か。

八、郊外住宅地に

國分寺行き和省線電車内で、中野へ歸る竹越三又先生に逢ひ、近松秋江君に逢つた。『あなたのお書きなさるものは、何時も面白く拜見して居ます』と、三又漁郎は微笑まれた。『二六で活動して居ますね、何時も元氣ですなア』と、近松君は云つた。『この通りは、東中野の銀座通

りと云ふのですが、ハイカラな店構へでせう。』と、一緒に歩きながら、近松君はいろいろと話してくれた。

そこには『西洋煙草あり』とした看板も出て居れば、ハイカラな雜貨店や、文房具店などの間に、カフェーやレストランが、一軒も二軒もある。『場末だと云つて、馬鹿には出来ませんね』と私が感心したやうに云ふと、『何處でも土地の發展して行く経路には、その裏面に、女の潜勢力を閑却することが出来ぬやうに、郊外住宅地の發展も、先づ女からのやうですね』と、近松君は云ふ。阿佐ヶ谷、高圓寺あたりに、過ぐる年の地震前から住宅地を物色して居たが、其の頃は田や畑であつた武藏野に、今日では怪しい賣春窟が、四軒も出来て居ると云ふ。『安西洋料理屋と小料理屋とは、郊外住宅地でも、附物になつて賑やかな場面を見せて居るのです』と、近松君は私の参考になるやうな事實を、いろいろと説明してくれた。タ、キの土間に粗末な卓子二三、ユニオンビールや三越呉服店のポスターを掲げて、金線サイダーを一ダースばかり列べてある。卓上はザラザラと塵埃だらけで、ソースや辛子や食鹽などの薬味器も、名ばかりに置いてあると云つたやうなお粗末至極な體裁が、郊外地に於けるカフェーの現状である。その土間に隣しては、三疊か四疊半位の疊敷があつて、そこにも餉臺が一つ二つ置いてあつたり、或は

二階へ通ずる細くて狭い階段があるなど、萬事が斯うした構へである。そんな變態な安ッぽい西洋料理は、レストランでもなく、カフェーでも無いが、それでも硝子戸には麗々と、カフェー中野軒など金文字で記して、行人の眼を聳だしめる。構へは狭く貧弱で、何となく穢ならしくても、出て来るウェーターは、七三の耳隠しか何かに結つて、紅い襟に白粉をベタくと、色も香もある年齢とある。『オムレツに御飯！』と言へば、『お酒はいかゞ？』などと問ひ、土間の椅子に腰かければ、『お二階へお上んなさいな……』と、誘惑的の眼色を見せるのも、郊外カフェーの情景であらう。茨城や、千葉や、栃木や、割合に田舎出の純な娘が多いけれど、時には束ね髪に柘植の横櫛、海千山千らしい豪の者が居て、『旦那、トンカツ一つ、宜いでせう。私、久し振りに頂くわ……』など、レツテルだけの櫻正宗、二合瓶を林立させるやうな事も、決して珍らしい場面ではない。何うかすれば東京の町の中にも、斯うしたカフェーが時を得て居る今日、郊外の文化住宅地などに、變態カフェーが繁昌して居るのも、時代の一反映と見るべきである。

『わたし、銀座のライオンに居ましたわ、ホンの二月ばかりでしたけど……。銀座、ほんとに宜いわねえ』と、哀れなる女どもよ、世の中が斯う不景氣では、チップの貰ひも少いであら

うものを……。

九、世の光の影に

須田町界限へ行つて見ても、洋食店の露月を初め、萬世樓、メトロホールなど、數々のレストランやカフェーが、軒を並べて居る。

萬世樓には妖艶な娘が居て、浮かれ男達の視線を惹いたが、何處にも若い美しい女給が居て、今日までも情話を醸したやうである。中には『鬼料理』などと云つて、女給の寫眞版を入れたピラで、大に客を引いたものだが、この界限も飲食店街の觀がある。とり屋、牛屋、おでん屋などを軒並に見て、小川町の交叉點に行くと、天下堂の跡にカフェーが二軒、何れも美しい女給を置いて居る。地廻りの客を主として、學生さんやら勤人さんやら、色香の渦を巻いて居るのも、不景氣らしからぬ世相の一つである。此の界限から駿河臺下、神保町へかけては、今文、ときわ、池國などの牛屋が、美しい女中と共に、評判になつて居るが、カフェーも所々に在る。殊に神保町の電車通りを、三崎町の方へ行く左側には、郊外地をつくりの店があつて、二階の一室には支那學生が、よく喃々として居たものである。地震前までは、此の邊のカフェー

いとさへ云へば、必らず二階の一室に案内されて、小さい餉臺を囲みながら、トンカツ、えびフライの類を肴に、夏の白日にも酔ふことが出来たらしい。『御仕立物』などゝした家でも、田舎出の女が三五人居て、お仕立物などは少しもせず、常に男が出入したやうな土地柄とて、所謂カフェーの秘密など、敢て怪しむに足らなかつた。今日では怪し氣な小料理屋など、サーベルの力に依つて、残る隈なく掃蕩されたらしいが、それでも地震後期のドサクサまぎれに、異様な性慾歡樂機關が、市の内外の至る所に、巢を構へて居たと云ふ。濱町蠣殻町十二階下の昔から、世の光りの影に隠れて、刹那に笑ひ瞬間に酔ふ男女のシーンは、これを絶滅することが出来ぬのである。エプロンの胸白く、銘仙にメリンスの色彩美しい帯をして、赤毛糸の都腰巻をヒラつかせて居る足どりも、眞に痛ましい眺めである。鬚無しハイカラ髪鬢の亂れや、白粉垢冷たさうな襦袢には、不幸に運命づけられた『若い女の半生』が、マザンと浮いて見える。それでも『通ひ』で来る女達は、未だ仕合せの多い方で、『住込み』や『前借』の類になると、ルビーの指環一つのために、我から男の肌に近いに近づいて、遂には恐ろしい第二の性に、墮落してしまう女が多い。『須田町の兎料理に居ましたが、私、熱烈な戀をしてよ、三田の學生さん』と……。それからは男から男へ、たうとう玉の井新地の女にまで、發展してしまつたのよ』と、

何の悔も悲しみも無さ相に、平然として笑顔を見せた女のことを、何とは無しに思ひ起されたりした。明るい銀座の中央に、カフェーの標準的ウェイトレスとして、仕合せらしく微笑むで居る女達にも、色香の誘惑と墮落とがあるものを、變態カフェーの變態女給に、より以上の物語りが編まれることは、斷じて不可思議なことでは無い。

男女の間と云ふものは、身分や地位や職業や年齢を超越して、宿命的に相接近するのが本來の約束事なのか。

一〇、雷門と六區を

銀座から日本橋通の表東京にも、地震後は雨後の筍のやうに、カフェー、小料理屋などが殆ど軒並と云つても宜い程に、世人の食慾を咬つて居る。

中にも三越呉服店前には、カフェーコーザンと云ふが出来て、近藤利兵衛のコーザン葡萄酒宣傳機關としては、割合に心地宜いカフェーである。バラツクの平家建てであるが、ウェータ一十八人に男ボーイが九人も居て、フランス式の料理よりも、甘い葡萄酒の風味よりも、室内一帯のフレッシュな空氣が、如何にも文化的な氣持を起させた。それに十八人のウェイトレ

スは、歐洲航路の郵船に見る女給のやうな、ハイカラにして輕快な洋装をして、客に接して居る様が、他のカフェーでは、見られぬ特色と云つて宜い。七三やら耳隠しやらに、白襟で鼠ツぽい洋装をして居る感じは、如何にも近代女性の表現であるが、行儀が好過ぎて冗談口一つも云はぬのを、本意なく思ふ若人もあらう。魚河岸の移轉に依つて、丸花も昔日の面影はなく、白エプロンの男達が、卓子で客に接して居る今日、今更のやうに、世態の推移が感ぜられる。若し夫れ淺草方面へ浮かれ出ると、雷門や六區を中心に、飲食店が渦を卷いて居るが中に、依然としてチン屋バー、カフェーオリエント、よか樓などの舊店を初め、大小無数のカフェーに、若い女達が笑つて居る。銀座や日本橋とは異つて、淺草にはまた別様の淺草氣分が、濃厚に醗酵して居て、騒然たり雜然たり、或は混然たる中に、生活の交響樂を奏で、居るのが、何人の神經をも衝くであらう。そこには何時の間にか、『淺草の女』と云ふタイプが出来て、何となく自暴自棄したやうな、投げ遣りな、荒んだやうな表情が、一層、男の胸にひびく。十二階下の一廓は、十二階の倒滅と共に、今や完全に掃蕩されたけれど、カフェー女の一顰一笑には、十二階下の女を偲ばせるやうな、一種の氣分が流れて見える。彼のあわたししい雜音の中に、彼の不安らしい焦燥の中にも、人目を忍ぶやうな戀の囁きが、次から次へと

幾多の場面を、フィルムのやうに轉換して居る。一帶の空氣が淺薄であり、雜駁であり、低級であるが中にも、一派の哀趣が流れて居て、淺草ならではの感ぜられぬ人生味が、隨所に醗酵して居る事實も、淺草に見るカラーである。カフェーオリエントの若い女や、それに對抗して出て來たらしいカフェー聚樂の女達は、淺草カフェーの代表的女性として、大に重きをなして居るが、浮いた月日の取沙汰なども、折々は聞えて居る。小料理屋では『都』のお竹さんが、文士連や俳優仲間に、大きな噂話を流して居たが、カフェーの女としては、よか樓時代既に去つてオリエント時代、聚樂時代となつて、若い男を動かして居る。お文が何うの、お柳が何うの、お浪が何うのと、その一々に就て云ふ迄もなく、彼の女達には、各自に、祝福された色香の世界が、彼の女達の生活を、或は幸福に、或は不幸にして居るのである。

——と、カフェー十夜、こゝに終る。

食べものの行脚

東京の美味しい物屋を『食べて歩きましたか』とある。藝妓の入る堂々たる構へから、小料理の粹、會席、茶席の滋味、さてはおでん茶飯の大衆的から、天ぷら、そば、鰻、支那料理、壽

司、西洋料理と数えたゞけでも、とても一年や二年では食べ切れぬ。況んや牛がある、とりがある、水だきがある、上方風のすき焼がある、魚すきがあると来ては、食べ歩きも並大抵の努力では無い。そこで第一は山谷で名題の八百善も、震災後は築地に座敷を構へて、依然として八百善たることに異色は無いが、美味しいのは最初に出る味噌汁だけのことで、その他は一向に感服しなかつた。その昔、長井鳳仙に連れられて、濱町の小常磐で食べた風味や、今では築地の錦水に、上方風の調味鹽梅、頗る我が意を得たやうに思ふ。新橋の花月や松本樓は、御宴會の酒肴の數々、近頃は東京の酒も上等になつたし、料理も次第に上方化して、一段の味が出たやうである。その他に香雪軒だの新喜樂だのと云つても、美味しい物屋よりは美人のお酌を生命とする方で、反つて日本橋の春日や、麻布の興津庵や、高くても美味しい方に舌鼓打つが人情とある。性來の西洋料理きらひとて、帝國ホテルでも精養軒でも願下げにするが、支那料理の眞の味は、偕樂園やもみぢよりも、陶々亭や上海亭よりも、私は有樂町の山水樓を、東京第一と推賞したい。秋晴、梢風におごられて、美味い／＼の尻馬に乗る譯でなく、全く何とか蛙も美味かつたし、何とかのヒレや巢も無上に美味かつた。牛肉と云へば誰でも四谷の三河屋を一番に數えて、銀座の松喜、日比谷の幸樂、淺草のチン屋、米久、今半、ときわなど、云ふが、三河屋

は座敷が廣くて、女中達の取なしが好いといふだけ、別に肉やタレに特殊の美味さがあるといふので無い。近頃は銀座一丁目の寄席の隣に神戸肉をすき焼の菊水と云ふのが出来て、一部の客を呼で居るが、京橋の河合、淺草の松喜なども、忘れてはいけない。とりでは末廣の吸鍋を云々し、神樂坂の川鐵が何うの、葎町の玉秀が何うのと云ふが、鍋では淺草の金田が、何と云つても東京では、第一の美味さと云つて宜からう。數寄屋橋の曙、大根河岸の初音、日吉町のすゞめ、南鍋町の喜仙、烏森の末げん、古今亭、赤坂の鳴門と市内東西南北、とりやならぬは無きが中に、水だきと鯛茶で知られたは、銀座裏の筑紫、水茶屋、たよりなどが一流である。忘れて居たが淺草には、うし料理の大川と云ふがあつて、とりの料理化と共に、牛までが鍋から調理へと、一轉化を見せて來た。近頃は右の他に御手輕料理の小店に、馬鹿に出來ぬ家が多く、銀座の食通新道の岡田の椀にしても、四谷丸梅の焼物にしても、淺草は丸留の汁物にしても、大きな割烹店顔色無し三板前には、感嘆の他は無い。若し夫れおでんに至つては、芝の出島屋から、淺草廣小路に出る屋臺の都、四谷鹽町の屋臺廣島屋、銀座は尾張町横の大阪屋と、兎角に屋臺店の方が美味く、神樂坂の江戸源と云つた家や、芝口の榮屋などでは、おでんよりも小皿物に特色がある。近くは銀座仲道に日の丸と云ふ食堂が出來て、撞球小原の階下に、朝飯二

十三錢、晝と晩は三十五錢で、大に家庭本位の風味を見せて居るが、こゝでは鹽鮭や鹽鯖などを焼いて出す他、三錢の小皿物に、鐵火味噌、煮豆、漬物など、何處までも惣菜料理の加減が宜い。銀座の銀座食堂では、季節くりに依つて、鮎や松茸の美味しいのを食べさせるし、赤へうたんでも、大阪壽司の丸見屋でも澤正食堂でも、お膳の定食に和食黨を喜ばせて居る。壽司では與兵衛も一流だが、大阪料理の征服と共に、壽司までが大阪物の天下となり、銀座では三幸と丸見屋とが、大に大阪壽司のために氣を吐いて居る。握りでは新富壽司、帆掛け壽司、大黒壽司、金壽司と、何處へ行つても榮えて居るが、さてまぐろのころは同じでも米や炊き加減や、握り鹽梅、酢の利き工合など、一列一體に云ふことは出來ぬ。天ぷらと云へば、橋善の井を思ひ起すが、花長のお座敷も忘れられぬし、天金、仲清、茂ちくなど、第一流の味があり、近くは銀座の松屋裏に男自慢が薄揚げを初めて、大阪的の風味ながら、一部の人々に喜ばれて居る。鰻は山谷の重箱もよく、竹葉、大和田、松金、神田川、宮川、橋本、大黒屋から、柴又の川甚などには、田園の風趣が宜しい。そばでは連雀町のやぶ、永坂の更科、池の端の蓮玉など、名題になつて居り、それくゝの風味も、手前味噌以上のものはなからう。安い所では芝南佐久間町の玉川が、何でも御座れで繁昌して居り、上野のあげだし、品川の三徳は、遊興に縁があつ

て、誰にも思ひ出の種となつて居やう。この他、兩國のぼうずは鍋が美味しく、豊田屋は猪、鹿、狐、狸などで知られ、京橋の第一相互館の隣には、蛇や蛙を食べさせる店などあつて、食味の世界も悪食の方面にまで發展して居る。——と斯う展望的に片付けてしまつたのでは、何處が美味しい不味の批判でなく、一列一體の評判記になつてしまふが、近頃は三越、松屋、松坂屋にも、大きな食堂が出來たし、丸ビルの地下室には、花月や中央亭が陣取つて居て、正午前後の丸ビル氣分も、ズツと上の精養軒はサラリーマンも稍上級の連中で、大變な賑ひである。居酒屋氣分では銀座にも淺草にも、山の手にも、下町にも、場末にも、郊外にも、いろんな店が次第に出來たが、銀座の加六、末廣、灘屋、花柳などは、誰でも一度は洗禮を受けに行く所である。カフェーではライオンが、何と云つても一流であるが、美人で評判なのはタイガーで、オリエントと姉妹關係があるだけ、美人のカフェーと云へば、東京でも第一に銀座と淺草を物色することになつて居る。プランタン、キリン、クロネコ、ギンブラの他にも、オアシスだのヨーロッパだのと、市内全部を一々挙げれば、カフェーだけでも一篇の物語が出來やう。壽司を民衆化したのは、淺草の力にも因るが、その淺草の壽司清が、一日四五千圓の賣上げ珍しからずとは、よくも食べたものかなと驚くの他は無い。近頃は銀座までが、大衆の力に押されて

ヤマニ、ホマレ、須田町食堂、毛利と云ふ風に、お手輕に安價に、二三十錢で事足る店々が續出したは、注目して宜い現象である。ランチの五六十錢から七八十錢を、安いと思つた時代は過ぎて、銀座では竹葉までが、おでんを開始した世の中である。十錢のパンやそばで、お晝を過すの要はなく、二十錢のライスカレー、十錢のトンカツに十錢の飯でも、銀座で食へる世の中である。銀座にはとりを本位の君萬歳があり、二三人で一座敷を占領しての酒食に宜いが、ホントの美味しい物屋は、さうザラに有るもので無い。飲むにも食ふにも何かと云へば、『大阪が懐しい』とあり、近頃は東京の酒も灘物が多くなつて、二十年前十年前よりは、何んなに向上したか知れぬが、それでも同じ白鷹にせよ、向ふで飲むのとはコクが違ひ、サワリが違ふ。況んや牛肉に至つては、京阪神戸が美味くて、然も東京の二分の一と來ては、上方が戀しくなるのも無理は無い。赤坂の三吉野ぐらゐが、江戸前の庖丁を自慢にして、多くは上方料理、長崎料理といふ風に、關西化して來たのも、人の味覺が贅六式に、墮落したのだとは斷定出來ない。これを要するに私だけの體驗から云へば、天ぶらは男自慢の金ぶら、とりは金田、牛は河合、そばは更科、壽司は帆かけ、支那は山水樓、おでんは出島屋、お手輕料理は日の丸と富可川、割烹は錦水、鰻は松金と云ふことになる。然も時に依り場合に依り、季候に依り、懐中の

工合に依て、必ずしも斯うと限つた譯で無いが、水茶屋の鯛茶などは、夏もよく冬もよく、酒後も二日酔の朝など、甚だ妙である。近頃は東京の酒も黒松の白鷹、鳳紋、菊正、櫻正、大關、白鶴、富久娘と云ふ風に、灘物の上等が入込だが、その酒をまた呼物にして、客を引いて居る程に、東京で飲む酒には、吟味を忘れてはいけないのである。——以上、東京の食べ物屋を一わたり、大急行で歩いて見たが、この他に笹の雪、島村、瓢亭、入金、駒形のだでう、甲州屋、花むらなどを忘れてはならない。上方が美味くて、東京の不味い時代は、斯うして次第に東京をも、上方化して來て居ることを喜ぶ。

繩暖簾四方山



繩暖簾を懸けて居る店があつても、それは次第に風流化して、ほんとの繩暖簾と云つた自由な氣分は、次第に稀薄になつて來た。従つて同じ居酒屋氣分、一ぜん飯屋情調と云つても、多くはお手輕式の店で、勞働者階級のみを相手にして居るのではない。江戸川終點のためきへは、よく三浦觀樹將軍が出掛けて居たし、銀座の加六では、死んだ黒田清輝畫伯や、和田垣謙

三博士、國木田獨歩、根本吐芳などの姿を見た。東京市内何處へ行つても、山の手にも、下町にも、場末にも、郊外の町にも、この繩暖簾式の店が多くなつて、今日ではカフェーやバーと對立してゐる姿である。中には西洋料理、支那料理、日本料理、鳥料理と、何でも出して食味を本位とした店もあれば、餘り料理は出さずに、酒のみを提供してゐる店もある。我が繩暖簾も昭和二年の春になつて、大方は小料理屋式、お手軽料理屋式となり、手軽に、安價に、心安く、美味しい酒と小皿物を飲食させてゐる。



私は去年の春から、一月に二週間程、神戸や大阪へ行くやうになつたが、阪神は酒の灘に近くて、酒の味では何と云つても、日本一である。大阪の繩暖簾では、蛸安も悪くないが、南では千日前の法善寺横町に、おでん屋の小便たごがある。串にさした味噌煮のおでんで、おでん其の物は無上の美味ではないが、酒の美味しいことでは讃嘆に値した。大阪は何んな所へ行つても、酒が美味しいといふ先入見があつて安心して飲めると共に、決して宿醉することもなし、翌朝になつて頭が痛いといふやうなこともない。小便たごの如きは、昔小便桶の傍にあつたので、今でも其の名を稱へて居るが、店に立つた儘で飲む酒の味は、菊正でも櫻正でも鳳紋で

も、本場の生一本である。同じ名のついた酒でも、場所によつて斯うも違ふものかと、全く感心させられてしまふ。

『東京行きの酒は、甘口やさかいに……』

と、關西の人々は、『酒は何と云ふたかて、此方のもんや』と云ふ。



神戸は牛肉が美味くて、三つ輪でも紀譽亭でも、特別の風味であるが、居酒屋式では榮町三町目の横に、金時といふのがある。山海の珍味が十錢二十錢で、酒は富久娘か何かを出して居るが、安くて美味しいのを特色とし、おでん茶飯と云つても、晝は黒豆の飯、晩は茶飯と云ふ風に、氣を利かして居る。二人で一圓も出せば、酒が二本に飯、珍味三四皿と云ふ程度で、ホロリと酔つて満腹になる。神戸は海魚も安くて美味しく、春先きになると鯛や鱈も本場の味が良く、飯だこの如きは神姫電車の沿線で多量に取れるし、高砂町の竹輪や穴子と來ては關西一の美味である。神戸には其の他に楠公の横門前に、紀の松と云ふ鯛料理があつて、小鯛の生つき、小鯛すし、鯛のすき焼と云ふ風に、鯛も小鯛だけを調理して進める店がある。日本に料理屋多しと雖も、鯛一式の料理で、其の他には何も出さぬ店と云つては、此の紀の松だけである

が、神戸の人は何故か、餘り珍重せぬ様子に見えた。

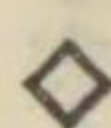
大阪でも神戸でも、小さい瀟洒な店構へをして、びつくりする程美味しい酒肴を出す家が多く、所謂繩暖簾式では、何と云つても一步を進めて居る。酒が甘口で淡泊して居て、コクが薄くて飲み安い上に、肴が美味くて安いことは、何と云つても大きな強味である。只だ東京の繩暖簾のやうに、一流の名士が入らぬので、何となく客種が第二義的であり、氣分といふものが冴えて居ない。上方では今日でも、繩暖簾なんかに入る者は、下等な人間だといふやうな、一種の見榮坊に囚はれて居るやうである。そこで中流階級以上になると、お茶屋へ行つたり、料理屋へ行つたりして、直ぐ藝妓といふことになる。若い勤人階級や、不如意らしい中年者や、筋肉労働者が主な客で、腰掛け式の飲食と云へば、カフェーやレストランが、社交的の舞臺に使はれて居る。美味しい物屋は澤山あつても、一部の需要に限られて居て、東京ほど各階級を網羅して居ないのは、何處までも上方風である。

東京は大正十二年の震災以來、一層、小料理屋やバーやカフェーが殖えて、居酒屋や繩暖簾の

氣分が、愈々大衆的に進出して來た。淺草公園の三角バーでも、丸留にしても、美味しい物屋で鳴らして居るし、神樂坂の江戸源にしても、依然として榮えて居る。この江戸源は、今澤田正二郎の新國劇に、音曲部を宰領してゐる音羽幸太郎が、十年前に妻女と共に開いた店で、今は代が變つてゐるけれど、山の手では有名な小料理店である。淺草では有名な美人の娘お竹さんのゐた都や、其の前の花屋など、腰掛け式の美味しい物屋で、鍋物に特色を見せてゐる。このお竹さんは、今はもう嫁して居るが、死んだ坂本紅蓮洞を始め、澤田とか花柳とか諸口とか云つた役者や、淺草に出入する文士達にも、大いに注目された美人で、このお竹さんのために繁昌した店と云つても宜かつた。私は花屋に腰掛けて、生れて始めて河豚鍋を食べたが、その美味かつたことは、三年後の今日も忘れられない。

櫻橋には山岩と云つて、二十前後の美しい娘で知られた小皿物屋があるし、日本橋では木原店に茶飯の赤行燈、三越近くの丸花、式部小路のたこ安など、名題の繩暖簾であり、美味しい物屋である。私は今から二十一年前の秋、今は東京日目の編輯局長になつて居る松内冷洋に連れられて、初めてこの丸花で飲食し、べつたら漬を食べて、その美味しいことに讚嘆した思ひ出が

ある。丸善前の横町には、日本酒會と銘打つた灘屋があつて、灘の木一本二三種を飲ませて居たが、私はここで一森式座椅子の發明者で、志州鳥羽に遊園地を經營してゐた一森彦楠翁と、一二度廻り逢つたことがある。今は銀座の中通りにも、灘屋と云ふのが出来てゐるが、ほんとの灘物を好む酒徒は、よくこの日本酒會に出かけたものである。蟹や、うにや、このわたや、ほんの一寸した物を肴にして、上爛をチビくやる氣持は、斯うした純然たる繩暖簾でなくては、味はへぬ酒徒の慶福と云つて宜からう。



芝愛宕下の赤煉瓦には、出島屋といふおでん屋があるし、芝口には小料理の榮屋とあら七とが、隣り合つて榮えて居る。あら七は酒が本位で、一頃は灘の正宗、鳳紋、白鷹、白鶴、澤の鶴と、七八種の樽を並べて、酒道場の看板を掲げて居たのが面白い。榮屋はおでん屋から小料理に進んだが、路地の中の暗い狭い店の中に、昔はお作といふ可愛い娘が人氣を呼び、今はお加代と云ふ十八九が色香の盛りを見せてゐる。新橋驛前の小路の中には、江戸銀、天虎支店を初め、一寸した店が四五軒あるが、江戸銀は主人夫妻が江戸ツ子風で、言葉もぞんざいに横柄で、わざと氣を負つて居る風を見せ、

『俺の店の物は何でも美味しい』

を鼻の先きにブラ下げて居るのが厭味である。酒は美味いし、鍋物も好く、材料も新らしくて宜いが、煮た物は甘きに失して居るし、人を食つた態度が不快である。今その名を逸したが、同じ驛前の小路の中に、美しい女將の居る瀟洒な構への酒屋があつた。



銀座に入つて見ると、鰻の竹葉までが『高等繩暖簾』と看板を出して、硝子扉の上に細い繩暖簾をかけ、おでんで一杯を始めた程の世の中となつた。加六、おきな、花柳、末廣、灘屋、都、丸美、吉田川など、云ふ腰掛式の酒本位、おでん本位、小料理本位の店々が、銀座の東西に散在して居ることは、何と云つても盛觀である。吉田川は板新道にあつて、小さい構へであるが、どぜう屋を標標して飲ませるし、都は花月の通りに狭い店でも、女主人は左り褌を取つてゐた人で、美しい妓がよく食べに行つてゐる。丸美は大關か何かを飲ませる酒本位の店で、看板から品書きまで、孰れも河東碧梧桐の書であるところに、主人の氣品を見せて居るらしい。おきな、黒松の白鷹を賣物にして居る腰掛けであるし、花柳は大阪者の老婦人が老後の營みらしく、共に尾張町の木村屋パンの界隈を、一步路地に入つた所にある。仲通りの牛肉三竹の隣

りには、菊正の灘屋があり、之れも瀟洒な構へである。

銀座界限は花月に松本、牛肉では松喜、早川、菊水、三竹、みこ柴があり、とりでは君萬歳、水茶屋、たより、筑紫、水月、すゞめ、京屋、喜仙などがあり、他にも支那料理だの、カッフェーだのと、なか／＼澤山な飲食店である。その中で眞の文化的繩暖簾としては、昔からの加六と末廣、新しく出来た男自慢、日の丸、澤正食堂、ヤマニバーを數へて宜からう。

ヤマニは三原橋の近くで、淺草式の一五錢から十錢の安價で、銀座の所在としては不思議な程に、大衆的の客を呼んで居るが、それは銀座の珍現象として、注目して宜いことである。タイガーの裏通にも、須田町食堂が出来たり、支那料理屋が出来たりして、安價で客を呼んで居るが、何も彼も第一義的といふことを、自慢として居た銀座に、數々の安い物屋や、おでん屋が多く出来たことは、震災後の銀座に見る特殊相として、見逃してはならぬことである。そこにも、急な浮世の移り變りが見えるではないか。

澤正食堂と云ふのは、天賞堂前の西北角の階上に出来た關西料理で、銀座食堂の定食一圓五

十錢に對して、一圓で賣出した新店である。菊正宗は本場の灘から直接取寄せて提供してゐるが、爛の加減が非常に好く、この界限での美酒佳肴で、文化的繩暖簾の雄なるものである。神戸の材木屋さんで木村芳太郎といふ人が、大の澤田正二郎最良から、澤正食堂と命名したので、神戸のカッフェー五九郎と同巧異曲であるのが面白い。日の丸は元數寄屋町の小原撞球場の階下にあるが、朝は二十六錢、晝と晩は三十五六錢の定食で、家庭風味の和食を出して居る。鹽鮭や鹽鯖もあれば、ちよいとした小皿物や、味噌汁、豆腐汁なども出来て、腰掛け式の落付いた感じが宜い。界限の勤人やら商人やら、小原撞球場の女ボーイさんやら、酒を本位とせず、手軽に安く美味しく食はせることを本位としてゐるのは、近頃での思ひつきであり、これ亦新時代の繩暖簾と云つて宜い家である。

尾張町一丁目の末廣は、銀座二丁目の加六と共に、銀座で最も古い居酒屋であり、繩暖簾であるが、加六の菊正に對して、末廣が櫻正宗で終始してゐるのは面白い對照を見せてゐる。震災後は支那料理も始めて居たが、湯豆腐、お刺身などの手軽さで、飲ませることが本位である。主人の常さんは聲色の名人で、竹本節も上手であるが、四五脚のテーブルと六疊の小座敷と、

銀座裏でありながら、何處かに下町情調があつて、折々流しの新内や浪花節や、安來節が入つて來るのも風情多い夜景である。報知の佐瀬、朝日の能美、鹿目など、云ふ故人になつた酒徒や、ニコ／＼山人の松永老など、何時もやつて來ては、夜遅くまでへゞれたものである。しる粉屋の若松や、汁物の美味い岡田に隣り合つて居るが、末廣の櫻正宗は界限の記者先生達と、最も馴染が深いやうである。美人の女給を有するカフェーが出來ても、時世が移つても、繩暖簾の古調は懐しいものである。

若し夫れ加六に至つては、先代の老主人が酒狂で、海に投じて死んだと云はれてから、代も變つたらしいが、今でも菊正の一本調子で客を呼んでゐるらしい。昔は見知らぬ男や、氣に入らぬ男が入つて來ると、

『賣り切れました』

と云つて、客にしなかつたもので、何時でも『酒賣切れ申候』の大きなビラを掲げて居た。銀座にカフェーの無い時代、僅かに臺灣喫茶店のみがあつた時代は、こゝが唯一の手軽な社交場で、黒田清輝畫伯だの、和田垣謙三博士だの、國本田獨歩だの、朝日の弓削田秋江だの、萬朝の

高畑だのと、毎夜のやうに落合つたものである。粗末な長いテーブルに、腰掛は一斗樽で、うに、このわた、豆、さし身位を肴に、チビ／＼遣つた思ひ出も昨日のやうである。

日露戦役の當時、國本田獨歩は此の加六を材料として、『號外』と題する短篇を書いたが、その中には、黒田、和田垣、その他の名士が出て、酔つぱらひながら氣焔をあげて居る様を、眼に見るやうに描いてあつた。

松屋呉服店裏の男自慢は、長州の銘酒男自慢を一本二十五錢で飲ませて居たが、今は灘物の白雪で金ぶらや大阪式の小料理も始めた繩暖簾である。三四坪の狭い構へを巧みに按配して、若い兄と妹とが主となり客を呼んでゐるが、汁物や季節物にも特殊の風味を見せて居る。三勝はなくなつたし、カフェーロシヤの辻衛氏が營んでゐた青柳も閉店してしまつたが、銀座でのほんとの繩暖簾は、男自慢や丸美などであらう。天ぶらの天金や茂ちくや、惣菜料理の赤へうたんや、札幌屋など云ふ店もあつて、銀座の表にも裏にも、手輕と安價を主とした小料理屋、バー、ホールが次第に多きを加へて來た。而も相當知名の人々が客となり、相當に繁昌してゐるのは、今更のやうに、『東京だなア』と驚かされる。近頃、赤阪の新町には、曲水の云ふ珍味料

理が出来て、諸國の名物を調理して居るが、斯うした食味の方面でも、東京の味覺生活は、破天荒に進展したことを思はざるを得ない。

品川の三徳、千束町の小松屋などは、蛤鍋を主とした店で、孰れも遊廓へ往還りの客を相手として、榮えて來たが、こゝにも一種の繩暖簾氣分が流れて居る。在來の大きな料理屋は、宴會の場席となり、藝妓をあげて騒ぐところとなり、飲食を主として居ながら、食味の方で特色がなくなり、飯の炊き方などに於ても、不注意なところが多くなつたのは、何といふ非常規な現象であらう。

東京も次第に美味しい酒が多くなり、灘物も容易に口に入るやうになつたが、美味しい料理と云へば八百善、花月、松本楼、伊豫紋、末よし、龜清、柳光亭、錦水へ行かずとも、反つて小さい構への家で、手軽に心安く食べられる世の中となつた。ブルとかプロとか云ふ意味でなしに、繩暖簾全盛の時代になつたのは、一面に於て經濟状態を説明してゐると共に、他面に於ては生活の簡易化を語るものではないか。そして斯うなつて來た經路の上に、東京世相の變遷を如實に知ることが出来るではないか。

私は最近に上野廣小路の江戸ツ子で、友人樋口罔象と共に食べ、豆腐の揚出しでも昔を偲んだことがある。日比谷の山勘横町では岩崎善右衛門君のおでん屋が榮えて居たが、今はガード下に轉じて、相變らずおでん茶飯で、富可川の本店と共に、多くの客を呼んでゐる。

東京市内何處へ行つても、一圓の金で飲食が出來て、而も美味しく舌鼓打つことが出来るのは、私達の大きな喜びである。高いから美味しいのでなくて、安くて美味しく心安くて、何の心淋しさを感じることもなく、大手をふつて入り得る店が次第に多くなつたことは、お互ひの喜びである。今や居酒屋も繩暖簾も、昔の古い殻から脱けて出て、廣く世の中へ進出して來たが、此の後更にどんな風に變化して行くことか。思へば私の東京生活も、二十餘年の長きに亘つて、よくも飲んで來たことを思ひ、よくも食べて來たことを思ふ。私は更に『東京のカフェー』といふことに就いて、過ぎし日の變遷を語る機會を待たう。

酒興の三十年

いろんな酒を飲んで来た、いろんな女を眺めて来た、いろんな遊びにほうけて来た。三十年の月日と云つても、長いやうであり、短いやうでもある。大阪に、東京に、旅に、私は此の三十年を、汗し、泣き、笑ひ、苦しみ、悩み、楽しみ、浮かれて来た。吾々の生活は、浄土でもあり、地獄でもあり、樂園でもあり、苦の世界でもあつた。その中から、楽しみだけを、歡びだけを、面白かつた事だけを、次々に想ひ起さうと云ふのである。題して『酒興の三十年』と云ふのも、これ一面に於ては、私の生活に於ける實感記録である。想ひ出の酒は甘いこともあり、時には痛々しいまでに、この胸を抉ることがあるかも知れない。——私は何も彼もサラけ出して、若かりし私の姿を懐しまふと思ふ。

×

酒を飲み初めたのは、何時の頃であつたらうと、珍しくそんな思念が浮かんだ。私は二十一歳の青年で、大阪北區樽屋町にあつた村井兄弟商會の分工場で、ラックと云ふ捲煙製造の工場に働いて居た。土曜日の夕暮になると、工場長以下七八人の者が、工場の一隅に集まつて、小酒盛するのが例になつて居た。牛肉鍋か何かで、皆で二三升の酒を飲み盡しては、太平樂を並べて居たものだった。

工場長の進房次郎と云ふ人は、酒の中に生れたやうな男であつた。飲まずに居ると無口で、終日黙々として居たが、土曜日の晩だけは、私達と一緒に盛に氣焔を上げて居た。それ迄は少しも酒を知らず、女もロクに知らなかつた私に、酒の味を教えてくれたのも、暗い方面の女を知らせてくれたのも、その村井工場時代であつた。美味しい大阪の酒、それを何うして、忘れることが出来やう。

×

私の郷里は美作の山中で、本家は酒屋として、冬になると新酒の笹が立つて居た。酒造りの若い男達が、何處からともなく入込んで来ては、今から思ふと田舎の地酒であつたにせよ、酒の香が快かつた。祖父も好きな方ではなく、父は一合も飲むと赤くなつて、よく三勝半七酒屋の段を唸つて居た。

父祖の血統を受けて、私も酒好きと云ふ方では無かつた。村井の工場で酒味を覺えたと云つても、自ら進んで好んで、盃を手にしやうとは思はなかつた。三十年後の今日になつても、家では晩酌をしたことがなく、友達と一緒に、カフェーか料理屋にでも行かなくては、酒盃を手にする心持にはなれない。それほど好酒家ではないけれど、飲めば五六合から一升は、まだ平

氣な方であらう。酒味そのものにაცがれるよりも、酒を飲む場合の環境の空氣や色彩やに、強く興味づけられて居たことを感せずには居られぬ。

×

二十三の夏から新聞記者になつて、出入橋にあつた大阪新報に入つたが、まだ私は酒の方に縁遠かつた。二十六の春、大阪朝日に入社してから、初めて「飲む機會」が多くなつた。日露戰役の前後、私は大阪の如何なる方面にも出入して、次第に酒味に徹すると共に、女の方にも深入して行つたのである。

その頃、宴會と云へば、堺卯の大廣間に限られて居た。堂島では魚岩の料理と酒に、舌つゞみを打つたものである。何處へ行つても美味しい酒が飲まれ、美味しい料理が食べられる大阪の生活は、此の上もなく幸福であつた。今から思ふと、決して上酒ではないけれども、澤の鶴を賣出した頃で、櫻正宗や菊正宗も、既に蔑り難い勢力を見せて居た。大阪に居ると何處で何んな酒を飲んでも、すべてが美味くて、心地好く酔ふことが出來た。その大阪を去つて、久し振りに東京生活に移つたのは、二十九歳の秋であつた。

×

大阪から東京へ——これを一種の酒行脚とすれば、私は酒の王國から、名もない一地方に流轉したやうなものであつた。初めて飲んだ烏森の湖月の酒、紅葉館の酒、花月の酒、何處も水ツぽかつたり、頭にツーンと來たりして、とても盃を手にするには出來なかつた。『東京、東京と云つても、酒は大阪に頭が上らない』と、私は悪酒の情なさ大阪を戀しがつたものであつた。

其の頃から思ふと、今日では東京の酒も上等になつて、菊正、白鷹、富久娘、白つる、大關など、次々に私達の前に現れて來た。あの囃詰の月桂冠には、何としても好意を持つことが出來ぬ私も、近頃では何んなおでん屋へ行つても、昔のやうな悪酒でないのが私には嬉しかつた。『東京の酒も近頃は飲めるやうになつた』と、さう云つては方々へ行つて、酒興の中に耽溺する日が、十年前までは、昨日から今日へ、今日から明日へとつゞいた。

×

銀座一丁目の路次の中に、正宗加六の居酒屋が、菊正宗で、客を呼んで居た。そこには死んだ黒田清輝伯や、和田垣謙三博士や、國木田獨歩や、藝術家も文士も新聞記者もよく出入して居た。國民新聞に居た頃、酒豪で知られを吉野左衛門に連られて、初めて加六の菊正を飲んで、『これなら東京も嬉しいな』と、私は美味しい菊正に舌鼓を打つた。

東京朝日に入社してからは、何かと云ふと加六へ出かけて、よく盃を重ねて居た。弓削田秋江、根本吐芳などと一緒に行つては、そこで半夜を過ごしたこともあつた。主人の加六が酒好きで、知らぬ人は相手にせず、何時でも『酒賣切申候』としたビラを貼つて居たのも、私には面白かつた。カフェーもバーも、今日のやうに盛大ではなく、腰かけの手軽さで、菊正宗のやうな美味しい酒を飲ませてくれる家と云つては、加六の他にない時代であつた。灘屋が出来たのは、ズツと後のことであらう。

×

今日では紅葉館でも花月でも、上酒を出すやうになつたが、まだとても美味しいと云ふとは出来ぬ。上方と東京では人々の嗜好も違ふであらうが、大阪を第二の故郷として懐かしむ私にとつては、酒と云へば何うしても大阪に限るやうな心持がして居る。法學士辯護士の木村靜四君に案内されて、千日前の小便たんで、立飲みした時のことが、私には忘れられない。あの串刺のおでんには、共鳴することが出来なかつたけれど、そこで飲んだ酒の味は、何うしても忘れることが出来ない。何と云ふ酒であつたか、その名を忘れてしまつたが、大學生時代から酒豪で知られた木村君は、大阪でも此處の酒は美味しいと云つて、コップの數を重ねた。何處へ行つ

ても上酒の飲める大阪にも、美味しい不味の差別があることを、私はツクツク感ぜざるを得なかつた。今日でも酒と云へば、東京は遂に大阪の敵となることは出来まい。

×

レットルばかりの櫻正宗——と、私は私の作品の中に、二度も三度も書いた。それほど何處へ行つても、櫻正宗は昔から普及して居たが、その醸詰は本物か何うか、何處で飲んでも水ツぽかつた。鳳紋と云ひ、白鹿と云ひ、いろんな名があつても、名で賣る酒もあり、風味で賣る酒もあらう。酒が酒を賣るやうな、生一本の風味は、菊正宗だけであらうと、私は昔から菊に傾倒して居た。

加賀の山中や山代の温泉宿では、白鹿を飲ませて居た。山代のあら屋でも、山中の吉野屋別館でも、私は一人旅のつれづれを、白鹿に依つて慰められた。この三月上旬、山形縣の湯野濱や温海の温泉へ行つた時には、土地で出来ると云ふ響と云ふ酒を飲まされた。何處かに地酒の風味があつて、そこが懐しまれたけれど、とても深醉することは出来なかつた。——旅で飲んだ酒の思ひ出には、そのシーンが私を樂ませてくれた。

×

身體は二十貫に肥満して居るし、眼も悪いし、近頃は腎臓も良くないので、飲まぬ方が宜いのであるが、何れも盃を断つてしまふことが出来ない。松屋の裏に出来た防長屋では、長州で出来た男自慢を一本二十五銭で飲まして居るが、安い割合に甘口で美味く、折々出掛けて二三本を倒して居る。いろんな酒が宣傳的に廣められ、中には随分、場違ひ物も巾を利かして居るが、美味いとかな味いとか云ふことは、一人の實感であると共に、多數の共鳴がなくてはならぬ。冷酒の儘で美味い酒もあれば、熱カンにしなくては、美味くない酒もある。伊勢の山田に行つた時、赤福餅の濱田種三君が、白鷹の一升罎を汽車の中に入れてくれたが、それを冷酒で飲んだ時、私は美味いと感心したことがある。名古屋に居た酒豪の桐生悠々も、『白鷹は飲めるよ』と云つて、私の一升罎を傾けたこともあつた。

×

酒興三十年—以上はホンの發端に過ぎない。同じ酒味にしても、其の時々の心持に依つて、環境に依つて、氣候に依つて、喜怒哀樂に依つて、必ずしも同じ感銘ではない。旅の宿屋などで傾ける盃は、たとへ悪酒であつても、忍んで舌鼓を打つことが出来た。大阪の酒、東京の酒、温泉の酒、山の酒、海の酒—私は今日まで、どんなに身境を轉々させながら、いろ／＼の酒に

當面したことであらう。盃の中に見た人生の相、愛慾の心と云ふものも、私に深い人間味を教えてくれた。貧しい生活の中にあつても、酒を飲み得ることを以て、無上の慰樂として居る人々もある。私は何ろしても、酒に淫することは出来ぬけれども、酒を此の世の伴侶として、生活を生活して行き得ることを以て、生き甲斐ある喜悅とする一人である。

—大正十五、三、一五—

金に無縁の記

×

金が仇と云ひ、金に恨は數々御座ると云ひ、人類の喜劇も悲劇も、大半は色戀であり、残りの大半は『金』である。有餘る金のために、とんでも無い喜劇が出来ると、金が無いために悲しい哀話を醸すこともある。一にも二にも金であるが、その金の世の中を謳歌するので無く、『金がかたき』と一步を進めたところは、時代の急所に、メスを軽く當た形である。

×

この前、婦人公論社の主催で、『金』に關する雑話漫談會をした時にも、私は大にシャべつた

ものである。金は人生で最も大切な物の一つであるのだが、然し其の金も時と所に依つては、様々の作用をして見せる。濡れ手で粟と云ひ、あぶく銭と云ひ、宵越の金、臍くり金、虎の子、葬ひ金、見舞金、慰問金、旅費、小づかひ、交際費、曰く何、曰く何と際限が無い。利益金の分配などには、一生、縁の無い萬年筆労働者の果敢さも面白からう。

×

金が何だ——と反感を抱いて見ても、やはり金は有つた方が好い。人生の事は何でも彼でも、金で解決が出来るやうに、一般人の中には信じもし、且つ實行もして居るが、金以外に貴いものは無論ある。そこで『金が何だい』と云つて遣りたくなるが、人生にとつては、有つて有甲斐のある金なのである。金に征服されては、人間も愚なものであるが、征服した金なら、何萬何十萬何百萬も苦しくはない。無いよりは、無論有つた方が宜しい。

×

五圓の復興債券で、千五百圓を夢見たり、十圓の貯蓄債券で三千圓を空想して見るのも、一様に淺間しいとは云へない。芝浦の革財布ではないが、大金を拾つた夢を見るのも、人生の眞實な感情の表れである。生きたがために働くのであつて、金その物に窮極の目的は無いが、ど

う云つても『金』を無縁にしては、世の中もなく生活も無い。有爲有能の士が、早死するもの貧のためであり、家庭争議の大半も、金に直接間接の原因がある。

×

心中の原因も、大方は金に機縁があるし、自殺の大半も、金に恨みの數々が、消極的に表現された一つである。金のために罰せられる者、金のために罪を犯す者、金のために自らを亡ぼす者、金のために他を傷つける者、新聞の日常記録は、大方、金の葛藤であり、金の紛擾であり、金への慾望である。私の舊著に『戀と名と金と』の一卷があるが、人生は要するに戀であり、名であり、そして金であることに、反對者は手をあげろ——。

×

とは云ふものゝ、私にしても、人生の窮極は金であると肯定して、一にも二にも金を禮拜し謳歌して居るのでは無い。反つて金錢萬能主義の世態に對して、激しい反感をさへ抱いて居る一人である。私達が此の世に生存して居る意義が、若し『金』の一字に歸着するなら、また何か云はんや。私達は金錢の他に、物質の他に、より貴かるべき目標の下に、動きもし、生きもして居る筈である。金など何うでも宜いと思ふ人は、手をあげろ——。

×
 金など何うでも宜く、何うでも宜くないのが、世の中の面白いところである。戀人と密會するにも、好きな人と旅するにも、先立つものは金であることに、中年者はヒシ／＼と實感づけられる。『何時でも懷中に四五十圓を、欠かさず持って居ると、東京の途上往來は、更に一層面白いのだが……』と、昨日も電車の中で逢つた友達が、つく／＼と述懐してゐた。金を宵越に使はうとする者には、便利にして有効な『金』であることを思ふ。

×
 私は年少の頃、故郷の村役場に勤めて居て、六百何圓かの國税を、三里山奥の郡役所に持って遣らされたことがあつた。生れて初めて大金を懷中にして、少しは責任を感じたが、それほど『大金である』と云ふ感じは無かつた。十圓以上の金には、更に用の無かつた時代の人として、五六百圓の金を持たせられても、それほど意識には、何の反應も無かつたのであらう。無慾の前には、紙幣も一つの物質であつて、慾望とは全然没交渉である。

×
 肥つて二十餘貫もあり、新聞界に衣食すること二十八年、何んな馬鹿でも少しは出來たらう

と、よく人々に誤解される。意氣地無しの中斐性なしとて、まだ電話も無く、家も無く、その日暮しの貧しさであるが、世人はさう思つてくれない。『君が歩いて居る姿を見ると、何時でも四五十圓の小遣錢は、持って居るやうに見えるぜ』と、私の生活を知らぬ友達などは、さう信じて居るやうである。貧乏人と思はれるよりは、マシかも知れない。

×
 人の眞價は、棺に蓋して定まると云ふが、貧乏人に見えた男が、死後に財産を遺して居たと知つては、その用意のほどに服するが、然し何となく欺かれた氣持がしやう。その反對に、少しは有るだらうと思はれた者が、死後に遺したものは、借金ばかりであつたと判つたら、人々は其の不要意さに、落膽をさへ感ずるかも知れない。それでも『彼奴も貧乏だつたのか』と、初めて眞相に觸れたやうな、一種の心地好さをも感ずるであらう。

×
 一生涯を齷齪として、少しは無理な事をしたり、際どい危道を歩いて、金を儲けやうと血眼になつて居る人種がある。同時に金錢慾の方は割合に淡く、何事も運とあきらめて、貧しさの中にも、安住の天地を見つけて居る人種もある。そして双方から『彼奴は馬鹿だよ』と云ひ

合つて居るが、こゝにも金に對する人間性の両面が、如實に現れて居る。要するに人生は、金に征服されるか、金を征服するかの一途であることを考へさせられる。

×

その人の賢愚に依つて、同じ金を費ふ場合にも、活かして使ふ人と、殺して使ふ人との二種がある。百圓を投じて、それほど有効で無い場合もあるし、三十圓が非常に役立つ場合もある。人のけじめが判らなくて、『俺は金持だぞ』とか、『私には金があるぞ』とか云つても、相手から馬鹿にされるが落であらう。相當の有識有産階級でありながら、儲ける事のみを知つて、活きた金を使ふ方法を知らぬ馬鹿が、そんぢよそこらに非常に多い。

×

その昔、或る親族に、困つて居るから少し貸してくれと云つたら、快く用立てくれたが、『金は他人だから……』と云つて、公證役場にまで連れて行かれ、借用證書を書かせられた上に、多額の利子を天引されたことがあつた。その金持の親族は、私の父が死だ時、一圓の香典を持て来てくれて、三四日も泊つて行つたが、人並以上によく飯を食べた。一圓の香典に、飯を五六度も食べて行けば、結局その親族は、儲けて歸つた勘定なのである。

×

大阪に居た頃は、よく高利の金を借りて、遊んだものだつた。百圓の證書面に、受取る金は七十八圓五十錢、それを十三圓づゝ十ヶ月に辨償した。さう迄して遊びにふけた青年時代の愚かしさも、今となつては懐かしい思ひ出の一つである。金が無い時に相談に行つても、金持は更に同情してくれぬが、金の無い連中は、他人事で無いやうに、心配を共にしてくれる。世の中の事といふものは、萬事がこんな風に出來て居るから面白いと思ふ。

×

女の貞操が金で購へる——何も今に初つた話で無いが、藝妓でも女給でも、要するに金の前には、弱い人間であることに、何の不思議も無い世である。金のために一生を過まる男が、毎日のやうに、新聞種になつて居る。一面には女性も金のためには、征服されもし、虐げられもして居る。金がかたきの世の中と云ふことは、極めて平凡な事實であつても、何時も耳新らしく、強い實感となつて、私達の生活心理を衝つてはいないか——。

×

北海道の若い友達は、勸業債券を三百枚も買つて、大きな一覽表を作り、抽籤月の當り番號

を見ることに依つて、他には何の仕事もせず、ノラクラと遊び暮して居た。そして百圓や十圓は當籤したが、二千圓や三千圓は駄目だ、と云つて、長大息して居た。若し三千圓當つたら、千圓を私にくれると云つて居たが、七年後の今日になつても、何の消息も無い所から見ると、彼も當り籤の夢に疲れて、今度は他方面に金儲けの夢を描いて居ることだらう。

×

好い人であつた私の父も、『市郎よ、死ぬる迄にはな、二三萬圓儲けて、お前に遺してやるぞ』と、口癖のやうに云つて居たが、遂に一圓も金を残さずに逝つてしまつた。私の家も私が五六歳の頃までは、藏が三四戸前もあつて、米や麥や大豆が、ウンと入つて居たし、私には女中が二人も従いて居たが、十一になつた私は、もう大阪で丁稚奉公して、他人の飯を食はねばならなかつた。幼年時代の幸福は、錦繪を見るよりも果敢なかつた。

×

私の長男は今、帝大の經濟科に學んで居る。文學者になるよりも、新聞記者になるよりも、彼が經濟學に志したことに、愚なる父は一種の慰めを感じて居る。豊かな家に生れても、物心づいた頃から今日まで、貧しさに飽き／＼して居る私は、せめて我が子よ、少しは金に縁ある學問

でもして、貧しい父の老後を慰めてくれと、この心をも、親馬鹿チャンリンと嘲けられては、私たるもの、眞に立つ瀬がありません。

×

金が何だ、金が第一の人生でも無く、金が本位の世の中でも無い。私達の生活心境には、金を超越した貴いものが、數多く實在して居る。一にも二にも金、金と云ふ今日の風潮に、共鳴唱和する傾向が見えるのは、嚴にこれを排さねばならない。けれども、金がかたきの世の中であり、金がかたきの人生であることを、何と否定することが出来やう。近代人の大きな悩みは、金をめぐつて喜劇となり、悲劇を醸して居ることを、記憶して置きたい。

×

『もう、大分、出来たらう』と、ニヤ／＼して云ふ友達がある。『あなたなど、もうお金に苦勞はありませんまい』と、本気で云ふ人達もある。松崎天民生れて四十九年の年の暮、體量二十貫餘のおかげで、少しは餘財を持つて居るやうに誤解されると見える。その日暮しの貧乏人ですよ——と云つても、誰も信用してくれないから困る。一緒に遊ぶ友達は多くても、貧苦を語つて、共に愁を分けてくれるやうな友人は、得難いものである。昭和二年の歳末も近ふして、特

に此の感の深いもの、豈、私一人のみならんや。

×

澤田正二郎が演つた『三五大切』では、金がかたきで、七人まで人殺しを仕出かした。あの浪人源五兵衛は、『金がかたき』と二度も三度も述懐した。『父歸る』にしてからが、貧乏人の悲劇の一断面に、親子の切ない人情を見せた。戀だの、名譽だのと云つても、金あればこそその戯れであり、慾望であつて、先立つものが無くては、何うにも法圖が付かない。『ひもじさと、いとじさと、何れが先と尋ねたら、耻しながら、ひもじさが先……』と桃中軒雲右衛門の浪花節も、昔から喝破して居た。少しは金を持つて居さうに、一部の友達から誤解された私も、いよいよ此の大晦日に當面しては、我ながら金に無縁の生れ合せであることに、つくづく生き甲斐無さをかこちたくなる。

×

『働いても働いても食へぬ……』と云ふやうな歌を、二十八歳で死だ石川啄木も、心から誦んで居る。『快く我に働く仕事あれそれをしとげて死なんと思ふ』とも云つたが、その仕事もなく、金も無くて、貧苦の中に短かい一生を終つた。學生時代には貧乏で、食ふや食はずに居た菊池寛

が、今は文壇一方の王者とあつて、十萬以上の金を持って居ると取沙汰されるのなどは、眞に稀有の例外である。一生をコツ／＼と働いても、一圓の餘俗さへ出來ず、少い月給の前に節を屈して、涙を吞で生きて居る連中が多い。何と云つても、人間の一生は運不運であり、金持になるのも、貧乏人になるのも、賢愚や有能無能より、運不運であることに、淋しい諦めがつく。

×

郵便局も貯金をせよと、八方から勧めてくれるし、勸業銀行の債券にしても、千五百圓や三千圓が、今にも當りさうに宣傳して居る。萬一を僥倖する人々の心理を、さもしいとか淺間しとか云つて、嘲り笑つてしまへぬものが、強く人々の心に迫つて居る。『お父さん、こんな風の其の日暮しにも、モウ飽き飽きしてしまいました。せめて三年貯金にでも入つて、千圓二千圓三千圓と、少しは老後の事もお考へなさいよ』と、妻の寢物語は耳に蛸が出来るほど聞かされて居る。餘計な金に用は無いが、暑いにつけ寒いにつけ、山を思ひ海を懐しみ温泉を慕ふ時、矢張り先立つものは金だと知つても、平生の心がけが悪い報で、何うにも手足が出ないので困る者は、私一人だけであらうか。

×

大晦日は一年の總勘定日で、泣いても笑つても、帳尻だけは合さねばならぬ。收支決算の表に一年中の功罪を省みて、悔なきを得る者、果して幾人ありや。百八煩惱の除夜の鐘に、腹をめぐられつゝ、思へば恥しかりし事、哀しかりし事、腹立たしき事、怨み多かりし事など、次から次へと胸に迫る。一年元旦の雄々しかつた覺悟も、大半は後悔と懺悔に終つて、又一つ馬齡を加へるかと思ふと、霜鬢明朝又一年の感なきを得ない。それだからさ、ノラクラしないで、大に働き給へと云つたのに、今日あるは當然の事ぢやないかと、これは何も彼も仕たり顔の言葉である。泣いても笑つても、十二月三十一日午後十二時、年越しの金は、一圓も餘さぬ生活の惨めさよ。

×

棚からぼた餅が落ちて來ることを、生涯の間信じきつて、少しも屈托せず往生した男が、私の知合の中にも二三人あつた。生計が不如意になると、直ぐ貧乏やつれがして、老込でしまふやうな男に比すると、何と云ふ強くも雄々しいノン氣さであらう。前途の事ばかり悲觀して、クヨクジメクジメしてゐるよりは、貧に安んじて苦中に樂を求めて居る生活の方が、何んなに仕合せであるか知れまい。一にも二にも金々と云つて、目前の事に齷齪して居る男は、

得てして大きな損をするものである。得やうとしても、得難い金であると共に、欲しく無いと思つてゐても、自然にころがり込んで來る金であることに、少しは目鼻の開いて宜い人生ではあるまいか。

×

暮も十五日を過ぎて來ると、賞與金がウヨクと、銀座街道を歩き初める。包を抱へた夫人、奥様、女房、細君、嬢、山の神、何れもが幸福さうに、人並らしい足どりも、イツクとして面白い。一夜明くれば、平凡無爲なお正月であつても、その正月を樂しむ心は、少年の無邪氣さであり、少女の天真さと云つて宜からう。御主人、先生、旦那、やど、宅、うちの人から渡されたボーナスには、多少の差別があつても、銀座を歩いて居る主婦達の表情は、みな一様にかゞやかしい。人生の幸福と云ふものが、ボーナスの如何にあると云ふことを、最も切實に實感づけるのは、師走の風冷たい路上の景觀である。これを幸福と見るべきか、將た淺間しと見るべきか。

×

五圓札も小さ過ぎるし、十圓札も平凡であるし、と云つて百圓札には、なか／＼めぐり逢へ

相にも無い。持つて居て氣持が好いのは、二十圓札だと云つて、何時でも其の一枚を、珍重して居る男があつた。小料理屋か田舎の宿屋で、女中を口説く時の小道具に、二十圓札は誂へ向きですよ……と、その男はニヤ／＼して居た。昔は高々五圓で足りたものが、今は二十圓の時節である事にも、經濟狀態の膨脹が判ると共に、それだけ女の貞操も高價になつたのであらう。それにしても、一流の藝妓と云はれる旦那持ちでも、時と場合に依つては、五十圓から百圓で、何うにでもなり得る脂粉の巷である。カフエーの女が淫賣すると云つて、何も憤慨する程の事ではありませんまい。

×

或る金持の養子になつた工學士殿、評判の不見轉藝妓と馴染むこと十餘年、何處へ行くにも夫婦氣取で、睦じ氣に見えて居た。その不見轉も工學士のおかげで、身柄がズツと好くなり、みずてんせずとも濟む世の中を、何んなに仕合せに思つたことか。然るに工學士殿、愛妻を失つて、いよ／＼其の藝妓を正妻に入れようとしたが、家産傾け盡して、又昔日の面影がなかつた。金の無い時が縁の切れ目にしては、餘りに思ひ上つたみずてんの行爲を怒つても、時既に遅かつた。色戀の世の中、愛慾の月日にしても、金あつてこそその契りは、水のやうに淡いと云

ふことを、工學士は判つたやうでも、判らなかつたのである。此の話を聞いて、私は俄に何となく不機嫌になつた。

×

金なんかで、男の自由になりませんと云ふ女に限つて、何時も其の金のために、征服されて居るのが面白い。伊達とか、意氣とか、そんなものはモダンで無く、金さへあれば少々の不足は我慢して、何うにでもなびいて行くのが、當節の女氣質である。男にしたところで、百圓の月給よりは、二百圓の方へ心を動かして、少しでも餘計に金の取れると云ふことが、米國式だと云ふのである。金以上の情操、金以上の節義など、云つても、多くの人々は、たゞこれマネーのために支配され、征服されて居るのである。近頃の大学生にしても、三井が何うの、三菱が何うのと云つて、卒業後の衣食を念とし、大理想、大目的などは、ケロリと忘れた面持の連中が多いのに驚く。

×

セチ辛い當節柄では、失戀のために高利貸になる間貫一のやうな男さへ、容易に見ることは出来ないのである。同時に金に苦しみながら金を塵芥のやうに思ふ荒尾讓介も、めつたに見る

ことは出来ない。たゞお宮のやうな女は、そんぢよそこらにウヨ／＼するほど居て、ダイヤの指環を欲しがつたり、榮華の夢にあこがれて居る。これをしも淺間しい女の虚榮とのみ、一概に貶し去られぬ切迫さが、一世の生活に渦巻いて居るのである。今日のカフェーの女給に接近して観察したならば、如何に多くのお宮がウヨウヨして居るかに、誰しも三嘆するであらう。美しき衣を着るにも、美しく化粧するにも、先立つものは金であることが、女の世の中では、餘りに明かな事實である。

×

めぐり逢たい金がかたきは、この年の瀬の流れにして、何處かへ姿を隠してしまつた。折角めぐり逢つたにしても、討てもせぬ仇の威力の前には、返り討されるのが必定である。所詮は金に無縁の生れ合せに、長大息するが落であることに、又しても淋しい師走の風が吹く。今から三十年の昔、借間生活の貧しさは、正月が來ると云ふのに、五十錢銀貨一つ無い貧乏の智恵を絞つて、郊外から須田町まで、何か落ては居ないかと、新聞紙の反古にまで、心を取られた淺間しさが、哀しい思ひ出の一つとなる。金でも落ちては居ないかと、路上をさまよひ歩くやうになつては、人間も貧して鈍した行詰りで、村松梢風の「金を拾ひに出る」と同じ事である。

そのあとに感ずることは、自らの心をシカと持するの他にはあるまい。

×

金に恨は數々御座る——年將に暮れなんとして、此の感無きを得る仕合せ者は、羨むべきである。戀を得て名に死んだ鹿島清兵衛は、金にも縁が無くつて、陋巷に窮死したと云つても宜からう。世間も何のそのと、桃吉との戀に活きた岩倉具張も、遂には戀を失ひ金を失ひ、門地まで棄てしまつた。神戸の光村利藻にしても、戀を得たが金を失つて、明治の三大情話に數えられたに過ぎない。女人の魅力、遂に金を征服したのか、金の偉力、遂に愛慾の上に超越したのか。何れにしても天下の果報者で、戀と名と金と、この三つを兼ね得て居る者は稀有のことである。戀を失つて金に活きたは、『金色夜叉』中の間貫一位のものかと、今更のやうに感心せざるを得ないのである。

×

藍と赤のインタの滲み一生の我が右の指に消ゆる時あらじ——と、これは石川啄木の流を汲んだ私の舊作である。一管の萬年筆をたよりにして、一家五人の糊口を支へて行くと云ふことに、一時の雄々しさを思ふと共に、報はれるること薄い収入の不足勝は、前生からの悪縁と云

ふのであらう。貧乏の中に暮して、その日／＼を樂んで生きる諦めはついて居ても、その諦めを裏切る大きな傷みは、大晦日と云ふ關所である。それでも大借金が無く、何うにか此うにか、餅も搗げる年末氣分を、有難い仕合せと感謝せねばならぬやうな、平凡な年の暮を情なくも思ふ。この右の指のインクの滲みは、この生のあらん限り、私の生活の果敢いシンボルとなるであらう。

X

今から十年前の年の暮、父の金を持出した遊び盛りの若い男が、十圓札百枚の千圓束を、二つ三つ懐中にして、藝妓遊びに興じた。所は神樂坂の一旗亭とあつて、半玉五六人をあげての大盡遊びに、その千圓束を手玉にし、一つとセイ二つとセイと他愛がなかつた。半玉の一人が、『まあお札ですの、本物のやうに好く出来てるわよ』と云へば、『このお金が本物だったら、何んなに嬉しいこととせうね』と、他の一人も其の千圓束を、玩具か何かのやうに心得て居た。二十八九の女中が一人、『旦那、後生ですがその一枚を私へ下さらないこと、本物だと云つて母に送つて遣りますわ』に、若い男もホロリとして、二三枚を抜いて與へつゝ、『それ、偽物で無い本物なんだよ……』

X

横濱の本牧は或るチャブ屋に、銀座のカフェーから流れて行つた女が居た。英語が習へて、月収が百餘圓と云ふ甘い話も、聞いたと見たとでは大違ひで、遂に淫賣を稼がねばならなくなつた。この上はウンと金を貯めてと、最初の間は買喰一つせず、ケチの評判さへ立てられたが、悪い男に關り合つてから、四百圓の貯金を無くした上に、四百圓の借金が出来たと云ふ。それで其の女、慨然として嘆じて曰く、『私達のやうな分際で、お金を貯めやうなんて、大それた話ですわ。借金も初は百圓位なんですわ、それが何時の間にか四百圓を突破してしまひましたの。貯金の方は龜よ／＼ですけれど、借金の方と云つたら、それや兎さんのやうに速足ですもの……』と。

X

新緑の頃を水郷の佐原に遊びて、或る旅館で藝妓をあげた友達の曰く、『田舎へ行くと、藝妓と云ふは名ばかりで、多くは純然たる淫賣婦と云つて宜いよ。女中の取持で何も彼も極つて、いよ／＼お引けになつたと思ひ給へ。その藝妓の曰くにね、旦那、お願がありますが、訊いて下さいますかと來たよ。ウンよし／＼とあしらつて居ると、あのー私にね、お小づかひ錢を、

一圓か二圓下さらないこと……には驚いたね』と。あの邊の抱へ藝妓になると、不景氣の常節柄、髮結錢も思ふにまかせぬらしく、鼻の下の長からぬお客に向つても、逢ふたが百年目で、お極り以外の合力を受けると見える。人生、悲慘の事多い中でも、田舎藝妓の生涯には、金に數々の恨が深いと見える。

X

銀座に數多いカフェーの中で、その美しい女給達の中で、二十圓三十圓の金に依つて、貞操を賣買せざる者、果して幾人ありや。ライオンの女でも、タイガーの女でも、松月でも、夕ロネコでも、愛慾の外なる取引に、不時の収入を得るものが多いと云ふ。所詮は浮いた稼業の出舟入舟、人間萬事がマネーの力に依つて、何うにでもなる世の中に、カフェーの女ばかりを、純潔であれ、無垢であれと云つても、無理な注文と云ふべきである。要は常習淫賣者であるか、その然らざるかであるかの差で、若い女の群と若い男の群と、相近づき相接して居る以上、そこに色戀の取引が盛なのは、神様の力を以てせざる以上、何うにも左右し、是非することが出来ないであらう。

X

近頃八釜しい公娼問題にしても、事の起りは金であり、金のいざくさであること、今更改めて云ふ迄もあるまい。身を沈めた女達にしても、元來が金のためであり、その女を抱へる樓主にしても、元來が金儲けを本位として居る。金がかたきの世の中と云ひ、金に恨は數々あると云つても、この娼妓と樓主の関係ほど、金に即した事實はあるまい。不正樓主が檢舉されたも金のためなら、娼妓が逃げたり廢業したりするのも、金の外に問題は無いと思ふ。そこで公娼制度の改正など、大きな聲で云ふ前に、金の四五百萬圓も投げ出して御覽あれ、公娼の運命も悲慘で無くなり、樓主の惡虐も無くなつてしまふ道理だと、二一夭作の五を七か八にした迷論も出る譯である。

X

前の警視廳刑事部長中谷政一氏も、犯罪學上の原則として、凡そ犯罪の動機は、金と女であると喝破して居た。酒と女はしばらく云はずとしても、金に關する犯罪の多いこと、眞に三嘆するに餘がある。金さへあれば、牢獄に入らなくて済む男の、貧乏のため罪に問はれるは、同情に價するが、遊ぶ金が欲しさの惡事の數々は、困り者であり、厄介至極でもある。國を出てから二十餘年、有餘る智慧を好い方へ使へば、今頃は立派に遣つて行かれる筈の男の、金に眼

のない大慾から、三度も五度も入獄したのがある。近く未決監から手紙して曰く、『僕も今度世の中へ出たら、大に心を入れ換へて、一攫千金の大業に成功して、故山に隠退しやう』と。

×

泣いても笑つても、十二月の師走が来て、何とか帳尻を合はさねばならない。省みればこの一年、元旦の覺悟は何處へか飛で、又しても後悔多い年の暮れ、來る年もくゝ悪年つゞきで、何うにも始末に終へぬ不運つゞきも、來年こそは何とかなませうで、老を重ねて行く人々のみじめさよ。斯く云ふ松崎天民、こゝに記者生活二十八年、四十九歳の暮を送つて、いよく人生五十の定命に近づかんすとす。『五十だ、五十だ、これからだとは思へども、何だか淋し暮れの風吹く』で、初老の嘆をもらしたところで、歲月夢の如く、烏兔匆々、生涯に残る多恨の涙は、『金に恨は數々御座る』の一語に盡く。貧乏物語よ、今年限りで夢となれ、夢となれ。

善友惡友珍友

一、友情と年賀狀

毎年、年賀狀を五百通乃至六百通は出す。如何にも友人、知人が多いやうであるが、果して眞の友達が、幾人あることか。一々、宛名を書きながら、何時も、淋しい心持がする。それでも、元旦の朝になつて、玄關先に一束の賀狀が、ドサリと置かれる刹那には、何だか心強い氣持もするのである。この感じを起させてくれるだけでも、『友達や知人は、澤山、もちたいものだ』と言ふ心持がする。

友情とは、こんなに淡いものか。

二、二人の亡き友

ほんとの友達らしい氣持で、頼りにして居た人は、皆、若死をしてしまった。あの男が生きて居たならと、月末に屈托する折々、ほんとに、亡友の一人二人が懐しくなる。

米國へ渡つて寫眞術を専攻して歸つた永井定太郎は、戀人に啖を拭いて貰ひながら、京都大學の病院で死んだ。小説家になるのだと言つて、幸田露伴の弟子だと自稱して居た田中稻月も、血を吐いて死んでしまつた。

好い友達は、皆、夭折するのさ。

三、親友は貧乏だ

悪い友達ばかりが長命して居るのではない。私にも一人や二人の親友はある。いざと云へば、大事の心配を半分けにして、自分の事のやうに、苦勞してくれさうな友達が、少くとも一人か二人は有る筈である。

けれども、『今困つて居るから、百圓ほど何とかしてくれないか』と云つても、おい、それと出してくれるやうな友達は、今のところ一人も無い。私も随分、内實は窮迫して居るが、頼りになる友達も、金には困つて居るらしい。

四、ニコく山人

多いのは、遊び友達である。ニコく山人松本敏太郎翁の如きも、私の一寸推服した遊び友達であつた。『酒が飲みたい』と言へば、何時でも、何處かへ連れて行つてくれた。

それほど親しくなくても、亡くなつたと云へば、何だか急に身の廻りが、寂しくなつたやうに感ずることがある。長田秋濤翁の死んだ時が、恰度さうであつた。松永ニコく山人も、酒のために、此の生き甲斐ある世の中を、自ら早く去つて行つた。

五、結城禮一郎氏

同じ年齢であるが、友達といふよりも、恩人であり、先輩であるのは、結城禮一郎氏である。新聞記者としての手ほどきを、私に授けてくれた唯一人で、私が今日の私として、新聞記者として在り得るは、結城氏に負ふところが多い。私は結城氏にどんなに威張られても、遂に頭が上らないのである。

新聞界の鬼才とも言ふべき結城氏が、久しくその手腕の冴えを見せず、遊んで居られることは、我が新聞界にとつても、大きな損失であると思ふ。

六、酒の兒玉花外

忘れ得ぬ友達として、私は兒玉花外君を思ひ出す事が多い。詩人としての情熱や、其の作品などは問題で無い。素面で居る時は、淋しさうに見えるが、飲めば止めどなく奔放になつて、『おいら、松崎……』などと云ふ、あの酒の兒玉花外君を、私は長かるべき將來にも、遂に忘れる事が出来ぬであらう。それ程兒玉花外の醉態は、私に親しさと懐しさとを、感じさせて居る。相逢はぬこと、思へば六七年にならう。

七、益友北澤秀一

北澤秀一君は親友の一人であつた。齡は私より若いけれど、頭腦の明敏な、常に有益な刺戟を與へてくれる益友の一人であつた。

新聞記者生活から、滯英三年、歸朝後は讀賣新聞に勤めたり、日本活動寫眞會社に入つて、愉快さうに働いて居た。手腕よりも頭腦の方が、先に發達した人で、押しも押されぬ近代人の性格を具へて居た。好き舞臺に立てば、ウンと働き得る人であるが、一日も早く、落着く

所に落付かせたいものだと思つて居るうち、この夏、輕井澤で客死した。

八、路傍の音楽者

添田啞蟬坊とは、「淺草の會」で知り合つたが、流行唄の本家本元としてよりも、長髪のスタイルよりも、彼の有つて居る熱意に、私は引ずられて居る。下谷山伏町の貧民窟に住んで、四疊半一室に、平然として清貧を體驗して居る風格は、尊敬すべきである。

深切な實意があつて、いざと云へば、火の中へでも飛び込みさうな、一種の實行力をさへ、畜積して居さうに見える。彼は其の不平と憂悶とを、流行唄に遣つて居る革命兒か。

九、魚善の岩崎君

日比谷交叉點の山勘横町は、花月食堂に相對して、魚善といふおでん茶飯屋があつた。岩崎善右衛門と云つて、時代に對する不平と、人間に對する仁俠とを、ゴツチャ交ぜにしたやうな好漢である。七八年前から、その茶飯を食べに行くやうになつて、岩崎君と知合になり、肝膽相照して居るのである。

『松崎さん、一杯やりませう』と云つて、よく方々で御馳走になつたこともある。小金に困つた時には、何時でも工面してくれさうな善友だと思つて居る。

一〇、羊公と天華と

田井羊公は、新聞の社會記者として、第一流の男であるが、神経を病むでから、ブラブラして居る。舊友で親友の一人であるが、今は松江でどうして居ることか。親しい友達であるだけに、それだけ平生は、音沙汰が無い。

和田天華は、神戸で新聞記者として働いて居る。大正三年に、私が東京朝日を退社した時、彼がたつた一言であつたが、交詢社前の路傍で、私を泣かせるやうな文句を言つた。その時の友情を、私は長く忘れることが出来ない。

一一、梢風と貢太郎

一番親しく往來してゐるのは、村松梢風君である。生方敏郎、水木京太、畑耕一の諸君とも、交際はして居るけれど、未だ友達としての實感が、ピタツと來ないのである。

そこへ行くと、田中貢太郎君とは、戲談悪口を言ひ合ながら、友達としての親し味が一番強し。一つには年齢の相違もあらうが、田中君と逢ふ時には、何時でも友達らしい心持が起る。彼の風貌を想ひ起すだけでも、此の世の中に於ては、愉快なことの一つである。

一二、漫畫家一平君

帝劇でバックを塗つて居た彼は、ヒョッコリ東京朝日新聞に入つて來た。「秋晴十日間」を書くため、私は彼を方々へ引廻してやつた。初めて漫畫集を出版する時にも、本屋へ渡りを付けて遣つたのは、私であつた。

舞臺も好かつたが、彼れにも天才的の手腕があつて、先づ「大きな手」で賣出した。「漫畫家岡本一平」の存在は、ドエラいものになつた。私は愉快で堪らない、嬉しい。

何うだ岡本君、舊友のために、一枚描いてくれないか。

一三、郷友佐藤去來

美作津山の産で、佐藤去來と云へば、一種の手腕家として、活躍して居た奇才である。磐根

錯節を経て 一時、大勢新聞社長の椅子に納つて居た。彼がほんとのものになるのは、愈々これから後の歲月かと 私は思つて居た。

平生は頓と往來もせず、社長さんになつた姿も見ぬが、私が死んだ時、逸早く駆け付けてくれて、一番多額の香典を置いてくれる友達は、佐藤繁吉君だと確信してゐた。彼が私に就いて、何んな事を云つて居やうと、私は構はない。

一四、五郎と五九郎

澤田正二郎氏は、その芝居が好きで堪らぬが、未だ友達と云ふほどの感情ではない。曾我迺家五郎の和田久一氏には、逢ふと直ぐ友達になれて、無遠慮なことでも云へる仲だ。

曾我迺家五九郎の武智故平氏は、知人であると共に、友達交際も出来る人である。一緒に飲食したことも、此の方面の人では一番多いであらう。五九郎でなく武智になり、天民でなく松崎になつた時、談論の如何に風發するかは、これを世人の想像に任せやう。

一五、森清土の森香

赤坂教坊の名妓（と、私は思ふ）で本名をむらちやんと云ふ。葭町時代は知らず、新橋時代に相知り、赤坂時代に邂逅す。酒席に相見て、何時も一脈の哀思をそゞつてくれるため、女性の中の友達の一人に數えて居た。

『あなた、私の旦那にならないこと：』などと戲談を云はれて、何時もクヂ／＼となつて居た私である。此の項、神経過敏な妻に讀まれても、神明に誓つて、うしろめたきこと、夢さらく無しと斷言して置きます。その森香も、今はもう藝妓では無いらしい。

一六、姓の無い外骨

一代の鬼才宮武外骨先生は、多年知遇を辱うして居る先輩にして、老友の一人である。先生その宮武の姓を廢し、たゞの外骨として、餘世を珍史の研究に没頭して居られる。

先生が大阪で、滑稽新聞を發刊して居た時、私は大阪朝日記者として、月給二十八圓を得て居た。二人目の子供が生れて、暮し向にお困りでせうとて、月々十五圓を支給して、私の悪文を買つてくれた舊誼は、二十年後の今日に至つても、忘れることが出来ない。

一七、めし屋の友達

東京朝日新聞社の前に、私の同郷から出て、飯屋を営んで居た藤井の店には、苦學生がゴロ／＼して居た。私が大井を二つも食べるので、何時もそれを羨ましさうに眺めて居た群の中から、法學士の矢田警部が出たり、根岸興業部の立花寛一君が現れたりした。

同郷の矢田君には、その後、杳として逢はぬが、立花君とは淺からず相交るに至つた。齡若くして精悍なるめし屋友達、願くば大に勇奮して、大井を二杯も三杯も食べてくれ。

一八、靱山半三郎氏

焼けぬ前の演伎座で、澤田正二郎氏を中心として、靱山半三郎氏と相知るに至つた。佛典上の教養深く、多方面の趣味に通じて居る靱山氏は、知人中の富豪であつたと共に、好個の話術家として、敬意を表して居た一人である。

築地の八百善で、初めて八百善の飯を食はしてくれたのは、此の靱山氏であつた。金に困つた時の助けとしては、餘りに境情が隔絶して居るけれど、何時でも私のために、美味求真の慾

望を満してくれる益友に數えて宜からう。

一九、代議士連甲乙

何時ぞや、議會の雜觀書きに出かけて行つて、代議士連中の中に、友人や知人が多いのに、我ながら驚嘆した。政友本黨の清水長郷、兼田秀雄、中山貞雄、政友會の安藤正純、河上哲太、憲政會の小島七郎、小山松壽、田中萬逸、横山勝太郎、頼母木桂吉、平野光雄の諸氏とは、會て同業記者であつたり、よく酒席を共にしたり、月日の因縁が淺くない。

高松正道や清瀬規久雄の姿を、議席に見られぬのは、一寸、淋しい氣持がした。

二〇、小説家の二三

文壇の人々では、その昔の少年時代、田山花袋先生に、『書生に置いて下さい』と美作の山中から、手紙を送つたことがある。民友社の小使時代には、廣津柳浪、小杉天外の二家を知つて、書生に置いて下さいと言つたことさへあつた。

古くから知つて居るのは、正宗白鳥氏一人で、故人では國木田獨歩、岩野泡鳴、平尾不孤な

ど、再三飲食したことがあつた。

二、作者と役者と

角田浩々歌客氏は、私の恩人の一人であつた。薄田泣菫氏にしても、青年の私を精神的に、何んなに鞭撻してくれたことか。その頃は、花房柳外、島山古瓶など云ふ、新派劇の作者も居たが、若うして死んでしまつた。

井垣増太郎と云ふ役者が居て、大阪新報記者であつた私に、朝日座の成美園の作者部屋に入らないかと勧められたのも、思へば二十餘年の昔である。その井垣とは、大阪の南地で、よく飲食に歩いたものだつた。

秋風の中より

丸ビルの時代相

——近松秋江足下し——

今日もまた雨だ、秋の雨だ。

丸ビルへ入つて見た。震災直後は、丸ビル時代を現出して居たかの觀があつたに、其の後は何んな風に、この一廓の時世粧が變つたことであらう。私は其の表に流れる時代相の上に、大正十三年秋十月の東京を、側面から見たいと思ふ。

進藤俊介が經營して居た「丸之内新聞」に入つて見ると、女の事務員が一人居て、『進藤さんは、近頃少しもおいでになりません』と云ふ。八階に地の利を領して、大に丸の内氣分を鼓吹して居たが、進藤もたうとう遣り切れなかつたかな。

◇

丸ビルも近頃は、何だか影が薄くなつたやうな氣持がした。固より雨で鬱陶しいせいもある

が、こゝを「東京の中心」と見た月日は、この夏頃から次第に他へ移動して来た。銀座や日本橋の通りが、間に合せの化粧なりにも、復活して来た結果は、單り丸ビルの一廓にのみ、榮華の夢を許さなくなつたのであらう。

それでも、友達の北澤秀一が、雑誌「女性」に書いたやうな、日本の近代娘を見やうとする私達は、何としても一度は、此の丸ビルに入らねばならぬ。丸ビルの空氣や氣分に、觸れて見ねばならぬ。

◇
前年の地震を一區劃として、東京に於ける女の世界も、異常な急速度に依つて、變化し進展したことを思ふ。

あの耳隠しや、オペラ女優まがひの歐米式お化粧の方法や、あの大跨なそとわの歩き振りや、または婦人の洋装の殖えたことや、あの顔面表情の強く華やかになつたことや、何となく異性に肉迫する氣分の濃厚になつたことや、一々擧げる迄もなく、女性の醗酵する色なり匂なりに、私は劃時代的の變化を見た。

その新しい女性の表現を見やうとする人は、先づ丸ビルを訪ふべきである。

◇
女の國の流行ほど、皮肉なものはないと思ふ。近代の女子教育が然らしめたのか、婦人體育の普及が然らしめたのか、但しは活潑に歩くことは、活動寫眞などの影響に依つて然るのか。その何れであるにもせよ、女が大跨に歩く事實の裏面に、都腰卷の類が流行し初めた事實を、否定することは出来ぬと思ふ。

冬は毛糸であり、夏は薄い絹地や木綿であつても、あの都腰卷の存在が、男性に對する不時の警備であり、同時に自家面目の維持に價値づけられて居る事は、これを一面の眞理と云つて宜からう。

◇
近代女性の一表現を、私は先づ最も卑近な其の都腰卷に見た。『あんな不都合な物の存在は、女性の肉體から醗酵する誘惑的實感の有力な一部分を、我から減殺するものである』と、心から慨嘆して居る若い男の言葉を、頭から『馬鹿!!』と笑殺し、罵殺することは出来ぬ。

けれども、婦人が大跨に歩くやうになつた變化の上に、時代相の流れを發見する文明觀察者は、矛盾と撞着とに超越して、都腰卷を謳歌せねばなるまい。

風情も、奥床しさも、思はせ振りも、次第に女の國から影を失ひつゝある。

◇
雨の日の丸ビルで、私はこんな事を考へながら、美しく飾られたショーウインドの前に、女の心を讀まうとした。

買物の歸りと見えて、下谷あたりの藝妓らしいのが二三人、大きな風呂敷包みを抱へて歩いて居た。久留米緋の雨着の下から、白地に桔梗を散らした腰巻が、それも都式の「袋」であつたに驚く。

『藝妓までがさうか』と、驚き給ふこと勿れ。全體、あの都腰巻なるものは、藝妓の仲間から用ゐられて、次第に女國一般を支配したのかも知れない。

近松秋江足下、兄は何う思ふか。

大を誇る丸ビル

——丸の内日記より——

364
秋晴れの午下りを、私は丸ビルの一階や五階、七階や八階などで過ごした。

中心的引力は、次第に銀座の方へ移動しつゝあると云つても、地震後期に於ける東京世相の誘惑力は、未だ強く醗酵されて居る。私はその鬱陶しい雨に、女の都腰巻を眺めたが、今日は果して如何の新発見に、隨喜するを得るか。

三菱地所部の丸ビル事務所へ入つて、私は先づ「丸ビル」に關する概念を得やうとした。あの眞四角な巨大な黄色の怪物が、平面的な赤い東京驛と對立したは、大正十一年の暮からだと記憶して居る。

◇
二千八百二十一坪五合と云ふ地域に、中庭やその他の空地を餘して、二千百三十六坪四合五勺だけ、あの丸ビルが建て居る譯である。これを九階まで延長すると、驚く勿れ一萬七千八百五十七坪二合の總建坪となつて、これを一巡するに二時間を要すると云ふ話である。

高サ九階まで百九尺餘もあつて、丸の内一帯を威壓して居る觀あるは、何と云つても大三菱さんの仕事だけはある。去年の地震で少し痛むたので、約五百萬圓を投じて、鐵骨煉瓦を鐵骨鐵筋に模様變へして、恰も工事の眞最中とある。

◇

大小通じて九百の貸室に、四百の店々や事務所があつて、七千人からの男女の従事員が、此の一廊の中で生活して居る。一日の出入者三萬―五萬の間を上下して居るとは、社會の中に又一つの社會を構へた存在として、地方人ならぬ者でも、先づ一度は驚嘆に價しやう。

『地下室は坪五圓平均、一階の店は二十圓平均、各階の事務は十一圓平均になつて居ます。一ヶ月の家賃が十五六萬圓には達して居ませう……』
と、係の人は私を感心させた。

此の他にも、未だ驚くことがある。



地下室から九階まで、各階の廊下を一巡すると、恰も二十四五町を歩いたことになる。海上ビルが大きい。第一相互館が宜いのと云つても、皆が丸ビルの軒下に跪座せねばならぬ。三千三百ボルトの電力、二十馬力の上水設備、爐化沈澱装置の下水機關など、何も彼も自給して居る。村と云はふか、町と云はふか、市と云はふか、やがては二階全部も小賣店になつて、「丸ビルへ行きさへすれば」を、愈々徹底させたいと、これは係の人の空想のみで無い。

丸ビル時代は、益々進展するののか。

長田幹彦が雑誌「改造」に「青袴の女」と題して、丸ビルか海上ビルかの女の事を書いた。一種の賣淫行爲を摘發細叙したので、サラリーマンの間には、かなり評判となつたものである。『面白いには面白かつたけれど、長田君では駄目だよ。そこに時代の背景も無ければ、本能に動くモダンガールの検討などを、無視して居たもの……』
と、私の友達は口惜しがつて居た。それは何うでも宜いことにしても、この丸ビルを中心として、「丸の内の女」が出現したことは、著大なる一事實である。



丸の内の女、丸ビルの女――。

この丸ビルに出入して居る職業婦人にも、「丸の内の女」と云つて宜いやうな、一種のスタイルが、何時の間にか出来て居ることを思ふ。若し現代の日本に、東京に、モダンガールの存在を求める人があつたら、御身達は何を措いても、先づ丸ビルに入つて、その欲求に満足の微笑みを湛えねばならぬことを思ふ。

明るい感じにも、暗い氣持にも、私は丸ビルの女を眺めることが出来た。丸ビルの女を通し

て、現代東京の女の新しさと、奇抜さと、自由さが眺められる。

モダン・ガール

——婦人公論主幹に——

友達の説明する所に據ると、モダン・ガールと云ふのは、在來の新しい女でも無く、理智的に眼ざめた女でも無い。たゞ自分の全身全能を、男性の前に投げ出して、思ふ儘に振れ舞ふと云つた風な、極めて奔放自由な、新時代の雰圍氣の中に一顰一笑する若い女性であるらしい。そして彼の女達は、相當の教養があつて、活動寫眞以上に、文藝や演劇の趣味を解し、相應の批判力をさへ備へて居る。舊來の「新しい女」よりも新しく、すべてを「生活本位」に立脚して、本能的に動いて居る點を、私は面白いと思ふ。

丸の内や丸ビルの女達が、此の近代女性としての條件を、如何なる程度まで有つて居るか、内面生活の側では、容易に「事實」を覗くことが出来ぬ。

けれども、彼の女達の外面、その肉體的の醜酷素に於ては、容易に異つた方面を發見するこ

とが出来ぬ。髮の形、化粧の色、衣服の柄などのスタイルと、その舉止とに依つて、これを識別するに難くない。私は此の類の女性を、大正年代初期の日本に生れた存在として、閑却してならぬことに思ふのである。

さるにても、時の流れの忙しさよ。

先年の大震災を一區劃として、東京の世相の波が、あはたたく起伏したことを感じた人々は、その特異な現象の一つとして、近代女性の色彩が、一層、濃厚となり深刻となつたことも、その注意深い視野の中に加へたであらう。

『何だか此う、急に世の中が變つたやうでは有りませんか。少くとも若い女達の世の中は、私達が一寸、他所見をして居た間に、吃驚するほど變化しましたね。外面の形ばかりでなしに、言ふことや爲ることなども……』
と、中年の男や女は驚いた程である。

婦人公論主幹島中雄作兄足下、兄は毎日丸ビル七階の中央公論社に出て、常に丸ビル氣分に

觸れて居ること、とても私達の比では無い。殊に兄は、高級な婦人雑誌の編輯長として、常に此の女性の方面に向つても、深い強い観察と批判とを下して居らるゝ事と思つて居る。従つてモダンガールの存在に就て、兄が一家の見を持して居る事を思ひ、切に其の感想を聞かんことを望んで居る。ジャアナリズムのみ終始せず、私達は斯うした世相現象に就て、眞面目な熱心な研究を敢てして宜いでないか。

◇

私の云ふモダンガールは、單り丸ビルに出入する一部の女性のみでなく、丸ビルに依つて生活して居る職業婦人の群に、その多きを發見して居る。

女事務員など云へば、生計の不如意に煩ひされて、肉體には生氣が無く、白粉垢の附いた襟もと寒む氣な女達だと、昔はさう思はれたものである。鬢のほつれ毛をかきあげるも物憂さうに、何となく悄然として、貧乏臭くて、不如意さうで、若いのに色も香も失せたやうな、そんな類の女と思はれたものである。

それが今日は、何と云ふ體たらくぞ。

◇

月給にしたところで、高々五六十圓から七八十圓、モツと少い階級の方が多いの、何と美しくも潑瀾として、男性の感情を刺戟し、挑發することよ。

新時代の空氣を呼吸して居る若い男達が、舊來の性的職業女、藝妓、私娼、公娼の類に満足せずして、性慾的歡樂の對象を、此のモダンガールに求めて居るのも、決して怪しむべき事では無い。私は其の第一期的現象を、「カフェーの女」に眺め、「オペラの女優」に見た。そして今、更にこれを新しうして、丸ビルの女に觀やうとして居るのである。

近代男性の欲求

——北澤秀一兄足下——

丸ビルの存在と共に、モダンガールの出現と共に、これと對立して居る男性の群をも、閑却してはならぬ。

近代的に生活して居る若い男達は、その生活の第一欲求として、何がな刺戟の強烈さを追つて居る。見るもの、聞くもの、觸れるもの、味はふもの、其の凡てに於いて、彼等は從來の生温さでは満足が出来ない。性慾的歡樂の對照として、異性を取扱ふ場合に於て、殊に彼等の慾

望は、奔放に、自由に、舊來の因襲的桎梏から脱出しようとして居る。

兄はこの現象を、何と見て居るか。

◆
實を云ふと、今日の日本には、東京には、近代女性の出現よりも、近代男性の存在の方が、その數に於いて多い。

この若き教養ある男の群は、大學の講堂内で、自分自身を築いて來た以外に、常に勇敢に實世間に入出して、そこで様々の生活を體驗づけられて來た。これを性慾生活の方面に觀ても、彼等は今日の公娼なるものに、決して隨喜し満足して居るのではない。同時に「ゲイシャ」と云ふ異性の存在に對しても、今や漸く倦厭たる感情が擡頭しつつある。

これ決して、一場の戲談では無い。

◆
公娼の巷に スタートを切つた彼等の性慾生活は、藝妓・密娼と云ふ風に、次第に變轉して來たを、今日までの極めて普遍的なプロセスとして居た。

世界の何處にも無くて、單り日本にのみある機關を、「公開された娼婦の家」と云ひ、ま

た「待合」とも云ふ。全く世界の何處を歩いて、東京の待合と云つた風の家や、京阪の貸座敷と云つた構へには、見參することが出來ぬと云ふ。それほど特色づけられた「歡樂の巷」を有しながら、彼等は満足が出來ぬのである。

そこに恐ろしい時代の推移を見る。

◆
北澤秀一兄足下、何時かも二人はこんな事を語り合つて、日本で生活して居る若い男の不幸を嘆いたでないか。

これをお互の經驗に見ても、お互の本能生活の欲求を満たしてくれる女性は、容易にこれを發見することが出來ぬ。今日のやうな片輪な公娼制度の中に、手桎足梏で縛られて居るやうな女性を、私達の對照とするには、餘りに私達の方が進み過ぎて居る。今日のやうな慣習的表情に訓練づけられて居る藝妓の群に、近代的の感情を求めても、それは失望に終るが過去の例であり、今日の例である。

◆
經濟上の條件から云つても、今日の儘で押進んだならば、吉原や品川や洲崎は、とても私達

の歡樂機關とはならない。人々の遊びの気分が、時代的に自覺すればするほど、今日の公娼廓は一步／＼滅亡の墓場へ近づくのみである。待合にしても、藝妓にしても、餘りに近代人の感情と没交渉なことを、私は味氣なく思ふのである。多々益々大に行はれさうな歡樂機關でありながら、其の何處かに、近代生活と相容れぬ微温さが流れて居ることを、私は呆氣なく思ふ。

問題は「藝妓の將來」にもある。



英國から歸つて、日活の企畫部長を勤めて居た兄は、斯うした問題に就いても、一家見を持して居る筈である。

そこで問題は自然に、私娼の方面に亘るべきであるが、私は此の上こゝで、此の談議をつゞけまい。たゞ丸ビルの一廓に依つて、モダンガールの存在を見た私は、當然の歸趨として、お互の興味も實感も、近代女性の上に強く集注さるべき傾向に、第一聲を放つて置かう。

近代女性の衣を着て、此の秋風の巷に躍つて居る群に、カフェーの女やオペラ女優があることは、前にも述べた。

銀座のカフェー

——久米正雄兄足下——

尾張町角のカフェーライオンでは、この三十日より四日までを、秋の「紅葉デー」として、浮かれ男達の心と足を、その明るい酒場に引いて居た。

紙細工の紅葉を一面に飾つて、女給達には高島田を結はせ、赤や青や紫の彩美しい元祿模様の衣服を着せた姿は、宛として芝居の御殿女中らしく見えた。カフェーと元祿姿と、そこからぬ時代錯誤があつても、人々は敢てそれを怪しむ風もなく、一圓五十錢の紅葉料理に、舌鼓を打つて居る風に見えた。

私も一夜を其處の客となつた。



東京にカフェーらしいカフェーとして、初めて此のライオンが出来た時、人々は随喜し渴仰して、蟻の蜜に寄るが如くに、吸ひこまれたものであつた。

一つには地の利を領して、銀ブラの休憩所としても宜く、新らしい意味の待合所としても

適く、半夜を安價にさんざめき得る歡樂機關としても、意味ある一つの出現であつた。其の前から日吉町の國民新聞社前には、カフェーブラントンが出来て、一部の若い人達の社交場所のやうになつて居たが、廣い世間的のカフェーとしては、ライオンが魁であつた。

前年の震災以後、復興途上にある東京市に、何よりも先に復興し初めたのは、數々の小料理屋飲食店であつた。眞に雨後の筍も斯くやとばかり、これまでは小路の裏や路次の中に、世の光を避けて存在して居たおでん屋までが、表通りにバラツクの店構へして、先づ天災に疲勞した人々の味覺に、復興第一歩の歡びを興へたものであつた。

此の大きな現象の中に、最も其の多きを見せたのは、西洋料理を看板とするレストランや、カフェーであつたことは、改めて云ふ迄も無いことであらう。

銀座の表通りから東西の金春、板新道、信樂新道、中通にかけて、此の種の小料理屋や、カフェーが、二百軒に餘るほど出現したことは、地震後期の東京相を語る者にとつて、見のがすことの出来ぬ大きな一つの事象と云つて宜い。

此の中に在つて、王者の如く構へながら、カフェーの代名詞であり、代表者であるかの觀を呈して居るのは、依然としてライオンの他に無い。三階が二階となり、建物がバラツク式であつても、そこには三十人近い若い給仕女が居て、艶めかしい色香の場面を醸酵して居る。

臺灣喫茶店も復活したし、カフェーロシアも復舊したし、タイガーとか、ブラントンとか、もみぢとか、ニコ〜食堂とか、いろ〜の家が出来た。

此所にも彼所にも、濃化粧した若いウエートレスが居て、飲食以外の氣分や情調に、若い男の胸を躍らせるのが、第一義のやうに見えた。蓄音機が奏でる數々のレコードに、安價な浮かれ心を唆られるやうな、場末の氣分までが侵入したことは、暫くこれを不問に附して、正にこれカフェー全盛の秋と云ふ觀がある。

そこにも、時代心の囁きが聞かれた。

浅草のカフェーオリエントは、數々の美人を有して居る點に於て、東京第一と云つて宜いが、その氣品も空氣も、銀座のライオンには遠く及ばない。

私は甘いカクテルの舌ざわりに、秋雨の夕を楽しみながら、ライオンの明るい灯の下で、様々の幻想に耽つて居た。カフェーの客として、若い美しい給仕女の秋波を浴びるべく、餘りに我が世の老いたことなどは、問題の外にして、私は何も彼も忘れ果た若者の心になつて居た。久米正雄兄足下、斯うした私の情痴にも、兄は深い思ひ遣りを寄せるや否や。

擬似性慾的對象

——ライオンの一隅——

大正五年の春を限りとして、大袈裟な「私娼時代」が去つた後、私達の前に擬似性慾的の快感を與へたものは、オペラ女優の一團が醗酵した氣分であつた。

そのオペラ女優の群も、時世の變轉につれて、次第に影を薄ふしてから、代つて私達の前に肉迫して來たのが、カフェーの「給仕女」であつた。ライオンやプランタンに、ロマンスの端を發した彼等の群は、その根強い存在性を強調して、今日では殆ど永久的に、新代の世相を彩るに無くてならぬ程に、重要な位置を價值づけられて來たのである。

◇

今や一世を擧げて、「カフェー時代」の觀を呈するの時、私は其の因つて來つた所以を檢討して、二つの理由に直面することが出來た。即ち其の一は、時代の生活行爲が簡單平易を冀ふ經濟的の要求に原因して、最も安價に、最も簡明に酒食の慾望を満たし得る機關として、カフェーやバーの出現が、時代人の所期に適應したからであつた。在來の日本料理に於ける煩雜と時間と高價とに代つて、カフェーやバーの類が時代の進展に正比例して、如何に文化的の酒食機關であるかは、改めて云ふ迄も無いことである。

◇

第二の理由とするところは、カフェーやバーの副産物的所在として、若く美しい女の群が、モダンガールの色調の下に、一顰一笑の空氣を醗酵して、強く鋭く男性に肉迫することである。娼妓や藝妓や私娼の他には、異性に接觸する機會と云ふものに、多くを恵まれて居なかつた若い男性の群が、如何に歡びの胸を躍らせながら、彼等の秋波の渦に投じたかは、これ又説明する迄も無いことである。カフェーの存在は、少くとも此の二つの理由に依つて、根強く永久的に、榮え行くべき本質的のものとなつた。

◇

日本人も次第に歐米化して、洋食好きになつたからだ、これを味覺の變化の上から、觀察して居る人々もある。また今日のやうなカフェー時代を現出せしめたのは、在來の日本料理屋が時代に取殘されて、何時までも城廓の中に引籠つて居たからだ、認めて居る人々もある。その何れであるにもせよ、私は今日のカフェー全盛時代を形造つたものは、カフェー其のものゝ本質的價値と共に、それに附隨して起つたウエートレスの群を、閑却し無視することは出來ぬと思ふ。

實に面白きは、世相の流れかな。



カフェーの女を中心として、若い勤人や學生の群が、この十餘年の歲月の間に、如何に多くの戀愛史を編み、色香の物語を描いたかは、餘りに舊くも亦生々しい事實である。さうした過去の月日を辿る迄もなく、彼等の群は常に若く美しく新陳代謝して、彼等の前を走馬燈のやうに通つて行く男の群と、或は淡く或は深い交渉を重ねて居るのである。

そして或者は人妻となり、或者は妾となり、或者は藝妓となり、或者は流轉の旅をつゞけつゝ、そこに人生の喜びと哀しみとを體驗して居るのである。

此の東京の町から、數多くのカフェーを除き去り、ウエートレスの群を退散せしめたならば、如何に私達の生活は淋しく味氣なくなることであらう。

經濟的にも興味的にも、私達の本能生活から、次第に背中合せとなりつゝある公娼廓は、もう時代の問題ではない。同時に私娼の存在をも奪はれて、此の一國を貫く賣笑婦制度さへ、未だ確立して居ない日本に、若い男として生れ合せた人々は、眞に不合せなものである。

そこにカフェーあり、若い給仕女あつて、初めて人々は救はれた感じがした。

底冷たさの灯に

——吉原遊廓は如何——

今日は淺草に來た。前年の大震災火災後、僅に二度ほど訪れたので、思へば淺草の世界にも、無沙汰して居た譯である。

公園六區の通りも、大方はバラックなりに復活して、昔を偲ばせるやうな色彩や空氣が、底冷めたい秋風の中に漲つて居た。不夜の歡樂街とか、民衆娛樂の根源地とか云つても、跡方も

無く震火の洗禮を受けて、一時は何うなり行くことやら、少しも見當がつかなくつた。
その浅草公園六區が、僅々一年の間に、曲りなりにも復舊し復活して、昔懐かしい姿を見せて居るは、嬉しい事であつた。

◇
廣小路の一角で、浅野さんが經營して居たカフェーアメリカは、カフェーオリエントと改名して、相變らず浅草唯一の『女給の美しさ』を見せて居た。

私は一人飄然として、一隅の卓に倚りながら、その美しい女達を眺めて居た。新國劇の何某と浮名を流した浪子や、才智の女らしいお榮や、お千代、お君、お芳など、見知り越しの顔も少なくなかつた。東京の世の中が、一大暗轉を遂げた今日でも、彼の女達が依然として、若く美しいのに、私は不可思議な心持さへした。

四邊には、もう灯がついて居た。

◇

観音の境内は、雨催いの底暗い中に、絶えては續く人々を吞吐して居た。
四方八方から火の粉を浴びても、遂に此一廓だけは助かつて、大きな本堂の迦藍は勿論、あの

五重の塔も、大銀杏も、團十郎の銅像も、昔の儘の姿を見せて居た。今夜の飯を何處で食べ、今宵の夢を何處で結ぼうにも、この世に縋るべき何ものにも見放されたやうな男が、一人も二人も徘徊して居た。湯屋の歸途らしい銀杏返しが、擦れ違ひに残して行つた鬢の香と、何と云ふ對照であらう。

私は六區の方へ出た。

◇

此の四邊を表徴したやうな、あの凌雲閣の十二階を、燈臺の如くに仰ぎ見たり、魔の塔のやうに感じたりした月日は、とうの昔に過ぎ去つて居た。

公園劇場も常盤座もオペラ館も、千代田館もキネマ倶楽部も、去年の秋の怖しさを忘れたやうに、歡樂の渦卷を起して居た。何れも間に合せのバラック建でも、底力の強い復興氣分に、死物狂ひになつて居るやうな、眞劍さが流れて居た。

私はその明るい六區を通つて、昔の十二階下と覺しき一廓の中に出た。

◇

銘酒屋や新聞縦覽所が、造花屋や繪端書屋に代つて、漸く存在して居た私娼窟は、もう跡方

もなく根絶して居た。

そこに数々の「御待合」やら葺屋やら、果物屋やらおでん屋やらが「へゑ、昔はそんなものが有りましたか」と云つた風に、極めて平和らしく軒を並べて居た。「ちよいと、ちよいと」と呼び込む若い女の聲も聞かぬば、浮かれ男の情慾を唆るやうな鼠鳴きの聲も、もう其の響を絶つて居た。あの十二階が崩れ壊はれたやうに、淪落の女の群も、此の界限から、何れかへ退散し四散したのであらう。

◇

吉原へ通ふ千束町の通りにしても、先を争ふ車夫の掛け聲に、怯びやかされた時代は、昔の夢と過ぎて居た。一帯が安價な明るさに燦いて居ながら、バラックの秋の夜は物淋しくて、雨さへ又ポツリポツリと降り出したりして來た。

私は千束町の通りを、昔懐しい友達でも訪ねるやうな氣持になつて、吉原の方へ歩いて行つた。電車で山谷の方へ出るよりも、龍泉寺口へ廻るよりも、私にはその方が、何となく嬉しかった。

あれから後の吉原は、何うなつたことであらうと、私はそれが知りたかつた。

復興の吉原遊廓

——秋雨の夜を歩く——

吉原遊廓も曲りなりに、復活して居ると共に、復興途上にあると云ふ氣持がして居た。見返り柳から大門にかけて、界限一帯の色彩も明るく華やかに、在りし日の歡樂を偲ばせて居た。仲の町の兩側には引手茶屋が軒を列べて、秋の夜をさんざめいて居る二三組の氣配がして居た。一臺の黒札自動車が勢ひ好く丸小尾張の前に停ると、地廻りらしい三人連れが、ストロノ節を口誦みながら、千鳥足に運んで居た。

時代に反比例して居ると云つても、此の一廓には享樂の渦が卷いて居た。

◇

昔は二階三階の大夏高樓が、江戸町にも京町にも、角町にも揚屋町にも、堂々と軒を連ねて居た。大店、中店、小店の數々は、寫眞店になつてしまつたと云つても、前年の大震災前までは、まだ不夜城の盛觀を呈して居た。そこに捨難い遊廓氣分、吉原情調と云ふものが流れて居て、人々の遊心を唆つて居た。